

2005年度

キリスト教活動ハンドブック

明治学院大学宗教部

2005 年度キリスト教活動案内

新入生のみなさんへ
明治学院大学のキリスト教精神
宗教部 ユニークな大学のユニークな部署

学長 大塩 武
副学長 鶴殿 博喜
宗教部長 水落 健治

キリスト教活動案内

1. 大学礼拝・特別礼拝
2. キリスト教週間
3. 読書会
4. Peace Café
5. 沖縄ピースカフェ
6. 沖縄音楽への旅
7. オルガン講座
8. 学生宗教活動懇談会
9. ペンテコステの集い
10. 演奏会
11. 明治学院大学音楽祭
12. ワークキャンプ(国内・国外)
13. 平和を考える旅
14. クリスマスツリー点灯式・市民クリスマス・コンサート
15. クリスマス礼拝(横浜)・燭火礼拝・音楽礼拝
16. 宗教部・宗教センターの連絡先

正規授業科目〔明治学院共通科目〕について

1. オルガン実習 1・2
2. ワークキャンプ A・B

宗教部の活動に参加して

オルガン講座受講生感想文
アジア学院ワークキャンプ参加者感想文
フィリピンワークキャンプ参加者感想文
沖縄ワークキャンプ参加者感想文

チャペル奨励集

~「大学とキリスト教」より
地の塩、世の光
チャペルのあるキャンパス

永野 茂洋
坂口 緑

~キリスト教週間「世界平和と日本人」より
高遠菜穂子:平和と愛
暴力の連鎖を断ち切るために
イラク・パレスチナの現状
『毒麦』を抜こうとする前に

吉原 功
丸山 直起
松本 敏之

~「命」(5月病対策)より
重荷からの開放
あなたは?

吉岡 光人
石川 和夫

~「近隣牧師からのメッセージ」より
無力な者を選ぶ神様
憎まれることを恐れるな

林 巖雄
長津 榮

謙虚さをまず学ぶこと
悲しみを慰めるもの
フィリピンの子供たちと出会って
救われるということ
共に生きるということ
神様の力
天災と感謝
セラフィムの讃美にあわせて
マリアの明暗
心の渇きがいやされるために
クリスマスの闇と光
私を照らす光
叩いたドアの先には?

大塩 光
横山 正美
浜口 春奈
茂木 恵
大野 寿子
大野 順
鍛冶 智也
中山 和子
廣石 望
東野 尚志
深津 容伸
増田 泉
滝川 祐

新入生の皆さんへ

学長 大塩 武

明治学院大学の歴史は、開国直後の1859(安政6)年にアメリカ長老教会から派遣されてきた宣教師ヘボン(James Curtis Hepburn, 1815 - 1911)が開設したヘボン塾に遡ることができます。

ヘボンの功績は明治学院大学に連なる教育機関の創設に留まるものではありません。海外の情報を早急に収集する必要に迫られていた開国直後の日本人にとって、ヘボンが編纂した日本で最初の和英・英和辞典である『和英語林集成』は、今に住む私たちにとって想像もできないような意味を持っていたはずです。また、欧米諸国が達成していた医療水準から大きく後れをとっていた日本において、ヘボンは医師として病気に悩んでいた日本人を助けました。このように、ヘボンは当時の日本人に計り知れない貢献をしています。

新約聖書の英語訳には、“Do for others what you want them to do for you.” (The Gospel According to Matthew 7 : 12 Good News Bible) というイエスの倫理の根幹を成す言葉が示されています。日本語訳では、「だから、人にしてもらいたいと思うことは何でも、あなたがたも人にしなさい」(マタイによる福音書7章12節 聖書 新共同訳)というものです。33年間という時間を日本人のために捧げたヘボンの生涯を貫く信念は、“Do for Others”に他なりません。私たちの明治学院大学は、このヘボンの生涯を貫く理想を教育の理念として掲げています。この教育の理念は私たちの大学、学生そして教職員の進もうとする道を照らしてくれるはずです。

人間は誰でも人に役立つことができます。皆さんが誕生したときご両親はどんなにか喜ばれたことでしょう。皆さんの“Do for Others”はそこから始まりました。人間の幸せは突き詰めれば、自らの存在が人のために役立っていることを実感したときかもしれません。明治学院大学の理念を、それぞれの立場で実践していただければ幸いです。

明治学院大学のキリスト教精神

副学長 鵜殿 博喜

例外はあるでしょうが、私学は、一般的には、志のある人(たち)が教育の理想を抱いて建て上げた学校です。そのような数ある私学のなかで、明治学院大学は建学の精神をキリスト教にしています。キリスト教といただけでは漠然としていて、意味がよくわからないかもしれません。明治学院のキリスト教は、幕末にはるばる太平洋を渡って来日したヘボンとその他の宣教師たちのクリスチャンスピリットであるといっただけでよいでしょう。ヘボンが医療活動をしながらキリスト教を伝えたということは、21世紀のこんにちに生きる私たちにもいろいろなことを示唆してくれています。人間の魂の救済(信仰)と肉体の癒し(世俗の活動)は決して矛盾するものではなく、キリスト教は魂と肉体の両方を含んだ全人格的宗教だということを、ヘボンたちは教えてくれました。それはまたフロンティアスピリットでもあります。明治学院百数十年の歴史は、社会で活躍する多くの人びとを輩出したという意味で、フロンティアの歴史と言えます。

明治学院大学は、学生の皆さんにキリスト教の信仰を押しつけるようなことはいっさいいたしません。ただキリスト教とはどういう宗教なのか学んでほしいとは思っています。そこで、必修科目として「キリスト教の基礎」という科目を設けています。これは明治学院がその存在を証明するための中核的科目です。時代が進み、科学が進歩すれば宗教はなくなると思う人がいるとすれば、それはとんでもない誤解です。現代の世界を見れば、宗教がどんなに重要かわかりますし、宗教の理解なくして世界の人びととの相互理解はむずかしいということも、現代においてますます明らかになってきました。明治学院大学に入られたみなさんには、長い歴史と建学の精神から生まれた伸びやかでリベラルな雰囲気の中で、存分に学び、存分に活動してくださることを願っております。

宗教部 - ユニークな大学のユニークな部署

宗教部長 水落 健治

今から10年ほど前のことになりますが、第二次大戦終結50年の節目にあたって、中国が日本の第二次大戦中の戦争責任を厳しく糾弾してきたことがありました。当時の村山内閣は、日本が支払わなければならない賠償金のことを恐れてか、戦争責任を認めることをダラダラと延ばし続けていたのですが、あたかもそれに呼応するかのよう「明治学院の戦争責任・戦後責任の告白」を行う礼拝が当時学院長であった中山先生の提唱のもとに白金チャペルで行われ、明治学院が戦中・戦後の責任を真摯に受け止め、これからの教育を新たな決意をもって行ってゆくことを決意した、という出来事がありました(1995年6月10日)。

このできごとは、当時の内閣の歯切れの悪さとの見事な対比と映ったからでしょうか。マスコミに大々的に取り上げられました。私の見たニュース番組では、著名なニュースキャスターが「内閣がうじうじしているときに、キリスト教大学の名門明治学院がとった行為は、いかにも爽やかな風を私たちの心に吹き込んでくれた」とのコメントをしていたことを覚えています。

今、それから10年経ってこの出来事を思い起こしてみると、学院長が戦争責任の告白を行うことを提案し、学院がこの提案を受け入れたことの背後には、明確なキリスト教の精神があったと思います。キリスト教は、「人間は神の似姿に創造された」と語って人間が尊厳もつことを主張しますが、同時に「人間には原罪がある」と語って人間が自らの醜さにしっかりと向き合うことをも教えます。そしてその認識に立った上で、そこからの解放の道を模索することをも教えるのです。

明治学院大学の中に「宗教部」という、他の大学にはない部署があるのは、授業ではなかなか伝えることができないこのようなキリスト教の考え方を学生諸君に知ってもらい、教師と学生とが共にこの考え方に促されて様々な問題に取り組んで行こうとしているからです。たとえば、私が参加した「沖縄から平和を考える旅」という企画では、第二次大戦

中の激しい銃撃戦の跡を見たり、住民の方々が集団自決した洞窟(ガマ)などを見たりしましたが、それだけでなく、現在の沖縄が本土の行政などからいかに取り残されているかなど、沖縄の人々が現在なお抱えている状況が現地の方々からつぶさに語られ、過去の日本人のみならず、現在の日本人がいかに本土中心・自己中心の心で沖縄のことを考えているかを改めて思い知らされました。

今、私は、大学の中でギリシア悲劇や哲学、ルネッサンスなどヨーロッパの思想を中心に講義をし、またいくつかの語学(ラテン語やフランス語)をも教えていますが、沖縄でのこの体験は、それから10年経った今もなお、深く微妙な影響を私に与えています。沖縄で経験したことは、私の研究や教育に直接関係があったわけではないのですが、学問領域の壁を越えて私を揺り動かし続けているのです。

私は、明治学院というユニークな大学に学ぶ学生諸君が、在学中にぜひ一度、このような経験をしていただくことを願っています。宗教部には、授業では経験できないことを学ぶ場や企画がこのほかにも数多くあります。どうか気軽に宗教部の扉をたたいてみてください。

キリスト教活動案内

【宗教部】

宗教部は、明治学院大学のキリスト教活動全般を担当している大学の組織です。白金校舎は、チャペルの向かいの記念館という建物の1階に、横浜校舎は、チャペル脇の建物の中に事務室があります。事務室にいらっしゃるのはいつでも歓迎いたしますし、事務室の隣には、それぞれ学生のキリスト教活動に使える集会室があります。

【宗教センター】

本学には学院全体のキリスト教活動にかかわる部門として、「明治学院宗教センター」が置かれています。中学校、白金高等学校、東村山高等学校、大学それぞれの宗教活動について連絡、協力する組織として1989年に発足しました。

【大学礼拝 チャペルアワー】

本学では授業のある毎日(但し土曜日を除く)チャペルで礼拝(チャペルアワー)を行っています。オルガンの前奏を聴き、讃美歌を歌い、聖書に基づくメッセージがあります。メッセージは、本学の教職員、近隣の教会牧師、オルガニスト、学生など、さまざまな分野の方々が担当します。人生の根源的なテーマについて共に考えたり、今社会で起きている問題などを取り上げたりします。チャペルアワーは誰でも出席できます。広く皆さんの出席を歓迎します。聖書と讃美歌はチャペルに用意してあります。

【白金チャペル】 12:35～13:00 (月・火・木・金)

【白金チャペル/夕拝】 17:30～18:00 (水曜のみ)

【横浜チャペル】 12:40～13:00 (月曜から金曜まで)

【特別礼拝】

特別礼拝は、イースターとクリスマスを祝して行われます。

イースターは、キリストの復活を覚える日として、キリスト教会では

盛大に祝われています。本学では新入生の歓迎を兼ねたイースター特別礼拝を行います。

クリスマスは、明治学院のキリスト教活動では最大の行事で、多数の学生が出席しています。音楽系サークルも出演協力します。

新入生歓迎イースター特別礼拝

【白金チャペル】 4月13日(水) 17:30～18:00

【横浜チャペル】 4月14日(木) 13:40～13:30

クリスマス特別礼拝

【白金チャペル】 12月14日(水) 17:30～19:15

【横浜チャペル】 12月12日(月) 12:40～13:30

12月16日(金) 18:30～20:00

【キリスト教週間】

特定の期間をキリスト教週間として、その週の統一テーマのもとで、礼拝ほか様々な企画(福祉事業、医療活動、教育事業、政治活動など社会の幅広い分野で働く方の講演や、話題作となった映画の上映会など)を行っています。特に、横浜校舎のキリスト教週間最終日は《戸塚まつり》の大学企画イベントとしても参加しています。

2005年度のキリスト教週間は、横浜校舎が5月30日(月)～6月4日(土)、白金校舎は10月17日(月)～21日(金)の予定です。行事の詳細については白金通信や学内の掲示、週報、ホームページ等で確認してください。

【読書会】

読書会は誰でも自由に入ることができる講座です。授業のある期間に設定されていますので、時間の都合のつく方は参加してください。

「読聴会」

～ヘボンの手紙を読んでみよう～

講師：久山 道彦 文学部教授

日時：前期は、次の4回の予定です。

5月11日(水)、25日(水)

6月15日(水)、29日(水)

後期は、次の4回の予定です。

10月12日(水)、26日(水)

11月9日(水)、30日(水)

時間は、7限終了後、午後9時20分から1時間ほどです。

場所：白金校舎 本館9階 キリスト教研究所

「読書会」というのは、何か不思議な言葉です。何故、皆で集まって本を読むのでしょうか。やりたいことが山ほどあり、ただでさえ時間が足りない私達が、自分一人で「読書」すればそれで済むとも思えるのに、いったい何故、わざわざ「会」を開いて偕に本を読むのでしょうか。

そんなことをつらつら考えているうちに、2週間に1度、水曜日の授業後のひととき、同じ本を読み、友の想うことを聴き語らう場を持つと考えました。夜の授業が終わって、9時20分から小1時間ほど、飲み物でも持ち寄って、お菓子でもつまみながら、友の言葉の中に、その表情の中に、一人で読む時には得られない「宝」を発見したいと思いません。

この集まりの名を「読聴会」としたのもそのような想いからです。始まって13年目を迎えますが、毎年、新入生から卒業生まで色々なメンバーが集う、気楽でささやかな会です。でも、本を媒介として「自前の頭」を創りながら、柔軟にして強固な志を持って、私達を取り巻く現実を、そしてなによりも自分自身を深く探求していきましょう。

今年度は、「ヘボンの手紙を読んでみよう」と題して、本学の創始者であるヘボンの書簡を読んでみたく思います。彼はいったい何を考え、こ

の東洋の島国で医療活動や聖書翻訳、そのための辞書編纂をしていたのでしょうか？彼は明治学院の学生に何を望んでいたのでしょうか？彼の日本人観や、親戚に打ち明けた悩み、本音を知りたくありませんか？まずは、杉田幸子著『横浜のヘボン先生』(いのちのことば社)や村上文昭著『ヘボン物語』(教文館)で、ヘボンが日本に滞在した時代状況を学びましょう。それから、いよいよ本学の高谷道男先生が訳出された『ヘボン書簡集』を、皆で読んでいく予定です。これは、コピーを用意しますからご心配なく。途中で、『和英語林集成』を開いてみるのも楽しいかもしれませんし、望月葉子著『ヘボンの生涯と日本語』やW. E. グリフィス著『ヘボン 同時代人のみた』で多角的にヘボンという人物を検討するのも興味深いかもしれませんね。島崎藤村著『桜の実の熟する時』をさらに遡り、100年以上の時を越え、ヘボンをめぐる出来事を追体験できればと思います。

大学時代に何か変わった経験をしてみたい方、この案内を読んで興味を覚えられた方、明学がお好きな方、嫌いな方、誰かと何かをしたい方、誰かの読後感想を聴きたいと思っておられる方、「五月病」にかかりそうな方、「世の中が間違っている」と断じたい方、「人間なんて所詮そんなものよ」とうそぶいておられる方、議論をふっかけてたくて仕方がない方、孤独や憎しみ、嫉妬に苦しんでおられる方、読書によって自分の心や精神を立て直そうとしておられる方、読書会に燃えておられる方等、飲み物を片手に、おやつを楽しみに是非どうぞ。時々または偶然の飛び入り参加者も大歓迎です。無理をせず、大学生活の緊張からリラックスするつもりでどうぞ。

「読書会」

講師：永野 茂洋 教養教育センター教授

日時：参加者と相談して決めます

場所：横浜校舎 1号館4階1417号室 永野研究室

聖書と聖書以外の本を少しずつ読んで、「こころ」と「脳ずい」と、ついでに「おなか」も少々満たそうという、少々贅沢な「笑う読書人たち」の会です。

学生時代に聖書をゆっくりと考えながら読む機会を持つことは、他に代え難い貴重な経験であるように思います。この会が、参加者にとって

そのようなよき聖書との出会いの時になればと願っています。

毎月1～2回程度のペースでやります。参加資格は問いません。どなたでも気軽にご参加ください。自分はどうも「異人」のようだという自覚のある学生諸君を大いに歓迎します。

参加希望者は、日程を調整しますので、下記のメールアドレスに直接ご連絡くださるか、あるいは、1号館3階にある教養教育センター附属研究所の事務室までお訪ねください。

永野研究室（横浜校舎 1号館4階1417号室）

電話 045-863-2085

電子メール nagano@gen.meijigakuin.ac.jp

HAWAIIAN ENGLISH BIBLE STUDY

講師：ODANI, Sean 講師（英語）

日時：4月25日（月）16：45～17：45

場所：横浜宗教部集会室

This Bible Study will take a look at the unique Hawaiian English Bible. Descendants of Japanese immigrants make up a significant portion of Hawaii's population. Their ancestors, the Issei and Nisei, contributed much to the development of the style of English spoken in Hawaii today. This study will compare the Japanese Bible, the standard English bible, and the Hawaiian English Bible. Aloha.

（人である）とは？－ハナ・アーレント『人間の条件』を読む

講師：寺田 俊郎 法学部助教授

日時：4月20日（水）スタート

とりあえず第1、第3水曜日の昼休みの予定だが、集まった人々の希望を考慮して決める。

場所：横浜校舎 寺田俊郎研究室（1415）

「人として尊敬できる」、「人として許せない」、「人扱いされなかった」、「人でなし」などと言う。しかし、人であるとはどういうことだろうか。人であることは誰かであるということであり、たんに何かであることではない。何かであるということとはた

んなる物の性質である。では、誰かであるということと何かであるということ、人であるということと物であるということとの違いはなんだろうか。

このような問いを、20世紀にアメリカ合衆国で活躍した亡命ユダヤ人の思想家ハナ・アーレント（Hannah Arendt）の代表作の一つ『人間の条件』（ちくま学芸文庫）を読みながら考えたい。

心で味わう聖書

講師：深谷 美枝 社会学部助教授

日時：4月15日（金）スタート

原則として木曜日（日程の詳細は応相談）

16：30～18：00 19：45～21：15

場所：白金校舎 ヘボン館10階 深谷研究室

2004年度は、キリスト教とは縁もゆかりもない学生を中心に、様々な学生と共に聖書を読み、辛い時や落ち込んだ時に心を支えられたり、生き方を鋭く示されたりという経験を分かち合ってきました。

クリスチャンになる気もないけれど、ちょっと心の支えが欲しい、キリスト教の学校に来たついでに聖書でもというあなた、お待ちしております。

興味のある方は、なるべく4月15日（金）16：25に深谷研究室までお越しください。

【Peace Café】

誰でも歓迎、出入り自由の、とっておきのカフェです。お菓子を食べながらゲームをしたり、文化や習慣などいろいろなことについて話し合ったりしています。日本語でも英語でもOKなので、英語がちょっと苦手という人も気軽に参加してください。逆に、英会話に挑戦したい人も大歓迎です。一人で参加してもすぐに打ち解けられるアットホームなプログラムです。試しに一度覗いてみて下さい。

Everyone is welcome to Peace Cafe! Enjoy gourmet coffee, tea and music in a relaxed, cross-cultural atmosphere. Come by yourself or bring your friends. Peace Cafe is a great place to study or meet

new people. Japanese and English speakers of any level are welcome. Information on NGOs, Religious Office activities, Work camps, and Overseas Exchange programs is available. Come Hang Out at Peace Cafe!

担当: Christian Zebley (本学協力宣教師)

日時: 4月12日(火)スタート
毎週火曜日 14時~18時

場所: 白金校舎 記念館1階 集会室

【沖縄ピースカフェ】

日本人として知らなければならない沖縄の歴史・現状を中心に「平和」について考えるひとときです。主に第二次世界大戦の「沖縄戦」の映像や、沖縄に置かれている軍事基地の現状などを取り上げたビデオを毎回観ます。それをもとに沖縄について、そして日本の現状について語り合しましょう。沖縄に行ったことがある人もない人も、沖縄に興味のある人は大歓迎です。また夏に行われる宗教センター主催の「沖縄から平和を考える旅」に参加してみたいと思っている人も是非来てくださいね。

講師: 大塩 光 (蒲田新生教会牧師・本校卒業生)

<白金校舎>

日時: 4月15日(金)スタート
毎月第1、第3金曜日 16:25~17:55(5限)

場所: 場所は決まり次第お知らせいたします

<横浜校舎>

日時: 5月13日(金)スタート
毎月第2、第4金曜日 17:00~18:15

場所: 横浜宗教部集会室

【沖縄音楽への旅】

今年初めての企画です。以前から「沖縄ピースカフェ」では取り上げていた企画なのですが、それを独立させることにしました。それほどみなさんに聴いて欲しい沖縄の曲が多いのです。毎回数曲を紹介し、歌詞を味わい、歴史なんかに触れられたらと思います。ジャンルは沖縄の

アーティストのものであれば何でも取り上げますので、民謡やポップスをメインに、ロックやコミックソングなども取り上げる予定です。バラエティに富んだ内容になると思います。沖縄に興味ある方は是非参加してくださいね。音楽の面からも楽しくアプローチしましょう。

講師: 大塩 光 (蒲田新生教会牧師・本校卒業生)

日時: 4月15日(金)スタート
毎週金曜日 14:45~15:45

場所: 白金校舎 記念館1階 宗教部集会室

【オルガン講座】

オルガン講座を受講した学生は、正規授業カリキュラムの「明治学院科目」である「オルガン実習1」「オルガン実習2」の各2単位を履修することが可能です。その際には、あらかじめ担当者の履修許可をもらって登録してください。〔「正規授業科目〔明治学院科目〕について」の「オルガン実習1・2」の説明を参照。〕

両校舎のチャペルにはパイプオルガンがあり、毎日の礼拝や行事で演奏されていますが、聞くばかりでなく、弾いてみてパイプオルガンのすべてを体験しよう、という講座です。横浜・白金校舎それぞれのオルガニストがレッスンを行っていきます。パイプオルガンへの興味は皆さままで、内側にもぐりこんで熱心に構造を調べる人、憧れのトッカータとフーガをめざして練習に励む人などいろいろです。キリスト教主義大学の特色あるプログラムのひとつとして、カリキュラムが組まれています。礼拝奏楽や発表会など、受講の成果を発表する機会も開催されています。また、横浜校舎では、リードオルガン、パイプオルガンと他の楽器とのアンサンブル、パイプオルガンの体験レッスンもあります。

白金・横浜校舎それぞれ以下の方法で受講者を募ります。

オルガン講座2005年度受講生募集要領

原則として鍵盤楽器経験者を対象とし、オーディションと面接を行います。

<横浜校舎の場合>

パイプオルガン

4月11日(月)までに、所定の申し込み用紙に記入し、宗教部事務

室に提出してください。申し込み用紙は、宗教部事務室で4月5日(火)から配布します。

オーディションの日程は、4月12日(火)、13日(水)、14日(木)、15日(金)とし、希望日時は申し込み時に先着順で受け付けます。

課題曲はJ.S.バッハ『インヴェンション』2声第1番八長調と任意の自由曲(長い曲の場合はその一部)を弾いて頂きます。課題曲の楽譜は、宗教部にも用意してあります。

オーディション結果の発表は4月18日(月)横浜宗教部までお越しください。

リードオルガン・他楽器とのアンサンブル講座・パイプオルガン体験レッスン

随時受付をいたします。

<白金校舎の場合>

4月14日(木)までに、所定の申し込み用紙に記入のうえ、白金宗教部に提出して下さい。申し込み用紙は、4月5日(火)から白金宗教部にて配付いたします。

オーディションは、4月18日(月)、19日(火)、20日(水)いずれかの14:00~16:00の間で都合のよい時間に大チャペルに直接おいでください。日時予約の必要はありません。

課題曲は2曲、讃美歌539番とJ.S.バッハ『インヴェンション』2声第2番八短調です。楽譜は白金宗教部に用意しています。申込時にお受け取りください。

【学生宗教活動懇談会】

大学の宗教行事を積極的に支援している学生サークルがあります。新入生歓迎会、フィリピンワークキャンプ、明治学院音楽祭、クリスマスツリー点灯式、クリスマス礼拝などの行事には宗教活動協力学生団体所属のサークルが参加・協力しています。2005年度現在の所属サークルは以下の通りです。

グリークラブ	管弦楽団
吹奏楽部	白金ベルハーモニーリンガーズ
チャペルクワイア	クラシックギター研究会

マンドリンクラブ
舞台技術研究会
グリーン・リーヴズ
L.M.S(軽音楽サークル)
人形劇団ZOO
白金ウォーク

ヘボン聖書研究会
国際クリスチャン同好会
JAZZ研究会
ゴスペルクワイア
ハビタットMGU

これらの学生団体のリーダーと宗教部とが1年に1~2度会合し、行事計画やサークル活動相談などを行っています。

【ペンテコステの集い】

ペンテコステとは、「教会の誕生日」という意味で、イースター、クリスマスにならぶキリスト教会の三大祝祭のひとつです。これは白金校舎周辺にある日本キリスト教団の諸教会と共催で行なわれる集いです。近隣教会と学院が良い協力関係で結ばれるよう30年余にわたって行われてきました。礼拝だけではなく、各教会の聖歌隊等による音楽の集いも行なわれます。学生のサークル等の参加も歓迎しますので、興味のある方はお問い合わせください。

今年は5月15日(日)に行います。連絡は白金宗教部事務室まで。

【演奏会】

現在は主に横浜チャペルで年に1~2回、秋にパイプオルガン・合唱をはじめいろいろなジャンルのコンサートを行っています。宗教音楽という堅苦しいイメージですが、音楽はもともと宗教と深い関わりがあるものでした。演奏曲目の文化・社会背景・作曲者の生涯についての説明など、演奏者のトークもまじえての楽しいコンサートで、このシリーズを楽しみに足を運んでくださる学外からのお客様もいます。演奏会の詳細は学内に掲示してお知らせします。

【明治学院大学音楽祭】

白金祭の一環行事として、毎年、音楽系サークルの大半が一堂に会して日頃の成果を発表するのがこの音楽祭です。

普段のチャペルでは宗教音楽が主に演奏されますが、チャペルは決してクリスチャンだけの特別な場所ではなく、誰でもいつでも気軽に入れます。あらゆるジャンルの音楽の祭典に、皆さんも聴衆、あるいはプレ

イヤーのひとりとして参加してください。

例年の参加サークルは、管弦楽団・吹奏楽部・グリークラブ・グリーンリーヴス・クラシックギター研究会・ベルハーモニーリンガーズ・マンドリンクラブ等です。

【ワークキャンプ】

国内・海外のワークキャンプを計画しています。

<アジア学院ワークキャンプ>

国内は、栃木県の西那須野にあるアジア学院にて、3泊4日の予定で行うプログラムです。アジア学院は、キリスト教を基にアジア・アフリカ諸国から農業、牧畜についての研修をするための留学生を受け入れている学校ですが、日本の学生たちの農業・畜産の体験学習も受け入れています。2005年度もワークキャンプを実施します。ワークは、家畜の世話や畑での作業が中心で、その他に施設の修理などもあります。日頃経験できないような作業ばかりですが、農作業初体験の方でも大丈夫です。

プログラム中は、こうしたワークの他に研修生（留学生）と一緒に農作業をしたり懇親会等交流の場が設けられます。またアジア学院のスタッフによる講演会も開かれます。これらは、普段あまり考えることのない食糧問題を真剣に考える良い機会となっています。働いて汗を流すことの気持ち良さ、空腹そして食事のありがたさなど、労働に限らないたくさんの経験が待っています。

また、キャンプを通じて、いろいろな人と交わり、友人を作りましょう。そして、自分の新たな可能性を開きましょう。

今年のアジア学院の日程は、8月に実施の予定です。詳細は白金宗教部事務室に問い合わせして下さい。

<海外ワークキャンプ>

2004年度生以降の学生は、海外ワークキャンプに参加する場合は、正規授業カリキュラムの「明治学院科目」である「ワークキャンプA」「ワークキャンプB」の計4単位を履修することができます。〔21ページの「正規授業科目〔明治学院科目〕について」の「ワークキャンプA・

B」の説明を参照。〕

今年度の海外ワークキャンプは、昨年度と同様にフィリピンで行う予定です。キリスト教主義の国際NGOであるハビタット・フォー・ヒューマニティとの協力で、2週間で住宅建設とコミュニティサービスを行うプログラムを計画しています。一戸の家を完成させて、住人となる人に鍵を渡してキャンプを完了します。

4月から5月にかけて、ワークキャンプの説明会を白金・横浜両キャンパスで行います。その際に参加希望者の登録をし、6月から9月にかけて10回程程度の事前研修会と2～3回の研修合宿を開催します。そこでは、現地での活動内容、安全や健康管理の方法、ハビタット・フォー・ヒューマニティについての知識、フィリピンの社会状況などの学習を含んだリーダーシップ研修を受けることとなります。また、1つのワークキャンプグループとして役割分担も決め、準備を進め、現地に向かいます。

現地では、朝から夕方まで建設現場での作業が続き、夜や週末は見学や娯楽で楽しめます。最終日には、献堂式の後、さよならパーティで幕となります。また、建設作業とは別に、現地のNGO/NPOと協力して、コミュニティ支援のための活動に参加し、個別の研究プロジェクトをします。宿泊は、ホテルなどの宿泊施設で、ホームステイもあります。

帰国後は、報告書の作成と報告会を実施し、それまでに経験したことを深め、客観化させ、多くの人々と共有させる試みをします。

2004年度の参加費は、14日間で約13万円でした（交通費、宿泊費、食費、保険および建設費用を含む。）その他に、事前研修会の費用が2万円程度、予防接種の費用が2～3万円掛かっています。今年度の海外ワークキャンプは夏休みの期間に実施予定です。詳しくは白金宗教事務室に問い合わせして下さい。

【平和を考える旅】

平和を考えるスタディーツアーです。今年度も8月下旬に沖縄県を訪ね、戦跡や文化遺産などを見てまわる予定です。旅の参加条件としては、事前学習会になるべく出席し、沖縄の文化や歴史などに親しむことです。両校舎で沖縄に関する学習会を開きますので、参加希望者はぜひ出席して下さい。（【沖縄ピースカフェ】参照）

戦跡巡りの学習の他に、沖縄に残されている手つかずの自然を満喫す

るプログラムもあります。また8日間の旅のうち1日は自由行動として、少人数で自分達の関心に合わせて沖縄を楽しむことができます。

日程等詳細は、白金宗教部事務室までお問い合わせください。

【クリスマスツリー点灯式】

クリスマスを迎える約1ヶ月前、白金、横浜両校舎で電飾されたクリスマスツリーの点灯式が行われます。白金校舎では、高校と大学が協力し合って計画、実施しています。点灯式であかりが灯されたクリスマスツリーは、クリスマスまでの毎日、日没から夜11時まで、クリスマスシーズンのキャンパスを華やかに彩ります。横浜校舎の点灯式は、学生サークルのL.M.S(軽音楽サークル)や舞台技術研究会が中心になって、学生主体の行事として盛大に行われます。また近隣の方々や保育園の子どもたちも参加しており、大学と地域の交流の場にもなっています。

【市民クリスマス】

横浜校舎のチャペルで行なわれる、地域住民を対象としたクリスマスの集いです。特に子ども向けのプログラムによって進められています。

【クリスマスコンサート】

クリスマスを祝したコンサートが両校舎で行われます。白金チャペルでは、イギリス大使館クワイヤのチャリティコンサートが、恒例になっています。横浜チャペルでは、パイプオルガンとフルートの演奏を中心とした『風のうた』というコンサートが開かれています。

【クリスマス礼拝】(横浜校舎のみ)

12月12日(月)はクリスマス特別礼拝として、通常のチャペルアワーの時間帯に時間を延長して行われます。礼拝の中では、学生団体によりクリスマスにちなんだ曲も演奏されます。今年の礼拝では、学生バンドが演奏し、いつもとちょっと違った雰囲気でした。

【クリスマス燭火礼拝】

白金チャペルの12月14日(水)と横浜チャペルの12月16日(金)のクリスマス特別礼拝は、燭火(キャンドルライト)礼拝です。白金チ

ャペルの礼拝後には、キャロル(クリスマス讃美歌)を歌いながら大学周辺を歩くキャロリングも行います。蠟燭の火だけが灯されたチャペルで、音楽と瞑想とメッセージの荘厳な礼拝が行われます。

【クリスマス音楽礼拝】

毎年12月23日に、明治学院の卒業生・在校生・教職員が集まって厳かにクリスマスを祝って、白金チャペルで行われます。

クリスマスの名曲はたくさんありますが、その中でもキリストの誕生物語を音楽にしたバロックの宗教音楽を中心に、音楽をちりばめたこの燭火礼拝は、巷のクリスマスとは違う心安らかなひとときを与えてくれます。

ご家族の参加も歓迎です。

【宗教部・宗教センターの連絡先】

宗教部ではホームページを公開しています。毎日のチャペルアワーの情報ははじめ、主催プログラム・行事の案内や学生の感想などを中心に構成しています。

<http://www.meijigakuin.ac.jp/~shukyo/>

白金事務室 白金校舎 記念館1階
〒108-8636 港区白金台1-2-37
電話 03-5421-5218
FAX 03-5421-5459
電子メール shukyos@mguad.meijigakuin.ac.jp

オルガニスト 白金校舎 記念館1階
電話 03-5421-5227

横浜事務室 横浜校舎 チャペル脇建物1階
〒244-8539 横浜市戸塚区上倉田町1518
電話 045-863-2016
FAX 045-863-2017
電子メール shukyoy@mguad.meijigakuin.ac.jp

正規授業科目〔明治学院科目〕について

2004年度生以降の学生は、明治学院科目である「オルガン実習1」「オルガン実習2」「ワークキャンプA」「ワークキャンプB」(各2単位)を卒業単位科目として履修することができます。以下は、講座の概要です。

オルガン実習1・2

半期2単位科目。

【講義のねらい】

パイプオルガンの演奏を習得する。並びにこの楽器の生まれたヨーロッパの音楽史・社会背景・他の学問との関連(修辞学・美術・言語等)も学び、オルガン文化とヨーロッパ社会の結びつきを理解する。

【講義内容】

チャペルのパイプオルガンを使用し、個人レッスン形式(各人のレッスン日時は、講師との相談で決められるので各自異なる)で行う。その他にパイプオルガンを使用しての個人練習時間が与えられる。必ず練習の上レッスンに臨むこと。オルガンの成立と歴史、楽器の構造、バロック時代までの様式(楽器・楽曲共に)の3点に重点を置き、随時講義も行う。J.S.バッハまでの時代の様式と音楽語法を理解し、演奏法を理解・習得する。

【教科書・参考書等】

"A guide to duo and trio playing" (J.V.Oortmerssen 著),
"Organ Technique, An historical approach" (S.Soderlund 著),
「古楽とは何か」(N.アーノンクール著・音楽之友社)の3冊から抜粋し、参考書として使用する。

【成績評価の方法】

平常点40点、実技試験60点(試験時に演奏する曲目と作曲家についてのレポートを含む)。

【その他】

担当教員の事前履修許可が必要。任意のオルガン講座を受講しているこ

とが望ましい。任意のオルガン講座受講希望者には、4月にオーディションが課せられる。詳細は宗教部事務室に問い合わせの事。

ワークキャンプA・B

「ワークキャンプA」「ワークキャンプB」は、同時履修すること。4単位はセットで認定される。

【講義のねらい】主に住宅建設を行う海外でのワークキャンプの経験および事前・事後の研修・学習を通じて、第三世界における社会・政治・経済の諸問題、都市および農村部の住宅問題、南北問題、開発と教育に関わる諸問題、NGO/NPOの活動とボランティア、リーダーシップ、異文化コミュニケーションなどについて、多様な視点から学ぶ。

【講義の内容】4月の説明会の後、6月から9月にかけて10回程度の事前研修会と2~3回の研修合宿、9月中旬に2週間の海外のワークキャンプを実施し、帰国後、報告書を作成し、課題に基づいて学んだことを報告会で報告し、講座を終了する。

ワークキャンプは、現地のNGO(ハビタット・フォー・ヒューマニティ)と協力し、主に住宅の建設作業が中心の活動を行うが、「開発と貧困」に関わる他のNGOの活動に参加し、経験を深める機会も与えられる。

実習費用は、ワークキャンプ参加費が13万円程度で、その他、事前研修の合宿等に2万円程度を徴収予定。参加募集定員は25名程度。宗教部担当教員が引率・指導を行う。

【教科書・参考書等】必要であれば、事前研修の際に紹介予定。

【成績評価の方法】事前研修、現地でのワークキャンプ活動、事後の報告を通じて、評価する。

【その他】履修希望者は、4月の説明会には必ず出席すること。説明会にて履修の方法、ワークキャンプの日程および参加費用等の詳細を説明する。説明会については、宗教部からの掲示を注意してみるこ

オルガン講座を受講し感じたこと

犀川 登紀子

そもそも、私がオルガンという楽器に興味を抱いたのは中学時代のような気がします。中学時代はピアノに対する思い入れが強くなった時期でした。そんな時好きで弾くようになったのがバッハの曲集です。バッハの曲は、ベートーヴェンのような勢いのある力強さやショパンのようなきらきらとした華やかさとはまた違った魅力を放って聞こえました。

4年前の春、この横浜チャペルで行われた入学式の際、私は初めて生のオルガンの音色を聞きました。「これだ！」と思った瞬間でした。さらに、本学にはそのオルガンを学生に開放し、レッスンを受けさせてくれるオルガン講座があったのです。入学したばかりでサークルを何にしようか迷っていたときでも、オルガン講座を受講することははっきりと心に決めていたのを覚えています。

こうして始めたオルガン講座ですが、それは予想以上に難しく、また充実したものとなりました。まず、レッスンはパイプオルガンという楽器の構造を理解することから始まりました。大きな見た目とは裏腹に、とてもデリケートな楽器であると思いました。そして、そのようなパイプオルガンを弾きこなすことは並大抵のことではなく、練習の際、足と手がこんがらがるのは毎回のことで、楽譜を追うので精一杯…。しかし、ある時先生の「しっかりと自分の弾いている音を聞いて」という言葉で改めてオルガンの奥深さに気付かされました。

4年間で2回の発表会と礼拝で演奏させていただき、念願であったバッハのパイプオルガン演奏も実現することができました。そうした経験は、音楽を通しキリスト教を肌で学ぶ良い機会であったと思います。そして何よりもオルガンを通して先生をはじめ多くの方と出会えたことは、私の大学生活をとてつ豊かなものにしてくれました。細々ながらもこうして4年間続けてこられたのは先生の温かなご指導と多くの方の助けがあったことです。

これからもこの出会いを大切に生きていきたいと思います。

国際学科 4年

オルガン講座を受講して

根岸 実由

1年生の頃、初めて聞いたパイプオルガンの音色に、とても驚いたことをよく覚えています。こんなにたくさんの音色が出せるなんて、なんて不思議な楽器なのだろう。きっと私がまだまだ知らないような音も奏でられるのだろうと、音の可能性に惹かれて4年間横浜と白金のチャペルに通い続けました。

パイプオルガンはひとつの大きな楽器ですが、演奏している間には曲によって全く違う楽器に触れている感覚になります。同じ曲の中でさえ、軽やかに跳ねるような高音からチャペル全体に響き渡るようなフルオーケストラ並みの迫力の低音など、目まぐるしく変化するものもあります。私も4年間でたくさんの曲を演奏し、たくさんの方の演奏を聞いてきました。全ての曲に思い入れがあり忘れがたいのですが、中でも特に印象的だった曲があります。とても華やかで、「まるで音が降り注いでくるような曲」という演奏者の表現がぴったりの曲でした。パイプオルガンはチャペルやコンサートホールなどの空間と一体になって音を届ける楽器です。その魅力を存分に、しかも目の前で体験できたことは今でも心に強く残っています。自分が演奏するときもそのときの感動を思い出しながら、貸しきりになったチャペルで様々な音を響かせながら演奏を楽しんでいます。特にクリスマスのころのチャペルの雰囲気は最高です。あんな素敵な空間にいられたことはほんとうに幸せでした。時代を超えて、様々な曲や演奏法について勉強できたことも、貴重な経験です。新しいことを知れば知るほど、演奏の幅が広がった気持ちになって面白かったです。パイプオルガンを通して、先生方や宗教部の方々、一緒に練習をした仲間や演奏を聞きに来てくれた友人たち・家族など、たくさんの方とのつながりを作ることができました。大好きな音楽を続けることで、こうした実り豊かな大学生活を送れたことにとても感謝しています。

英文学科 4年

～アジア学院ワークキャンプ

アジア学院ワークキャンプに参加して

迎田 有香

私が今回ワークキャンプで訪れた栃木県西那須野町にあるアジア学院は、アジア、アフリカの発展途上国から農業指導者になるべき人材を迎え、研修を行っている学校です。約6ヘクタールの学院の敷地には、校舎やセミナーハウス、学生寮、畜舎、野菜畑、水田、養魚池などが立ち並んでいます。ここでは自給自足の生活を原則とし、朝夕の農作業が日課となっています。

「このアジア学院で農業というものを見てみたい、また実際にそれに触れてみたい。」そう思ったことが、私が今回アジア学院のワークキャンプに参加したきっかけでした。

朝もやが立ち込める中、私達は朝6時に起きだし、ラジオ体操、礼拝を終えてから農作業に取り掛かります。木々の中で朝のさわやかな空気を吸いながら身体を動かすと大変ですが、身も心も開放されるように感じられます。敷地内のあちこちに放し飼いの鶏がえさをついばむ姿が見られ、至るところから家畜の鳴き声が聞こえます。私達は今回、アジア学院のスタッフやボランティアの方、留学生達に教えてもらいながら、主に家畜の世話や畑仕事などを分担して手伝いました。

私が4日間で担当した仕事は、炊事や畑の草むしり、土の掘り起こし作業、牛の世話の手伝い、鶏舎の掃除、ルバーブという植物の収穫やジャム作りの手伝いなどです。私は慣れない仕事に案の定手間取ってしまい、もたもたと手際も悪く、日ごろ何もしていないのをあらためて思い知らされるようでとても恥ずかしかったです。それでも仕事をやり終えた後の充実感や、汗を流した後の食事のおいしさはひとしおでした。私が4日間でしたことなど、労働とは呼べないようなささいなことだったかもしれませんが、生産に携われる喜びや農業の大変さを、身をもって体験することが出来たと思います。

また、豚舎では生まれて数日目の子豚達を見ることが出来ました。皆、

とても小さくまだ目も見えていないように見えるのですが、キイキイと鳴きながら、争うように母豚のお乳にしゃぶりついていました。しかし、そのうちの何頭かは押しのけられてしまって飲むことが出来ず、他の子豚達の周りをうろうろしていました。聞けば、生まれた子豚は14匹だけれども、母豚の乳首は11個しかないため、母親のお乳を充分に飲めない弱い子豚は衰弱して死んでしまうのだそうです。そのお乳が11個しかないというのも、もともとは12個あったものが、ある子豚がものすごい力で吸い付いたところ、1個食いちぎられてしまったのだとか。通常だいたい4匹ほどは死んでしまうそうですが、私達がアジア学院に滞在している間にも何匹かが死んでしまいました。飼われている豚でさえ、生まれたばかりから厳しい生存競争にさらされていることを知り、私は衝撃を受けました。

私達が通常目にする食べ物は、商品として加工され、お店に並べられたものばかりです。私達は普段、その出所に思いをはせることはあまりありません。しかし、それらはもとをたどればれっきとした生きた動物達、植物達であり、彼ら自身も懸命に生きようとしているのです。畜舎から発せられる強烈な「生き物の体臭」もそれを物語っているように思えました。鶏舎の鶏は卵をとられまいと、軍手をした私の手をつきました。「ごめんね。」そう言って卵を取らせてもらいながら、私は今までにこうして卵に感謝をしたことがあったらどうかと、日頃の食べ物に対するぞんざいな扱いを反省しました。そして、食べ物のありがたみを忘れてはならない、粗末にしてはならないと肝に銘じたのでした。

またインドやバングラディッシュ、ネパール、フィリピン、カメルーン、ナイジェリアなどたくさんの国から訪れている留学生達と触れ合えたこともとても貴重な体験になりました。アジア学院には様々な文化や宗教、価値観を持った人間が留学しています。留学生の中には、本国に帰れば異なったカーストであるために同席することさえ許されない、という人達もいます。けれどもここでは皆、同じテーブルを囲み、食事をしています。またキリスト教徒もイスラム教徒も仏教徒もヒन्दゥー教徒も共に学び、一緒に生活しています。アジア学院の公用語は英語であり、英語力のなさから言いたいことも伝えられず、私は随分歯がゆい思いもしました。けれどもここでは、様々な文化や宗教が平和に共存しあっているという印象を受けました。

留学生との交流会のバーベキューで牛肉を食べている時に、私の隣にいた方はネパール人で、牛を神聖視するヒンドゥー教徒でした。「これはまずいな。」と思いましたが、彼は「文化が違うから、しょうがないことだよ。」と言ってくれました。そして「私達にとっては、牛は母親と同じだから食べないんだよ。」とも教えてくれました。また、ここの留学生達は、帰ってから国や故郷に貢献したい、というはっきりした理想や夢を持っていて、皆、熱っぽくそれを語ってくれました。私はそんな彼らのことを尊敬すると同時に、彼らの情熱をとて羨ましく感じました。そして、私も本気で英語を学びなおしたい、彼らのように自分も誰かに何か貢献できるようになりたいと強く感じました。

今回のアジア学院でのワークキャンプは、農業の大変さや自然の恩恵を気づかせてくれると共に、自分の将来についてもあらためて考えさせてくれる良いきっかけになりました。そういう意味で、私にとって有意義で貴重な、本当にかげがえのない4日間になったと思います。

政治学科2年

～アジア学院ワークキャンプ

アジア学院ワークキャンプ滞在記

草柳 歩

アジア学院ワークキャンプに参加するにあたり、インターネット等によりアジア学院とはどういうところなのか自分なりに事前学習はしておいたが、現地に着くとそれまでの予備知識はまったく意味のないものになり、ここアジア学院で生活するためには目の前で起きていることをひとつひとつ自分の中で身につけていき三泊四日という短い滞在期間中に生活力を身体で覚えさせ、習慣づけるしかなかった。まさしく、自分自身が自然体になることだった。

アジア学院という環境において特徴的な事柄として私が最も心打たれたことは人、動物、自然が無駄なく循環していることであった。アジア学院の農業方法として有機農業が用いられているが、この有機農業を中心に人、動物、自然といったサークルの中で自然体がつくられているのではないだろうか。有機といった本来持ち備えている力を限りなく発揮し、維持する場がアジア学院という環境で成立しているように感じられる。

それでは普段の生活のことを考えるとどうであろうか。今日の日本においては生活機能があらゆる科学技術の進歩によって困ることはなくなった。しかし、人間が古代から本来もっている生活力を弱めてきている一面もあるのではないだろうか。アジア学院という環境が自然体であるならば今日における現代人の生活環境は不自然体ともいえる状況にあるのではないだろうか。そして、話はそれてしまうかもしれないが、今日において現代病(ひきこもりといった精神、心の病)と言われる多くはこの不自然体の状況の中で生活していることに要因があるのではないだろうか。

ならば今後、日本の生活が一昔前のような農業国になればいいかといえは簡単に割り切れるものでもなく、ただ、アジア学院が行っているひとつひとつのことに意味があり、現代人が普段の生活の中で忘れか

けていることを思い出させてくれるのではないだろうか。それは、自分自身があるがままに生きている実感、生きる力を教えてくれているのではないだろうか。

今回、三泊四日といった限られた期間の中でワークを行っただけなので今まで述べてきたことはあまりにも偏った見方、意見になっていると思う。アジア学院で一年間住み込みのボランティア、また多様な職歴をもって従事なさっている職員の方々が一番、アジア学院のことを知っており、アジア学院のことを語るにふさわしい立場にあると思う。

しかし、これも私の勘ではあるがアジア学院に従事なさっている人達はアジア学院について多くは語らないと思う(実際、私が期間中にボランティア、職員の方と接していて少なくともそう感じた)。なぜなら、アジア学院という環境が多くを語っており、その環境の中にいる者だけが多くを知ることができるのではないかと思ったからである。私自身、アジア学院のほんのひとにぎりかじっただけで、ボランティア、職員の方々から見れば赤子同然のように思われているに違いないが、アジア学院における生活の中で自分自身が自然体となれたことには間違いない。

社会福祉学科 3年

～フィリピンワークキャンプ

比律賓滞在記

河井 翔一郎

あの日あの時、僕は戸塚キャンパスにある宗教部の扉を叩いた。宗教部の建物の在る一帯は、他とは違うどこか独特な雰囲気、違和感が漂っていた。僕の妹が戸塚キャンパスの礼拝堂を見て「火葬場みたい」と言い放ったのを思い出し、ほくそ笑みながら、重く冷たく感じられる宗教部の扉を押し開けた。これからフィリピンで経験する『至極の体験』。「そのすべての始まりがこの扉から始まっていったんだなあ。」と、凄く懐かしく、今となっては遠い昔の事の様に思い出される。

この頃の僕は、テレビや新聞などのメディアが伝えてくれる、世界のあらゆる地域で起こる様々な問題の持つインパクトに対して、たいしたリアクションもせずに対岸の火をただ眺めているだけのような、平和ボケと呼ばれた時代にぬくぬく育った温度の低い人間の一人だった。しかし、フィリピン出発前の事前研修を重ね、様々な「志」や「考え」、「気持ち」を持ったワークキャンプメンバー達と共に過ごし、思ったことや感じたことなどを共有していくうちに、自分の中に世界が抱える問題に対して、原因を探るような探究心や、実際に自分の目で見てみたい、肌で触れてみたいという好奇心が芽生えてくるのを感じた。

事前研修を通し、僕がフィリピンという国に対して持った漠然としたイメージは「貧しい」というものだった。住む家もなく、一日の生活費をゴミ拾いでまかなっている人たちがいる。このことは日本で何不自由のない暮らしをしている自分にとってあまりに衝撃的だったからだ。しかし、僕が抱いた「貧しい」という先入観は到着して程なく考え改めさせられることとなった。フィリピンの中心都市には背の高いオフィスビルが立ち並び、日本にはないようなアメリカ式の巨大ショッピングモールが多数存在し、ファストフード店やコンビニエンスストアの明かりが煌々と夜の闇を照らす。一見、「貧しさ」のかけらも無いような光景に見える。けれど、その明かりから目をそらし、一本裏手の路地に足を踏

み入ると、そこには街灯も無く真っ暗で臭いもきついフィリピンの『裏』が広がっていた。リヤカーを押してごみを拾い集めている人たちも見る事ができた。フィリピンの道路脇にあるたくさんの広告看板は、そんなフィリピンの本質を反映しているように思える。表向きは鮮やかなイラストで飾られ華やかな様相だけれど、華やかな看板の裏側にはまったく手が行き届いてなくて、サビだらけの鉄筋が無様に露出した「お粗末」な作りであった。フィリピンという国も表向きだけ見れば確かに近代的で華やかだけれど、裏を覗けばお粗末な現状。フィリピンでは「貧困」と「裕福」との距離が非常に近い。ひとつの景色の中にそのふたつが混在している。信号待ちをする車の列を縫うように、はだしでボロボロの衣服を着た子供が物を売って歩いている。

フィリピン国内でさえこれほどの貧富の格差があって日本では想像すらできない光景に、僕が日本から持ってきた価値観は崩壊した。けれど、フィリピンに居れば邪魔にしかならない日本で養った価値観や先入観を、早い段階でうまく取り払うことが出来たのは、これから経験する様々な出会いや出来事を考慮すると結果として良かったんじゃないかと、今となっては振り返ることができる。日本でだって、宗教、政治、マスコミ、医学、牛肉、鳥肉など、それまで信頼を置いてこれたものを最近「まずは疑って」生活している。当たり前のように信じてきた価値観は崩れかけてしまったけれど、それに代わる新しい価値観を見つけてゆくには良い機会なのかもしれない。そんなことを思いつつ、フィリピンにいる間はフラットな心の状態を維持していこうと心がけた。眼で見ようとするとなかなか物の本質は捉えにくい。心で視る。こんな技術もまた必要だと感じた。

僕がこのワークキャンプでもっとも印象に残り、強烈なショックを受け、一番多くの問題を提起していると感じたものは、パヤタスというスラム街のはずれにそびえ立つ通称 スモーキーマウンテン と呼ばれるゴミの山である。高さ約60m程もあり、人間の見る事ができる視界の域を遥かに越え地平の彼方までゴミが続いているような錯覚をうけた。分別されずに次々と運ばれてくるゴミは、強い日差しにさらされ、化学変化を起こし自然発火して絶えず煙を上げていることが スモーキーの名前の由来らしい。そんなこの世の物とは思えない目の前に広がる異様な光景、惨劇に、自分を含めチーム一同言葉を失い、時が止まったよ

うに呆然と眺めているだけしか出来なかった。自分が立っている足元のゴミの中には、フィリピンに来てから僕らが捨てたゴミも含まれていたかもしれない。そんな罪悪感にも似た思いに苛まれながらも、目に映るものすべてを心に焼き付けようと必死だった。そんな中、違った意味で何よりもショックだったのは、鼻が曲がりむせ返るような強烈な悪臭を放つゴミの上で戯れている沢山の子供達がいたことである。ごみに埋もれながら子供が楽しそうに遊ぶ光景というのは、我が目を疑う事態であり、また、パヤタスのような劣悪極まりない環境下に身を置く子供たちが、こんなに素敵なお顔を作り出せることが出来るのか、と驚かされた。ただ、ここに住む人達のことを可哀想と思うのはいかにも日本人的な価値観で見た物の見方だと思ふ。ゴミに埋もれて遊ぶ子供たちを見て憐れんでいるばかりでは先に進むことは出来ない。この子達の将来、この村の未来、この国の行く末。あの場に立っていただけで色々なことが頭を駆け巡った。ゴミ山やパヤタスに住む子供達から発せられたメッセージを受け止め自分なりに解釈して、自分なりのリアクションをとろう。それが僕達のような力なき日本人にも出来る「知ってしまった者」としてのしかるべき態度だと思ふ。

日本人から見れば、パヤタスに住む人はおろかフィリピンの人々ですら恵まれていないし、貧しく映るかもしれない。しかし、フィリピンの人々、パヤタスの人々には日本人には無い、生きることに對しての「強さ」を持ち、フィリピンで輝いていた太陽のように輝く笑顔を作り出す豊かな心を持っている。どちらも、日本人はとうの昔に忘れてしまったし、日本にいたら決して育まれることの無い大切な「心」。その大切な「心」にフィリピンで出会うことが出来た。日本は豊かな国。確かに経済的には世界を見回しても有数のお金持ちの国かもしれない。でも、フィリピンに行ったことで自分の日本に対するイメージは「豊か」ではなくて「贅沢」なだけなんだ、と思うようになった。経済的豊かさ、豊かな暮らし、豊かな社会。でも、必ずしも豊かさが、それを取り巻く人々の心を豊かにしたり笑顔にするかと聞かれると一概にそうとは言えないと思ふ。むしろまったく逆で、人々が生まれながらにして持つ豊かな心、笑顔を作り出す心が、彼らの住む地域、国を豊かなものへと変えていく力を持っているのではないだろうか。

ごみ山の問題は、僕にとってフィリピンで最大の衝撃であり、胸が痛

くなった事実。しかし、ゴミの埋め立てというのは日本でも日常的に行われている。ただ、フィリピンと違うのは、日本の場合捨てられたゴミを土の中や海の中に隠して捨ててしまうということ。だから、僕たちは自分が捨てたゴミの末路を見届けることが出来ない。日本にある巨大な広告看板の裏側だって、フィリピンと同様サビ付いた鉄筋が複雑に組み立てられているだけには違いないのだろうけど、決定的な違いは、お粗末な部分を覆い隠し決して目に映らないようにしていることだ。強がり。日本はもっと僕達に「弱み」を見せてくれてもいいと思う。一步踏み外せば日本にだってフィリピンと同じゴミ山が出来てもおかしくない条件が揃っているのだから。フィリピンのゴミ山にはビニール袋やペットボトル、カンやビン、さらにはコンピューターの部品など様々な物が無造作に捨ててあった。フィリピンから帰ってきてからというもの、僕は、スモークマウンテンの事を教訓とし、ゴミの分別にかなりの情熱を注いでいる。燃やせないゴミとして捨ててしまえば埋められて終わるのが、分別して、リサイクルに回すことで新しい商品になり、再び僕らの前に現れる旅の行程と、それに関わった人達の手間や想いを想像してみて「世の中は色んなところで繋がっているんだなぁ」と、しみじみ思ったりしている。蛇口をひねれば出る水も、元をたどれば雨である。その行程を想像して水を飲むだけで、ちょっとおいしい水になる。当たり前のように僕らを取り巻いているものが、どこから来てどこへ行くのか。その一面をフィリピンのゴミ山で見ることが出来たかなと思った。フィリピンのゴミ山ははるか海の向こう側の悲劇として捉えるのではなく、凄く身近な悲劇として考えなければいけない。

また、僕は事前研修でフィリピンの憲法についてプレゼンをした。フィリピンの憲法の第一条は何について書かれているか。日本は言わずと知れた事、『天皇』に関してである。フィリピンの憲法には第一条に『国土』について記載されていた。その国の国民すべてが遵守する憲法の第一条には、制定された当時、人々が最も尊重すべきものについて書かれるのは、日本を見ても明らかであるし必然なことと思う。スペインの占領、日本の占領、アメリカの占領。フィリピンは占領の歴史の上を歩いてきた。そんなフィリピンの先人達が、ようやく手に入れた文字通りフィリピン人の土地を、今のフィリピンの人達は軽率に扱い過ぎているのではないか。緑豊かな谷にゴミを積み上げることばかり、建築廃材を河

にそのまま投げ捨てる行為ばかり。先人達が大切にしてきた、土地を想う心を踏みにじり、自分達の土地を自らの手で汚していく。彼らに教育が足りないのか、意識が足りないのか。僕のような日本人なんかがとやかく言う立場ではないけれど、そんな自虐的な行為に早く気が付いてほしい。良心に耳を傾け先人達の気持ちに思いを馳せてほしいと思った。

僕らはパヤタスというスラム街にハビタットのテーマでもある、「劣悪な居住環境に住む人々の人権問題」を考えるために訪れたのだが、パヤタスに住む人々の居住環境を劣悪なものとし、人権を脅かしているのは他にもない、ゴミ山というその土地の環境問題だった。つまり、ここでいう人権問題と環境問題というふたつの大きな問題は密接に関連しているわけだ。同様に、世界が抱えている問題のほとんどは、どこかで必ず繋がっていて、その繋がりの糸はわずかながらも僕達ひとりひとり、すべての人の心にも繋がっている。繋がっているとイメージする大切さ。例えば、石油を巡る利権から起きる戦争も、自分達の日常も、すべてが連鎖しているとイメージしてみる。だったら、まず、小さなことから始めて、やがてそれが大きな問題も変えてしまうかもしれない。変えられるかもしれないんじゃないか。そんな気持ちになることが出来る。

話す言葉や、肌の色、信じている神(もの)は異なるけれど、それ以前に、同じ「人間」として考えなければならないことが世界には沢山ある。ボランティアとか、具体的なアクションを起こすことばかりが課題に挙げられがちだけれど、日常の生活の中で世界が抱えている問題のほんのちょっとでも心のどこかに置いておき、常に関心を持ち意識していくことの方が遥かに世界が必要としていることだと思う。考えることから始める。こいつを実践していこう。

フィリピンへ自分は何をする為に行ったのか、そんなことはフィリピンに着いて2、3日も経たずに頭から消えてしまった。けれど、フィリピンから帰って来た時、バックがはち切れんばかりのお土産や、胸いっぱい思い出の他に、簡単には片付けられそうに無い山ほどの課題を持って帰って来た。その課題のひとつひとつから発信されるメッセージを受け止め、課題と課題同士の繋がりを発見していく過程の中で、様々な世界の実情を見ることが出来るし、新たな自分の発見を感じることもある。実りある充実した時を過ごせたと思うし人生において大きな収穫のひとつとなった。世界が抱えている問題に対し、興味を持つことから始

める。興味を持つということは、その問題に対し考え始めているということだから。考えることの大切さに気付かされた。

更なる収穫は、このワークキャンプに参加しなければ出会うことのなかったであろう多くの人達に出会うことが出来たことである。ホームステイをした家の両親は、僕を息子だと言ってくれた。いつでも帰って来いと。僕は自分の「帰る場所」が増えたことが嬉しくてしょうがない。日本にいと、食事しながらでもテレビを見ながらでも、無意識のうちに難なくこなしてしまう「会話」という行為ひとつでも、フィリピンでは言葉が異なる分、自分の気持ちをいかに相手に伝えようか、なかば必死になっていた。それでも、誠意を込めて心から言葉を掛ければ、自分でも不思議なくらい伝わることもある。相手に気持ちが通じたときの達成感は味わったことのない新鮮さに溢れていたし、言葉だけが気持ちを伝える唯一の手段ではないことも実感できた。

フィリピンでの経験、現地の人々との出会い、そしてかけがえのない仲間達の存在がこれからの自分の人生をより充実した刺激的なものにしてくれる事を祈り、期待している。

ワークキャンプがきっかけになり、誠実に、切実に物事を考えることのできる人間になればいいなと思う。また同時に、「誠実に、切実に考える心」が世界の全ての人の心に芽生えることが出来れば、世界が抱える数々の問題の全てが、解決される日を見るのも決して不可能なことではないはず。そんな心が、人々の心に、水溜りに落とした小石の波紋のように緩やかに連鎖して行って欲しいなと思う。

フランス文学科 1年

～フィリピンワークキャンプ

Everything is in a circle

原 咲子

“The circle is good. Neither beginning nor ending is there. The circle is endless, eternal.”

CCP - Culture Center of the Philippines とは、ホセ・リサール公園に程近い大きな文化センターのことで、フィリピンの先住民族を紹介する展示室や、さまざまな催し物が開かれる場所だ。帰国直前の9月19日、マニラでの自由行動の時間に立ち寄った。そこでは、フィリピンのある女性アーティストの展覧会が開催されていた。私たちは引き寄せられるようにして足を踏み入れた。ボタンや布を貼り付けた上に、斬新な色遣いの油絵の具がのせられた作品が、真っ白い壁紙の広い部屋に所狭しと飾られていた。それら鮮やかなコラージュ作品のモチーフになっていたのが、「circle」であったのだ。そこに添えられた、作者のこの言葉。日本帰国を目前にして、フィリピンで過ごした2週間は自分にとって何であったのか、を代弁してくれているかのようであった。

Do for others

私がこの言葉に初めて出会ったのは入学式だった。小中高と公立学校で育った私はキリスト教とは縁遠く、「他人のために何が出来るだろうか」という、キリスト教的観念に基づくヘボンの問いかけはとても新鮮に聞こえた。

明学を知った時点で「もし入学したら絶対やってみたい!」と思っていた“ワークキャンプ”。参加者を決める、金井先生との面接の際に、「Do for others.」を引用しながら、思いの丈を打ち明けた。「今、自分の出来る限りのことをしたい。」本心だった。しかし一方で、“国際学部生”である自分は、この先4年間、何を学んでいこうかという目標のようなものが見えれば、とも考えていたし、英会話の能力を試したい、それから日頃自分が簡単に口にしている“貧困地域”の実情をこの目で確かめ

たい、という思いもあった。私は、「何かをしてあげる」という意味でのボランティアをしようと思ってフィリピンへ行ったのではない。むしろ、現地で出会う沢山の人から、ものから、学ばせてもらおうという期待をしていたのである。出発直前、「こんな中途半端な思いでいいのだろうか。」と考えたり、他のメンバーとの意識の食い違いがあるだろうと一抹の不安を感じたりもしていたのだった。

黄色いポロシャツよく似合う、ゴンザレス市長

なんと、私たちはフィリピンに到着した日の夜、“マンダリオン市”の市長、ゴンザレス氏に夕食会に招かれたのだった。何でも、日本の大学生が自分たちの市を訪れてくれた、ということが大変喜んでくださったということだった。ゴンザレス市長のお話が私の心に深く響いた。「あなた方が、私たちの市を選んでくれたことが非常に嬉しい。ここは豊かな市ではないかもしれない。しかしどんなに貧しくて、人々は決して笑顔を絶やすことがないのです。」涙が出て、思わず隣に座っていたメンバーのTシャツの袖に顔を埋めてしまったが、これから自分たちが向かう村はきっと素敵な場所なのだろう、と想像することができた。そういえば、私たちが約1週間ワークをさせていただいた、マカトゥリン村の人々の目はとてもきれいだった。焼けた肌に白い歯と目が輝くその顔は、「友達と遊ぶのが本当に楽しい」ご近所さんはみんな家族みたいに仲が良くて、毎日が幸せ」と訴えかけてくるような、そんな本当に自然な笑顔だったのだ。涙は、目の中の不純物を流し出してきれいにする役割をしてくれるらしい。村で出会った人々の、お父さん・お母さん、もしくはおじいさん・おばあさんが60年前に流した涙が、彼らの美しい瞳を生み出したのかも知れない。「あなたが来てくれるだけで嬉しい」日本でそんな言葉を自然にかけてもらうことが、今まで何度あっただろうか。

息をのむほどの...高級ホテル

目を疑った。ここが、これから約2週間お世話になるホテル...。寝ている間に体中蚊に刺される、シャワーは水しかでない...大変失礼だが、私はフィリピンでの生活をこのように想像していたため、ステンドグラス張りの宮殿のような建物を前に、開いた口がふさがらなかった。部屋は6人用の洋室で、24時間冷房がつく。トイレが2つ、小さなキッチン

1つ、シャワールームが2部屋、テレビが2台。毎日一人一本のミネラルウォーター(約500ml)が支給される。本当に、何不自由なく過ごすことができる環境だった。日本での生活と何ら変わらない、むしろこちらの方がいい生活が出来るというくらいであった。明日から私たちは建設作業の手伝いに行くというのに、自分はこんないいところに泊まって。私はフィリピンへ何をしに来たんだっけ。矛盾が頭の中を駆けめぐる。私は初めて「フィリピン人は日本人のことをどのように見ているのだろうか」と思った。出発前、事前研修会で、「先進国は、発展途上国の多くの人々の生活を搾取しながら、利益を得ているのだ」ということを学んだ。ある人は日本人を見て「フィリピンの土地を奪う人々」と思うだろう。また他の人は、「多国籍企業を自分たちの国に進出させた国、日本。私たちの雇い主、日本。」と見るかもしれない。物乞いをする人々は何を感じながら、巨大バスにわずか27人で乗る私たちの姿を見ているのだろう。自分たちが、アメリカに次ぐ世界第2位の先進工業国、日本から来ているのだということを改めて実感した。

初めてかけられた言葉は

私たちが泊まっていたホテルから、バスで約2時間かけて Slum Area に到着した。事前研修会で「忘れられた子どもたち」というドキュメンタリービデオを見て、フィリピンのごみ山のことを知った気になっていたが、実際目の前にすると、今までの自分の人生の中で、最も衝撃的な風景とも言えるものに対面することになったのだった。

はじめは、自然の、本物の山だと思った。しかし近づいていくと、それはまさにごみ山であったのだ。その村には今までにもたくさんの外国人が見学に訪れたのだろう、「また来たか」という目で見えてくる人々が多くいた。自分たちが建設作業をしていた「マカトゥリン村」とは明らかに格差があるのだろう、と思わせるものが子どもたちの表情から見て取ることが出来た。フラフラ歩く犬に怯えながら、立ち並ぶ家々の間を通り抜けていくと、4歳くらいの子どもの私に話しかけてくれた。「どうもありがとう」唯一知っている日本語だったのだろうか。胸の詰まる思いがした。

ごみ山の中には、日本で私たちが何気なくごみ箱に投げ入れるようなものがたくさんあって、それらを大切そうに拾い集めている幼い子ども

たちがいた。そんな光景を高いところから見下ろすことしかできなかった。自分たちが日本で捨てたごみはフィリピンと繋がっていて、ここに集積されている...、大げさだが、こう感じさせるものがそこにはあった。劣悪な衛生状態を変えるにはごみ山の撤去が必要だ、しかし廃品回収、交換によって生計を立てている彼らにとって、ごみ山を無くすことは生活を奪うことになるのかもしれない...。じゃあ何が出来るのだろう、という答えを見つけられないまま、呆然とその場を見つめることしかできなかった。

ゴナリン

この名前を聞き出すまでに、何日かかっただろう。私がマカトゥリン村で一番仲良くなった子だ。「What's your name?」とたずねると、困った顔をした。照れ屋なのかな、とはじめは思っていたが、村の中には「タガログ語のみを話す子」「英語とタガログ語を話す子」とがいると徐々に分かった。人懐っこくまとわりついてきては、握手を求める。私が照れながら「なにになに～」と言うと、ゴナリンはとても嬉しそうに笑って口調をまねした。「なにになに～」と言いながら握手をする。翌日からそれが私たちの間での挨拶のスタイルとなった。私は彼女と言葉を使った会話はほとんどしなかったように思う。それでも、私たちは一緒にいるだけで楽しかった。自分のお気に入りのアクセサリを交換して、お互いのことを忘れないように、とお守り代わりにした。

ホームステイ先でも同じだった。同室の山内さんにずいぶんと助けられたが、やはり私のつたない英語は通じない時がしばしばで、トゥリーシャ（娘さん）やナナイ（お母さん）であるマルーには迷惑をかけてしまった。私たちが帰国直前、村へ立ち寄ったときにマルーはこう言ってくれたのだった。「This is not the end. This is the start of our relationship.」私でもこの言葉だけはちゃんと聞き取ることが出来た。

最後に...

フィリピンから帰ってきた直後は、2週間を思い起こしてもうまく整理することができなかった。夢にまで見たワークキャンプに参加することが出来て、生まれて初めて両親から離れて過ごした2週間。夢かうつつか、寝てか覚めてか。しかし今冷静になって、18年間の中で一番ア

ツかった夏を振り返る。その全ては繋がっていた。始まりははっきりと覚えていない。“明治学院のワークキャンプ”。大学のパンフレットに載っていたその写真を見たいつの日からか、私はフィリピンを目指し、目指した先は自分の英語力を試すためだったかも知れないけど、英語が通じるかどうかなんて関係なく子どもと遊べたマカトゥリン村で、汗かいて、穴掘ってコンクリ運んで、夜更けまで歌って、踊りまくってた高校生だった自分を思いだしてまた踊って、踊る子どもに教えたたくさんの日本語、いつか使ってくれる日を願って、願うだけじゃ何も始まらない現実に向き合っていて考えて、そんな私の先を歩く日本人に出会って懂れて、懂れられる“日本人”という存在であることを初めて知った日、「日本に行きたい、働きたい」と言う女性たち、でもたくましく、笑って、笑う顔は貧しい国にはないなんて全くの嘘で、子どもたちはいつだって楽しそう、「そうよ、これは終わりじゃないわ、始まりなの。」と言った私のフィリピンのお母さんマルー。

「Do for others」って結局自分は何が出来たかと言えば、“人は、ただそこにいるだけで誰かに幸せを与えることができる”と知れたこと。“ただそこにいられること”がどれほどに大切か。堂々巡りで答えの見つからない問題ばかり、と考えてしまえば終わりだけれど、きっと考え続ければその先に何かがある、と私は思う。「終わり」は自分で決めてしまうべきものではない。始まりも終わりも見えなくても、“The circle”は必ず繋がっているのだから。「帰ってからが勝負。」と帰国前日に言った仲間。そう、フィリピンで気づき、新しく知ったこと、人との出会い、モノの発見...、そういったものをこの先どうしていくかは、全て自分にかかっている。ほったらかしにせずに、これからの長い学びの道につなげていきたいと思う。

沖縄の旅を経て…

近藤 辰哉

沖縄というとなぜ「観光リゾート」というイメージが強かった。それは、海が綺麗、美しい島々、と外見的に捉えていたからだろう。日本や世界の皆もそう捉えているに違いない。しかし、内面的には複雑で、自分ではまとめきれない程の問題が沖縄にあった。それらの問題は、私が沖縄に行く前は「沖縄の問題」として区切っていた。また小さな事しか見ていなかったし、知らないでいたが、多くの問題を沖縄の旅で知った。これらは「沖縄の問題」ではなく、「日本の問題」だった。

沖縄はもともと琉球王国であったのを日本が支配し、さらに第二次世界大戦で沖縄は日本国内で唯一の地上戦地になり、それが沖縄戦だった。米軍に追いこまれて、日本軍が住民をスパイと見なして虐殺し、更に多くの人々が激戦に巻き込まれた。ひめゆりの塔に行った時、当時の記録があり、読んでみたがその様子を想像する事が出来なかった。それは、完全に想像が出来ないというわけではない。もちろん読んで想像する事は出来たが、その想像を遥かに越えるであろう当時の悲惨な現状を想像する事が出来なかった。

いくつかのガマを見たが、その中の一つ、一人も死者が出なかった「ヌチヌジガマ」に入ったことが印象に残っている。本当に真っ暗で何も見えず、頭がポーンとした。こんなところに3ヶ月間もいたら、気が狂って頭がおかしくなってしまうだろう。それが当時ではギュウギュウになるほどの1000人以上の人達がずっとここにいたのだ。

また、伊江島にある「反戦資料館」には、当時の服、不発弾、写真が当時のままに展示されており、伊江島の出来事や阿波根さんの活動のについてのたくさんの紹介があった。なんだかそこにあるものたちが、無言で私たちに戦争の悲惨さを伝えているようだった。他の戦跡なども、どれを見ても胸が痛かったが、この「反戦資料館」では、本当に生々しく戦争というものが伝わってきて、胸が張り裂けるようだった。

今沖縄では、ジュゴンのいる美しい辺野古への米軍基地移設、西洲への軍港移設（原子力潜水艦が入ってしまうほどの大きさになる）など、米軍基地問題を多く抱えている。また、沖縄国際大学に米軍ヘリコプターが墜落した事で住民はますます怯えながらの生活になり、同時に米軍に対する怒りが強まっている。辺野古に米軍基地が、西洲に軍港が移設されたら、その周りの住民はどうしたらいいのか、住民達はどこへいけばいいのか。米軍基地は横須賀、相模原などにもあるが、まるで訓練などやっていないかのように墜落などの事故もなく、問題もないかのように静かなのに対して、なぜ沖縄ではこのようなことになっているのだろうか。そしてなぜ、沖縄なのだろうか。

現在、イラク問題などのような国際問題が世界中に起こっている中、日本が世界にばかり目を向けて沖縄には目を向けてない事が悲しい。誰もが沖縄を観光地としか見ていない。それは、誰もが本当の歴史を知らないからなのではないか。私は8月の中旬に北京に行ったのだが、そこでは反日感情が強かった。私は、日本が中国を占領した事ぐらいしか知らないまま「中国人民抗日戦争記念館」に行った。しかし、日本が中国に対して行った、教科書に載っていない本当の歴史を見て大きな衝撃を受けた。反日感情を持っている人の気持ちが分かるような気がした。だから、誰もが沖縄の歴史や本当の過去や現状を知るべきではないか。知らないから、基地移設など何でもやり通そうとする人が出てくるのではないかと思う。

勉強ばかりではなく、世界遺産を巡ったり、サイクリングしたり、遊んだりもした。そんな中で自然との共存の素晴らしさが凄く身に染みた。これらの事を今後大切にしながら生かしていきたいと思う。

そしてこの旅でいろんな仲間に出会えた。耳が聞こえない私にノートテイクをやってくれたり、手話を覚えようとしている人、耳が聞こえないことに理解を示してくれたんだとの凄く嬉しかった。一緒にサイクリングしたり、BBQをしたり、沖縄について考えたり、お互いを分かち合ってきた。そんな仲間に出会えたことを、本当に大切にしていきたい。この旅はとても楽しく、勉強にもなり、かけがえのないものだった。

沖縄は実に奥が深いと思う。

沖縄の旅に参加して

及川 彩子

「沖縄に行ってみよう」というのがこの旅に参加したきっかけでした。だから戦争についてや平和についてなどは深く考えずに、そして事前に特に学習もしないまま沖縄に上陸してしまいました。飛行機の中から見た海は青く、深く、言葉では言い表せないような綺麗な色をしていました。今の私が沖縄について聞かれたら、まず第一に海的美しさについて語るでしょう。そして、沖縄の人たちはこの海を愛し、美しい海を守ろうとしているのが感じられました。

沖縄から帰ってきた何日か後にたまたまお台場の海をみたのですが、ごみがそこらじゅうに落ちていることにがっかりしたのを覚えています。都会に住む人たちは海が汚いと言って文句を言うくせに、本人たちはそれほど海を守ろうとしていないのだと感じました。海に限らずそこにある自然を守るためには、みんなが自然を愛し、守るために努力をしなければいけないのだと思いました。

沖縄には豊かな自然があって、人々は自分の住む場所を愛している、その愛する土地で地上戦が行われている時、住民はどのような思いだったのでしょうか。私は想像力を最大限駆使して、その光景を思い描いていました。空から爆弾が降ってくる。そこら中に地雷が仕掛けられている。自分の家族や友達が死んでいく。敵兵から身を隠し、真っ暗なガマの中で息を潜めている。いつか見つかって殺されるかもしれないという恐怖。ひめゆり平和祈念資料館では、ひめゆり学徒隊の女生徒一人一人の顔写真とその人がどんな人だったのか、一言ずつそえられていました。一人一人に家族がいて、友達がいて、将来の夢や希望がたくさんあった。でも死んでいった。お国のため、戦って死になさいと教育され、敵兵に捕らえられ捕虜になることよりも集団死を選んだ。たくさんの命がそうやって奪われていったということがどういうことなのか、私は自分の実感として感じたことがありませんでした。

あらゆる事件や事故で、または遠い国で行われている戦争で、たくさんの人たちが死んでいるのを毎日ニュースで聞いているのに、死についてや命の大切さについて考えることを忘れてしまっていることに気がつきました。でも、もしそれが自分の周りで起こったことだとしたらどうだろう。自分の愛する人が死んでいくのを目の当たりにしたらどう感じるだろう。沖縄の海を見ながら、風を感じながらそんなことを考えていました。戦争について、命について、そして平和についてリアルに実感したのは生まれて初めてでした。

旅の途中では戦争以外にも色々なことを「リアル」に感じる経験をしました。じんぶん学校では、険しい山を降り電気もガスもない中で自分たちでご飯を作ったり、火をたいたりすることが楽しくて仕方ありませんでした。普段は都会でぬくぬくと暮らしている私ですが、時間を忘れ何もかも自分で作りながら生活することがとても新鮮でした。

そして沖縄の人々の沖縄文化に対する愛情をいろいろな場所で感じる事ができました。例えば各家々の門の前に構えているシーサーたち。ゴーヤーチャンプルーや沖縄そばなどの沖縄名物がどこでも食べられること。沖縄の独特の音楽。小さな島だからこそ、特有の文化を沖縄の人みんなで大事にしてきたのでしょうか。

この旅で、私は沖縄を二つの側面から見ることができました。観光地としての沖縄と、多くの米軍基地を抱える、昔恐ろしい地上戦が行われた沖縄。8日間滞在しただけではもちろんすべてを知ることはできません。しかし、この旅で触れられるもの、感じられることは最大限吸収できたと思います。8日間を共にして多くを語り合った仲間たち。お互い刺激を受け意見を交換し、大切な友達をたくさん作ることができました。

平和を考える旅、でしたが沖縄に行ったら私はますます平和とは何か分からなくなってしまいました。でも簡単に答えをだせる問題ではないからこそ、これからいろんなことを学びながら考えていきたいと思います。そして沖縄の地で自分の肌で感じ自分の感覚としてリアルに実感できたことを、これからずっと大事にしていきます。

チャペル奨励集

～「大学とキリスト教」より

地の塩、世の光

マタイによる福音書 5章13 - 16節

永野 茂洋

私は非常勤講師時代から数えて20年以上大学で教えていますが、この間に何人かの印象深い学生と出会いました。今日はそのうちの一人の学生さんの話をまずしたいと思います。

その学生さんは一年生の終わりのときに、大学にある訴えを起こしたのです。夕方図書館から出て帰ろうとしたときに、数人の茶髪の若者に囲まれて暴行を受け、顔を踏まれて鼻に怪我をした。それで病院に行った。こういうことがあってはいけないので何とかして欲しい、という訴えでした。

話を聞いた職員の方は、この学生さんの話を不審に思い、私にこの学生と会って事情を聞いて欲しいという連絡を入れてきました。私と彼との最初の出会いは、このような形で始まりました。話を聞いていて、私も非常に迷いました。話の辻褄はあっているのですが、どこか現実味が薄い感じがするのです。

傷は既に完治しており、また、その時間帯にキャンパス内に外部から人が入ったという目撃者はありませんでした。教職員の多くは、むしろ、その学生さん自身を心配して、専門医の診察を受けさせた方がいいのではないかという意見に傾いていました。お一人だけ、「彼が何を言っているかは訳がよく分からないが、これは病気とかそういうものではなく、話し方や身振りにしても、彼の個性のようではある」と主張された年配の教員がいらっしました。

私は迷ったままでしたが、その年配の先生の「躊躇」された感覚を信じることにしました。そして、その学生といろいろな形で付き合うようになりました。彼が私の研究室に来たり、私が彼のアパートを尋ねたりといったことを繰り返しました。彼がどういう事情で大学へ入ってきた

のか、また、高校3年間をどのように過ごしてきたのか、中学校、小学校のときはどうだったのか。当時の担任の先生に連絡を取り、勿論保護者の方とも頻繁に連絡を取り、そして、少しずつ彼の個性の脈絡といったものが分かってきました。

彼は最初大学に推薦入試で受験したのですが、面接で一言もしゃべらなかつたために、さすがにこれではということで一度不合格になった学生さんでした。しかし、彼は頑張って一般入試で入学してきたのです。推薦で入学していればともかく、一般入試の場合は学生の個性に関心を払いませんし、その背景等についても、大学はほとんど情報を持っていませんでした。同じ受験生だと気付いて報告するということもありませんでした。

こうして彼はそれから一年間、ともかくも大学生生活を送ったわけですが、そのような性格でしたから、この間、ただ下宿と教室を往復するだけで、実はほとんど誰とも口を利いていませんでした。他の学生たちからは距離を置かれていました。

殴られたというのは、今から振り返るとやはり一種のSOSだったと思います。自分の一年間の大学生生活の悲惨さと、これからあと三年間やっていくことの不安がない交ぜになって、彼はSOSをあのよう形で出した。大学に来てまともな会話をしたのは、彼がこのようにして訴えてきたときだったようです。その後は、私が紹介して数人の学生がいろいろとケアをしてくれるようになりましたが、彼にとってはそのこと自体がまた大きなコンプレックスで、試験が近づいてくると様々な思いがこみ上げてきて、緊張のため勉強が手につかなくなり、結局単位が取れずに退学ということになりました。私とはその後もずっと連絡をとり続け、最初の2年間はほぼ毎日のように電話をかけて来るという状態でした。彼は大学で勉強をしたかったのです。それでずっと大学と繋がっていたのだと思います。今は、彼は放送大学に入って勉強すると言って頑張っています。

彼と私が出会ってから6年経ちますが、実は先日、大変嬉しいことに、あのとき自分は嘘をついた、自分の訴えはいわゆる狂言だったと、告白してくれました。これは彼にとっては大変勇気のいることだったと思います。なぜ自分はそういうことをしたのかという脈絡が彼自身の中でいろいろと繋がったのだらうと思います。そういうことは私たちが外側

から一見しただけでは、やはりなかなか分からないのですね。自分でも、自分のことを理解するまでには長い時間が掛かるのです。彼はようやく自分で自分の事が少し分かって、そのことを勇気をもって告白したのです。私は非常に嬉しく思いました。彼は今はいろいろな意味で立ち直って、勉強に励んでいます。

さて、私がこのようなことをお話したのは、人間一人の真実ということに関しても、また、真理の探究ということに関しても、「分かる」こと以上に、実は「分からない」ということが大変大切だと思うからなのです。

本学も属している「キリスト教学校教育同盟」という組織がありますが、そこから発行されている機関紙に酪農学園大学のチャプレンをされている高橋一先生の文章が掲載されていたのですが、その中に非常に印象に残る言葉がありました。「ネガティブ・ケイパビリティ」(negative capability)という言葉です。

イギリスの詩人キーツの言葉だそうです。直訳すると「消極的な能力」ということですが、その意味するところは、様々な不確かさや、不思議さ、疑い、あるいは、分からなさの只中であって、手早くその意味をつかんだり、あるいは、理由をつかんだりせず、むしろ、その不確かさの中に努めて居つづけようとする能力のことで、キーツはこれが詩人にとって非常に重要な能力だとみなしていました。

高橋牧師は、これが人間関係においても非常に重要で、大学でも学生同士、教職員同士、あるいは、教職員と学生とがいろいろな場面に関わるときに、この能力が必要とされるのではないかというのです。

例えば、先ほどの学生さんのように、何かしら問題を抱えた学生と出会ったときに、私たちは多くの場合、自分たちの理解できる範囲内ではか理解しようとしめない傾向があります。しかし、もしそうであったら、私はあの学生さんから「自分は嘘をついた」という彼の信実な告白を聴くことはなかったかもしれない。

私たちは、多くの場合自分の了解可能な範囲内ではか相手のことが分からないのですね。というよりも、自分の分かる範囲内で「分かってしまう」のです。でも、それは、本当は分かっているのかもしれない。その「本当は分かっているのかもしれない」ということに気付く能力が「ネガティブ・ケイパビリティ」です。

私たちが生きるこの時代というのは、一つの大きな病を抱えていると思います。それは、何でも、どんな問題でもすばやく答えを求め、答えが与えられるし、与えられないと苛立って、満足しない　そういう一種の病です。問いと答えは一対一対応をしていないと気がすみません。

ところが、実際は、同じ事柄を巡ってでさえ、物の見方・見え方は非常に多面的・多層的ですし、一つ問いを立てるにしても、問いの立て方は沢山あるし、答えも沢山あります。しかし、現代はそういうことに耐えることができなくなっている、そういう時代だと思います。そういうときに、この「分からなさの能力」、「分からないのだけれども、そこには何かあるに違いないと感じる能力」は非常に重要だと思うのです。

「分かる能力」ではなくて、「分からないと感じる能力」ですね。この感覚を作っていく、養っていくことが、実は大学にとって、とりわけキリスト教の立場に立った大学にとっては緊急の課題の一つだと思います。

高橋牧師は「ネガティブ・ケイパビリティ」を「分からなさに耐えつづける力」と訳したいとおっしゃいます。私もまったく賛成です。

そして、大学で養って欲しいと、社会から期待されている能力も、実はこれだと言っていいかもしれません。

大学の数は現在世界に何万とあるわけですが、その大学を生み出したのは「必要」だと言われます。社会が大学を「必要」としたから、大学は生まれ、維持されてきた。「必要」に応えるために生まれてきたのです。それは自分たちと、自分たちの世界を理解したい、自分たちの過去と現在と未来を知りたい、知らなければならない、そういう「必要」でした。

ところが、大学はそれに応えようとするとき、つい安易な方、表面的なものの方に流れやすいことも事実です。一人の人間を表面的に理解するのと同じように、「社会のニーズ」と言いながら、その「ニーズ、必要」を非常に表面的なところで受け止めてしまうということがあります。単なる目先の利便性を求めることを「ニーズ」と呼ぶ人もいますし、自己利益を追求する人々が要求する「ニーズ」が大学の中に入って来るともしばしばあります。

しかし、本来大学というのは、社会とか人々がまだ表面化していないところで本当は何を「必要」としているかということを見抜かなくてはなりません。大学が学生さんたちに学んでもらいたい、身に付けてもらいたいと望んでいる能力もこれです。本当の「必要」を見抜く能力です。

逆説的で矛盾しているように聞こえますが、この重要な能力の一つが「分からなさに耐え続ける能力」だと言うことができるのではないのでしょうか。社会が本当は何を「必要」としているのかは、隠されていて分からないことが多いのです。「分からないけれども、そこには何かがある」と感じる力が、ここでは必要なわけです。それは人との新しい出会いを生み出す原理であると同時に、大学の使命を支えている原理でもあります。

しかし、同時に、私たちがそのように社会の本当の「ニーズ」を見抜き、それに応えようと欲すれば欲するほど、私たちはある種のもどかしさと言いますか、人間の限界というものもまた感じるのではないのでしょうか。そして、自分の中に渴きを覚える。たった一人の学生さんを相手にしてさえ、その隠れた「必要」を見抜き、それに応えようとすれば、あるいは、その個性と彼の人権を本気になって守り、育てようとすれば、私たちは、回復しがたいほど疲労困憊するのです。

大学の中心にチャペルがあって、祈る時間が設けられているというのは、長い歴史の中でキリスト教主義大学が常にそのことを意識してきたからだと思わずにはられません。自分の中に限界と渴きと疲労を覚えながら、そのことを主の前に持ち出して、祈り、そうして主からの慰めと新たな力を得て、そうして、この世での与えられた使命を担おうと出て行く。キリスト教主義大学はチャペルでの祈りをどうしても必要としてきたのだと思います。それは人と社会の本当の「必要」を知り、地の塩、世の光としての役割を、教会だけではなく、大学もまた担い、果たそうとしてきたからに他なりません。大学がその使命を誠実に果たそうとするときには、主はそれを豊かに祝福し、道を備えて下さるに違いありません。

教養教育センター教授
4月22日奨励

～「大学とキリスト教」より

チャペルのあるキャンパス

創世記 28章10 - 16節

坂口 緑

とても気持ちのいい春の季節になりました。花々と新緑がとても美しく、明治学院大学と書かれた正門をくぐるだけでとても晴れ晴れとした気分になります。気持ちがいいな、麗らかだなと思いながらも実は私は春がとても苦手です。花粉症のせいばかりではありません。4月。大学のキャンパスは新入生で溢れます。キラキラとした目をして新品の文房具を揃え、新品の洋服を着て新入生達がわっさわっさと押し寄せてくる

それはとても晴れ晴れしい気持ちになる光景の一つです。けれどもあちこちでできるおしゃべりの輪をよく見てみると、大げさに頷きあったり必要以上の笑みを顔に貼り付けていたりします。そうやって一生懸命仲間に打ち解けようとする人たちが織りなす光景を見ると非常に胸が痛くなります。なぜならいつもより少し3割4割増しの笑顔を作っている人たちを見ると春特有の「寄る辺のない気持ち」が私を襲い、かつて経験し、そして今でも経験しつつある痛みを思い出してしまうからです。

誰かと早く仲良くなって安心して毎日を過ごしたい、けれどもどの人が自分に合っているのか、或いはどんな場所へ行ったら、どの授業に行けば、どの先生に話を聞けば自分を受け入れてもらえるのか、そのためにはどんなキャラクターであるべきか、どんな気の利いたことを言えばいいのか、どんな態度をとればいいのか、どんな洋服を着ていればいいのか、そんなことを一つ一つ考えながら萎縮して、それでも何か探そうとする。そういう寄る辺のなさというのが、春には、特に新しい場に出向いた人にとっては共通の思いかと思えます。

もちろん、そんなに人のことを気にしないで過ごしているマイペースな人もいるのでしょうか。クラスには一人ぐらいそういった堂々とした人

がいて、私は小学生の頃からいつもその堂々とした人たちを羨ましいと思っていた。どこにいても上手く仲間フィットしてその場にあったジョークを言えたり、その場にあった行動が出来たり、そういうことを瞬時に判断できる才覚はどうすれば手に入るのだろうかと思いつつも、私は春が来るたびに、実はとても無理をして3割4割増しに良く見えるであろう自分を一生懸命演じています。

歳をとったらそういった苦しみ、痛みから少しは解放されるのではないかと思っていました。もう歳ですから学生時代のような初々しさ、新入生の人たちが持っているような気まずさから解放されても本当はいいはず。けれども今年の春も実は新しい場所を私は経験しました。私には、7ヶ月になる息子がいるのですが、この4月から彼を保育園に預けることにしました。そこで出会う0歳児クラスの中で、どんなお母さんを演じたらいいのか、私はまた一つ迷ってしまいました。保育園の先生達とも、どうやって打ち解けたらいいのか悩んでもいます。こんな歳になってもまだ、どうやって新しい場に入っていけばいいのかと、寄り添えない感覚を味わいつづけていて、なんて自分は成長していないのだろうと感じます。

おそらく自意識過剰のせいなんです。それほど人は自分の事など気にしていないし、どんな笑顔でいようとブスツとしていようと気付かないと頭では分かっているのに、なかなか「たいしたことではない」とは思えない。人のことを気にすると同時に、なぜなのでしょう。きっと私は新しい場所に置かれたとき、人が私に対して持つであろう印象を操作したいという強い願望があるのだと気づきました。アメリカの社会学者ゴフマンの「印象管理」です。自分がどういう態度でいれば相手が自分の思った通りに印象づけられるのかを計算しようとする、一種の支配欲です。自分が理想とするような振る舞いをする事で満足したい、そのことを通して人を自分の領域に引き込んで印象を管理したい、印象を操作したい、そんな風に腹黒く思っているのではないかと気づきました。印象管理をすれば当然気疲れします。今思い起こすと私の大学時代というのは、春だけではなくて、新しい集団に加わるたびにこういった操作・管理を一生懸命しようとして結局は失敗し、とても疲れてしまう、そういう時代だったなと思います。

私が通っていた大学には隣接して大きな教会がありました。教会の会

堂に一步入ると外の痛々しいおしゃべりや喧騒がシンと静まり返り、嘘のように静寂が広がります。その会堂によく私は座りに行きました。ただ座りに行ったのです。何をしていたのかも思い出せません。思い出せるのは、夏の季節はちょっとひんやりした空気、冬の季節は少しほんわかと暖かくほこりっぽいにおいの空気です。授業の合間にそこで一人座っているとたぶんいろんな気疲れから解放されたんだろうと思います。単にひまで時間つぶしに行っていたというのかもしれませんが、暗闇の中で座っていると無理な笑顔を作らなくてもすむし、しぐさの一つ一つが友達から浮いていないかをチェックしないでもすむ。変な組み合わせの靴と靴下だったかなということも忘れられる。そういうポーズとする時間をもてたこと、それが実は私の苦手な春の感覚をすこし和らげてくれていたようです。

私はファッション雑誌が大好きで良く見るのですが、最近の20歳代の女性向けの雑誌には必ず『着回しカレンダー』というものがついています。30日間どんな服を組み合わせ着ればOKかということがグラビアで示されたものです。例えば、会社の重役秘書で、今日は大事なプレゼンテーションの日なので、秘書としてきちんとした抜かりのないようなスーツを着る、といったシチュエーションの写真が載っていたり、今日はデート、友人と会食、というように一つ一つ架空のストーリーが設定されています。ある時見た雑誌の『着まわしカレンダー』は、函館の短大を卒業した主人公の女性が週末に北海道旅行に出かけるという設定でした。その中に、途中主人公は友人と別行動をとり、函館にある自分の母校を訪ねるというエピソードがありました。母校の短大のチャペルでスタンドグラスをバックに、おしゃれな女性が一人祈っているというシーンのグラビアが載っていました。もちろんこれは作り話で、洋服が綺麗に見えるという理由だけでチャペルが選ばれ、無理やり作られたストーリーだと思っています。それでも私はこの『着まわしカレンダー』を見ながら、「ああ、かつての自分があるな」と思いました。このエピソードは、卒業した後、母校を訪ねるという設定でしたが、一人チャペルの中で友人と離れて祈る。そしてこんなふうに大学とつながるのもいいな、と思いました。この明治学院大学3つのチャペルがあります。白金には厳かな気持ちになる素敵なおチャペルがありますし、この会堂(小チャペル)もあります。横浜のチャペルは光が入るととても現代的な空間で

す。3つもチャペルがあるキャンパスはなかなかないと思います。気分によって選べるわけですし、気疲れしてしまったら、行ける場所がそれだけ用意されている、それが明治学院大学のキャンパスなんだと思います。ひんやりとした空気やほんのり暖かい空気、訪れる人をつつみこむ場所が3つも用意されている、それはなかなか得がたい環境なのではないでしょうか？

チャペルはどのような場かという、まずはやはり神の言葉を語り継いだり、自分のためにもう一度思い起こしたりする場なのでしょう。ただ同時に「帰る」ことができる場でもあるのではないのでしょうか。この大学に通いつづけている間もそこに帰ってきていい、卒業したあとも『着まわしカレンダー』の主人公のようにキャンパスを訪ねて立ち寄る場です。卒業したあと大学をせっかく訪ねてみても、意外に行く場所がないものです。ゼミの先生の研究室を訪ねてみても留守だったり、知り合いの職員の方を訪ねてみても異動されていたり。けれどもいつまでも変わらずそこにあるのは、チャペルという空間なのではないかと思います。

今日の聖句に、このような一節があります。

「わたしはあなたと共にいる。

あなたがどこへ行っても、わたしはあなたを守り、
必ずこの土地に連れ帰る。」

チャペルは神が共にいるという場所です。だからこそ、色々なことに気を遣わないでいられます。人を操作したり、自分を批判したりせずに、ただ居ることを許される場です。気疲れしたらチャペルで一息つく、そんなことが実現するそういう大学に招かれたのが皆さんです。どうか皆さんが在学中、一人でふらっと入っていける場があることを覚えていてください。それだけではなくて卒業してこのキャンパスから巣立っていった後も何度でも帰ってくる場も用意されていることを忘れないで下さい。一人でいられる場であり、何度でも帰れる場。それが明治学院大学の3つのチャペルです。

社会学部助教授
4月23日奨励

～キリスト教週間「世界平和と日本人」より

高遠 菜穂子：平和と愛

マタイによる福音書 10章26 - 31節

吉原 功

ここにお集まりの方は、高遠さんがどういう方かご存知のことと思いますが、2004年4月にイラクで武装グループに拉致されて日本中のバッシングを受けた方です。実は私には森住卓というカメラマンの友人がいて、高遠さんは他の二人と一緒にバグダッドでその友人と待ち合わせをしていました。三人はその待ち合わせに急いでいてあの事件に遭ったわけで、間接的にですが他人事と思えず私も随分心配しました。

最近高遠さんはまたニュースになりました。イタリアのボランティア仲間が同じく武装グループに拉致されるという事件があり、その家族に会いにイタリアへ飛んでいったというニュースでした。高遠さんは何か不幸を背負った人を放っておけない、そういうタイプの女性なんですね。しかも驚くほどの行動力がある。

もともとそういう女性であったかと言うとそうではなかったようです。とても豊かで鋭い感受性を持っていたからだと思うのですが、子供の頃は社会になじめないで随分悩みました。悩んで折り合いがつかずに、「12歳で煙草を覚え、13歳でトルエンにはまり、15歳でガンジャ（大麻）マンになった」といいます。"薬"は16歳で「必要なくなった」そうですが、社会との折り合いの悪さはその後も長く続き、いわばつっぱって生活していました。

それでもその中で、こういう姿は自分ではないぞということを感じつつ生きていたのだらうと思います。27歳の時彼女は友人に誘われてベトナムに行き、ストリートチルドレンを受け入れる「子どもの家」を訪れます。そこで出会ったストリートチルドレンによって彼女は「自分にもっとも欠落していたもの」に気付かされるのです。子どもたちはスキンシップを求め、ベトナムのストリートチルドレンが彼女に抱きついてきたので彼女もそれに応えて抱きしめた。その時彼女は、この

子たちは「こんな風に抱かれたことがないんだらうな」と思い辛くなります。同時に、親を失って辛い境遇にあるはずなのに優しい笑顔を向ける子どもたちに心が揺さぶられ「癒され」ている自分を発見するのです。何不自由なく育てられた自分は懸命に鎧を身につけ、この素直さを失い他者との関係を切っている、ということに気付かされたのです。

三年後、彼女は経営していたカラオケボックスの店を閉め、アジアの国々をまわり、ボランティア活動しながら人生の修行をしました。とりわけインドに行って様々な経験をします。シャンティダン（平和の贈り物）という施設では「よだれ・鼻水を垂らす、壁に向かって延々と話しつつづける、ボール遊びで狂喜する」少女たちに会い「言葉を失い、身動きが出来なくなります」。少女たちの姿にではなく、少女たちがそうならざるを得なかった（身売りや売春の強要などの）現実に対してです。シユシュババンという孤児の家では、泥だらけで帰ってきた子供を抱いて手を洗わせていたら、怒鳴り声とともにその子の頭に平手が飛んできました。この施設では「子供を抱いてはいけない」のです。收容される子供が多く職員は少ないので平等に抱くことが出来ないからです。

2001年1月26日、西インドグジャラート州で、阪神淡路大地震の10倍もの被害を受けたという大地震が起こります。高遠さんは仲間を募って直ちに現地入りするのですが、そこで、てんてこ舞いに忙しい欧米の赤十字の人たちが「まるで犬を呼ぶように口笛ふいてインド人を呼びつけ」るのを目撃したり、毛布を配布するために村民を並ばせ家族構成などを調査するのが実にそっけないことや、所属カーストまで聞いていることに気付き、「何か違う」と違和感を覚えます。「被災者の求めているものは何なのか、自分に出来ることは何なのか」と自問します。

自問しながら村人たちの自分にたいする眼差しが暖かいと感じます。そこで気付きます。「今までボランティアの形にとらわれていて、医療現場や救済のプロたちの仕事ばかりを見てきたけど、被災者が求めている私たちが確実にできること、それはきっと近くにある」と。赤十字やN G O団体とは離れて高遠さんは、バスやヒッチハイクで村々をまわり、後片付けを手伝い、孤児になった赤ん坊の世話をし、子供と遊びます。歌や折り紙は大人気で、2度目に行く村では大歓迎されるわけです。あるインド人の医者に「君たちは僕たちに出来ないことをしている。君た

ちは愛を運んでいるんだ」と言われ、自身でも「私のなかにあった愛が、一気に人々の中に向かって走り出した」とも書き留めています。

インドの他にはカンボジアやネパールにも行くわけですが、タイではエイズ患者を收容した施設にボランティアとして入りました。末期を迎えた患者にマッサージをするわけですが、スタッフにゴム手袋を渡されます。「全身がただれ、瞼も眉毛も額も鼻も口の周りも唇も頬もほとんど崩れている」患者が身をよじるように自分で薬を塗っているのを見て、怖いと思いつつも「塗りましょう」と反射的に手が動いてしまう。その作業の後看護婦に「破れやすいから2枚重ねにした方がいい」と言われたそうです。でも彼女は毎日塗る約束をし、マッサージや爪切りもします。エイズは血液や体液に直接触れない限り感染はしないということを知っていた高遠さんは「出来る限り手袋をはめずに患者に触れよう」とも決心します。末期患者にとっても、高遠さんの歌と折り紙は大きななぐさめとなりました。うめき声を上げ続けるような患者も、高遠さんが身体をさすると寝息をたてました。

この施設で高遠さんは、「死より悲しいもの、それは死に向かう時の孤独だ」と実感します。そこで彼女は患者の最期の時を全身で共に過ごすとしたんですね。そして祈ります。「たった一人の患者さんが、自分の隣で息を引き取る人の手を握ることを思いついたなら、たった一人の看護師が、最期の一瞬に人間としての言葉をかけようと思いついたなら」と。

容易に想像できるように、高遠さんもこの旅に向かうときにマザーテレサやサイババやダライラマの教えを学ぶことを目的の一つとしていました。実際これらの「聖人」に多くを学んだようですが、それらが活動のなかで彼女の血となり肉となったのではないかと思います。「”愛”、それはモノもカネもアソビもお腹いっぱい状態まで堪能して、これじゃヤバイって思って”買った”ちっぽけな苦勞を通して、分からなかったもの」と彼女は述懐していますが、それをついに会得したのですね。自分には資格はなく能力も無いと思っていた、人の役に立つことなんて無いと思っていた。ベトナムではひょっとすると、という体験をした。自分も誰かの役に立つことが出来るかも知れない。その感覚を確信に変えたのが、インドやタイでの体験だった言えると思います。「カルカッタは、困難の極みだった。その中で私は、”私のカルカッタ”を見つけてしまっ

た。もう目を逸らすことはできない」という彼女の文章の“私のカルカッタ”は“愛”と同義と言っていいでしょう。

米国がアフガンに攻撃を始めたことについて、高遠さんはこう書いています。「ニュースを見ながら私は号泣した。頭で考えて出た涙ではなかった。魂が、心がどうしようもなく泣いていたのだ」「人を殺すことに正当な理由はない。正義はそんな時に使う言葉じゃない。私の魂はそう叫んでいる」

懸念していたイラク戦争が始まったのはインド滞在中でした。一体自分はこの戦争にどう対応していけばいいのだろうかと考えます。それも愛を持って行動するにはどうすればいいのだろうか考えるのです。2003年3月20日戦争は始まり5月1日、ブッシュ大統領は戦闘終了宣言を発しました。その時、彼女はファルージャにいたのです。そこは一年後に、彼女たちが武装グループに拉致される場所です。

ブッシュ大統領の戦闘終了宣言は、「イラク民衆と占領軍の戦いの始まりだった」と一年後に彼女は書くことになります。どうしてそのように述懐するかというと、この一年間に彼女は何回も何回も戦闘の場面、そして戦闘の結果としての悲惨な場面を目撃するからです。沢山の事例がありますけれども、ここでは一つだけ紹介させていただきます。

バグダットの近くにヒッターという町があるそうです。そこにある病院に彼女が訪ねると、クラスター爆弾の被害を受けた人々がどんどん運ばれてきました。クラスター爆弾というのはアメリカがずっと戦争で使っている爆弾です。大変恐ろしい爆弾で戦闘機から大型の親爆弾を落とすと地上すれすれになってそれがいくつかに別れ、地上に落ちた時にはさらに数百の子爆弾に別れ、その子爆弾に当たるとそこからまた数百の鉄片が飛び散るという本当に恐ろしいものです。そのヒッターという町の病院ではクラスター爆弾の被害を受けた市民たちが大勢いました。はらわたの出ている子供、手足の無い子供が多くいたといいます。なぜ子供が多くいたかということ、クラスター爆弾の恐ろしいところなのですが、直接被弾して被害に遭うことと同時に、爆発せずに残ってしまうものも多いということです。子爆弾のうち爆発しないものが非常に多いのです。しかもその子爆弾はおもちゃのような形をしていたり、綺麗な色を塗られていたりしたそうです。だから、どうしても子供が触ってしまう。被害にあって病院にも沢山の子供が運ばれてくるのです。

子どもの他にも35歳の妊娠9ヶ月の妊婦さんも被弾して運ばれてきました。彼女はショックで出産をしてしまうのですが、なんと産まれてきた赤ちゃんの体にも鉄片がいくつも入り込んでいたというのです。それを高遠さんは目撃します。彼女はその女性になんと声をかければいいのか分かりませんでした。「私は動揺していた。私は出産の経験は無いけれど、子宮にするどい痛みを感じた。終わらない痛みのような気がした。彼女の35年と私の34年、同じ時代に生まれた私たち、何がどうしてどうなってしまったのだろう。私はいつも世界のどこかで起こっている戦争を、『戦争をしない国』で指をくわえて見ていた傍観者なのだ」と記しています。私はこの文書を読んで、『戦争をしない国』と括弧でくくってあるところに意味を感じるのです。

彼女はファルージャで病院を訪ねた時、その医者には「なぜこの戦争を支持したのか」と論難されました。患者の家族には「早く薬を沢山持ってきてほしい」と頼まれました。彼女はここで、日本はこの戦争を支持した国なんだということを強く意識せざるを得ないわけです。それでも彼女はくすぐったいくらいの親日ぶりで迎えてくれたと書くのです。

ファルージャやラマディの人たちは、バグダットでは感じられないほど素朴で真面目な人たちでした。その真面目な人たちが彼女に向かって、大人も子供もアメリカ人に対して復讐を誓ったそうです。町中の激しい銃撃戦の弾痕を背景に見ながら、イラクの人々のそのような言葉を聴いて彼女は何も言えなかったと言います。そして次のようにも書いています。「いつまで待ってもテレビのニュースは私が見聞きしたことを報道してくれず、私は自分の目の前にある現実を受けとめきれなかった。悪い夢だと思いたかった」「今私は後悔している。私はもっと彼らの話を必死に聞くべきだったのに、真実をそれ以上知ることが恐かった。恐くて、怒りにあふれた日常生活の中で、ふと見せる彼らの笑顔だけを拾い集めてそれだけを信じようとした。親日だからこそ彼らは、軍服の日本人は来るなと警告し続けていたのに」と、このように書いているわけです。

高遠さんは感受性豊かで非常にパワフルな方です。2003年の5月に初めてイラクに行ったのに、多数のNGOやジャーナリストたちに情報を提供する側になります。しばしば日本に帰るのですが、その時に自民党と公明党の議員に呼ばれて話しをして訴えました。米軍がファルージャ

ヤ住民に対しどうしているのか、その弾圧ぶりや、病院が攻撃されて薬が無いこと、さらには核物質についての次のような恐ろしい実態を。

バクダッドの南東25kmの地点にツイサ核施設があります。湾岸戦争で徹底的に破壊され、その後は国際原子力機関（IAEA）の指示のもとに管理を行っていたようなのですが、米軍が攻めてきた際に管理人が逃げ出してしまいました。すると近隣の住人たちが施設内に何か役立つ物があるのではないかと中に入り込み、必要とするバケツなどを持ち出しました。そのバケツにはイエローケーキが入っていたそうです。イエローケーキとは放射性物質そのもののことです。しかし住民はその物体が何かわからないから、それをなめたり、辺りに捨てたりしたそうです。このような実状を議員に伝えました。

ストリートチルドレンに対する報道は色々されているので皆さんご存知だと思いますが、一つだけ追加しておくならば、彼女がケアしていた子供たちはハイティーンの男の子たちでした。それを見て、あれは大人の男じゃないかといやらしい表現で非難がましいことを言った評論家がテレビに出ていましたが、実際は女の子や小さい子供たちは西洋のNGOや占領軍に指名されたイラクの統治者たちが面倒をみるのです。しかし、ハイティーンの、しかも荒れていて麻薬などをやっている男の子たちを面倒みる人はいないのです。高遠さんはそういう子供たちのケアをしていたのです。

彼女はそういう活動をしながら、2004年の3月に、日本で集まった寄付金や薬を子供たちに届けたいということで、イラクに再入国して捕まってしまったのです。辛く大変な思いをしましたが、解放されて「それでもイラク人を嫌いになれない」とボランティア活動継続の意思を表明します。この発言が日本国の首相の逆鱗に触れます。「政府の人々が寝食を忘れて（解放に）努力しているのに、まだああいうことを言うのですかね」と。

彼女は捕まっている最中にこういう経験をします。捕まった最初の晩に門番をしていた男が中に入ってきて「俺はこれからファルージャに行って突撃するんだ」と言って裸になるんですね。それを見ると体中に爆弾が巻き付けられていたそうです。彼女はこのように書いています。「私

はなんということをしていたのだろう。死を覚悟して戦っている人に、私は命乞いをしていた」と。

彼女はこのような大変な体験をしたわけですが、彼女を助けるために多くのイラク人が命を懸けて大奔走しました。それからイラクの周りにはいる人たちも彼女を助けようと懸命に努力をしました。さらにヨーロッパ、アメリカ、日本の多数のNGO、あるいは平和運動のグループがインターネットを使い、或いは直接現地へ向かったりして、彼女を救い出す努力をしました。そういうこともあり、彼女自身の今までの活動があって解放されたわけです。その活動の背景にある彼女の言葉を最後に紹介したいと思います。

「苦しんでいる人の叫び声は小さい。その声に気がついたとしても、心を傾けて必死に聞こうとする努力をいつも私たちは後回しにしがちだ。命に国境はない。今私たちに必要なのは英語などではなくて、国境を越えた心の言語なのだ。」

イラクでの高遠さんの活動が東南アジア・南アジアでの活動の延長線上にあることはいうまでもないでしょう。フランスのル・モンド紙やニューヨーク・タイムズ紙、さらにはパウエル米国务長官が讃えたことが示すように、彼女の活動や思索はすでに普遍的な価値をもっていると思います。

それに対して日本のマス・メディアや政治家、評論家が彼女たち「人質」に激しい非難を浴びせ、それが大衆的ひろがりをもったことについて、日本社会の後退を感じないわけにはいきません。同時に高遠さんのような人が日本社会に生まれていることを、私は大変心強く頼もしく思います。高遠さんたち三人が解放される過程では日本、ヨーロッパ、アラブ社会そして米国のさまざまな個人や市民運動がそのネットワークを通じ見事な連携プレーを展開しました。世界的にみれば高遠さんは孤立していたのではなく内外の多くの人々に支えられているわけで、日本にも世界にも広がるネットワークが作動したということは、平和への大いなる光といえるのではないかと思います。

私も「心の言語」というものを持ちたいな、と思います。

社会学部教授

10月19日奨励

～キリスト教週間「世界平和と日本人」より

暴力の連鎖を断ち切るために イラク、パレスチナの現状

詩編 85章9 - 14節

丸山 直起

皆さんのお手元の聖書の最初に創世記という箇所があります。創世記には神が天地を創ったという話とアダムとイブの有名な話が出てきますが、第4章にはカインとアベルの話というこれもまた有名な話があります。これは皆さん既にご存知のことと思いますが、兄弟殺しの事件についての話で、兄のカインが弟のアベルを殺してしまうというすさまじい事件であります。これが人類の歴史において最初の殺人事件となり、そういう意味ではこのカインとアベルの話というのは、その後おびただしい数の殺人や殺戮が世界中のあちこちで起こってまいります、この発端になった最初の事件です。我々は毎日、新聞やテレビを観て、兎に角、世界中で人間の命というものがいかに粗末に扱われているか、ヒューマニズムという言葉が今や死語になってしまっているという実状を感じています。これは世界中だけではなくて、日本の国内でも同じような事件がたくさんあり、例えば親が子どもを殺してしまったとか、幼い兄弟を橋の上から川へ投げ捨てたとか、本当に身の毛のよだつような事件が毎日のように続いています。

こうした暴力というのはどうして発生するのでしょうか。それぞれに様々な原因があることは間違いないのですが、では我々はこういう問題に対してどのように対応したらいいのかというようなことを、今日はお話していきたいと思えます。

国際的に見ますと、イラク問題というのが皆さんにとって一番大きな関心のあるテーマだと思います。昨日(2004年10月20日)の新聞では、アメリカ軍の死者が1100人を越えたと伝えられています。

つい2～3週間前までは1000人を突破したと伝えられていたのですが、これがあっという間に100人も越えてしまう。一方でイラク人の犠牲者はアメリカ軍の戦死者の数十倍に達するというように言われています。昨日もファルージャの戦闘で子どもや家族が巻き込まれて死ぬというような事件があり、このような事件は日常的に起きています。更に中東のもう一つの紛争地域であるイスラエルやパレスチナでも自爆テロが起き、それに対するイスラエル軍の報復が続いているというように、こういったテロと報復という暴力の連鎖が止め処もなく広がっているというのが今日の世界の有様です。勿論、中東だけではなく各地で同じようなことが起こっており、スーダンでは百万人以上の人が殺されたという。これも本当にすさまじい事件です。

こうした事件に対して、我々はどう対応したらいいのか、つまり何故アメリカがイラクで2003年3月に戦争を始めたのか、何故パレスチナとイスラエルの間で血なまぐさい紛争が続いているのかという原因を探るといのは大切な仕事ではありますが、家が燃えている火事のように、そこで原因を議論するというのはあまり賢明ではないだろうと思えます。つまり家がボンボン燃えているときに火の不始末がどうだとか、或いはアイロンのコンセントを抜いたとかを議論していても始まらない。まずは火を消し止めることが大事なことで火が消えた後に原因がなんであつたかということをお我々は深く考察しなければなりません。従って、イラクの問題もパレスチナで起きている問題も、我々はその原因がどうであるか、大量破壊兵器があつたかどうかというような議論を今することも勿論大切ではありますが、それよりも一番大事なのはこの混乱をどうやって収めるか、治安をどうやって回復するかという点だろうと思えます。イラクについていえば、アメリカ軍の攻撃によって巻き添えを食う市民の犠牲もどんどん増えています。現在イラクでは当然ノーマルな生活は成り立たない状況にありますので、おのずと失業者が増えています。そういう人たちは仕事を求めている訳ですが、先日、警察官になろうということを考えて警察の募集をしているところに長蛇の行列を作って待っている、そこへ爆弾テロがあつて何十人も犠牲者が出るという、非常に痛ましい事件がありました。警察官になろうと思う裏には、自分の家族を、そして生活をなんとか維持していかなくてはいけない、そしてまた、イラクを復興していくためには当然治安を回復していかなくて

はなりませんから、そのためには警察に入って自分の能力をイラクの再建のために使いたいという思いがある訳です。こういう夢を吹き飛ばしてしまうような恐ろしさが、現在イラクには存在します。確かにテロや暴力は鬱憤を晴らすという点ではそれなりの意味はあるのかもしれませんが、しかしこれは長期的にみると非常に無意味なものと言わざるを得ません。

私は今大学のゼミで学生と一緒に、皆さんご存知だとは思いますが、東北大学で政治学を教えていらした宮田光雄氏という方がいます。ついこの間まで、白金構内のあちこちの掲示板に宮田光雄氏の講演会の掲示が貼り出されていまして、あるいはこの講演会を聴きにいった方もいるかもしれません。宮田氏は非常に敬虔なクリスチャンです。この方の著書で岩波新書から最近復刻された『非武装国民抵抗の思想』という素晴らしい本があります。この本は30年以上前に最初出版された本ですが、私は30年以上前にこの本を読んで非常に感動しました。と言いますのは、ともかく『非武装』である、『不服従』とか『非武装』ということ宮田さんは唱えており、力でもって抵抗するのではなく、敵に対して或いは占領軍に対して力で抵抗するのではなく『非武装・不服従』という非暴力で抵抗することが必要であると言っておられます。つまり武装で抵抗するということは、それなりの覚悟をしなくてはいけない。例えば戦後日本がアメリカ軍に占領された時に、日本人は抵抗しませんでした。もしこの時日本人がアメリカ軍に対して力づくで抵抗していたら、多分多くの犠牲者がでて、長期的には非常にマイナスの効果しかもたらさなかつたろうと思います。宮田さんはこうした考え方を排除する訳です。徹底的な非武装中立を主張しているのです。我々は今日本の将来の姿を考えますと、自衛隊があちこち展開する、国連の安保理事会に日本は常任理事国として入りたい、そのためには憲法も改正しなくてはいけないとか、いろいろな問題がつぎつぎと生じています。どんどん妙な方向に流されていってしまう。

ここで非武装つまり丸裸になるということの意味を考えてみたい。(『非武装中立』ということ昔社会党が唱えておりましたが、結局これは国民の支持が得られず、このスローガンは撤回されるというよりむしろ自然消滅してしまいました)『非武装』という非常に弱々しいというイメージがあるわけですが、しかしむしろ武装するということが弱

いのではないかと、つまり弱いものほど武装したがる、しかも大量の破壊兵器を持ちたがるというような傾向があるだろうと思います。ですから非武装ということは決して弱さの表れではなくてむしろ強さ、気品、品格の表れと考えなくてははいけないと思います。従って宮田氏の『非武装国民抵抗の思想』というものを我々はやはりもう一度見直していく必要があるでしょう。敗戦直後の人々の心の中にはこうした考え方は非常に強かったのですが、それをもう一度思い返す必要が今あるのではないかと、世界中で起こっている血なまぐさい紛争とか、或いは日本国内のカインとアベルの兄弟殺しも顔負けの親が子どもを殺す、子が親を殺すというような、兄弟殺しもあたりまえだというような時代を見ておきますとつくづくそう感じざるを得ないので。

こうした日本の戦後に現れた考え方がもう一度見直されて、人々の間にもう一度こうした考え方が強まっていくことを希望しながら、今日の話を終ります。

法学部教授
10月21日奨励

『毒麦』を抜こうとする前に

マタイによる福音書 13章24 - 30節

松本 敏之

(1) アメリカの強硬路線に対して思うこと

私は、本当は1ヶ月前の「キリスト教週間」の「世界平和と日本人」シリーズの一環としてお話をする予定でしたが、大型台風のために、今日に延期になりました。

この1ヶ月の間にいろんな出来事がありました。アメリカ合衆国の大統領選挙があり、ブッシュ大統領の続投が決まりました。今後4年間、アメリカの強硬路線が一層強まっていくのではないかと、私は非常に心配しています。案の定ブッシュ大統領の続投が決まると、それを待っていたかのようにして、米軍は、イラクにおいてファルージャの反米武装勢力を制圧する大規模な軍事行動を開始いたしました。

しかも問題がややこしいのは、こうしたブッシュ政権の強硬路線を支持しているのがどうも熱心なキリスト教徒らしいということです。このような道を果たして、聖書の神様は望んでおられるのでしょうか。神様の思いを飛び越えて、人間の思いが一人歩きしてしまっているのではないかと思うのです。

(2) 「いや、ちょっと待て」

今日はそうしたことを考えるのに、非常に示唆的な、イエス・キリストのたとえをお読みいたしました。「天の国は次のようにたとえられる。ある人がよい種を畑に蒔いた。人々が眠っている間に、敵が来て、麦の中に毒麦を蒔いていった。芽が出て、実ってみると毒麦も現れた」(24～26節)。僕たちはあわてました。「だんなさま、畑には良い種をお蒔きになったではありませんか。どこから毒麦が入ったのでしょうか」(27節)。

この世界は、神様がお創りになったよい世界であるはずであるのに、どうして悪が存在するのか。どうして悪いことが起こるのか。あるいは

悪い考えが出てくるのか。これは大きな問いです。私たちもこの僕たちと同じような疑問を持ちます。主人は「敵の仕業だ」と答えました。すると間髪をいれず、僕がこう言います。「では行って抜き集めておきましょうか」(28節)。ある意味で、正義感に満ち溢れた僕だと思えます。主人のために、何かしたいと思っていることもよくわかります。

しかしその僕に対して、主人は何と言ったのでしょうか。この答えがユニークなのです。「いや、毒麦を集めるとき、麦まで一緒に抜くかもしれない。刈り入れまで、両方とも育つままにしておきなさい。刈り入れの時、『まず毒麦を集め、焼くために束にし、麦の方は集めて倉に入れなさい』と刈り取る者に言いつけよう」(29～30節)。これは、とてもおもしろい問答ではないでしょうか。

主人の方が、僕をいさめるのです。「いや、ちょっと待て。そうあわてるな。そんなにあわてると、間違うぞ」。この僕は不正を許すことができない。悪がのさばっているのを許すことができない。そして自分の手で、正義の鉄槌をくだそうと申し出る。自分で解決しようとする。主人のために、と思っているのだけれども、不思議なことに、いや皮肉なことに、この僕が、主人を追い越してしまいかけるのです。しかし主人は、ここで毒麦を抜き集めることよりも、間違えてよい麦を抜いてしまわないように、ということを優先されたのです。これは私たちが今日、平和について考える時に、大事な示唆を与えてくれるものではないでしょうか。

アメリカは2001年9月11日に、ニューヨークとワシントンDCが攻撃されました。アメリカ史上、はじめてのことでありました。アメリカはその後、数ヶ月して、アフガニスタンに戦争を仕掛け、タリバン政権を倒し、さらにイラクに攻撃を仕掛け、フセイン政権を倒しました。実はアメリカにはアメリカの打算があったであろうことは言うまでもありませんが、見かけは正義の戦争を装っています。だから私たちは、そこで「それは本当に正義の神様の望まれることなのですか」と問わなければならないのです。

「悪いやつはピンポイントで正確に爆撃します」。しかしながら、実に多くの誤爆がありました。この主人であれば、悪いやつを始末することよりも、誤って誤爆することのないように、ということを優先したのではないのでしょうか。「少々の犠牲はやむを得ない」とはおっしゃらなかったであろうと思います。

(3) 敵の視点でものを見ること

もちろん、「テロという行為が許されるものではない」というのは、共通理解であると思いますが、なぜそのようなことが起きるのかということに、私たちは目を向けなければなりませんし、それにどう対応するのかということも慎重に吟味しなければなりません。それを押さえるためにと信じて、やっている行為がかえって憎しみを増幅させ、かえってテロ事件は増えています。この世界は、決してより安全な世界にはなっていません。どんどん平和から遠ざかっていくように思います。

そのような時に、私たちは立ち止まって考えなければなりません。神様は何を求めておられるのか。今しようとしていることが果たして神様の御心に沿ったことであるのか。マーティン・ルーサー・キング牧師は、ベトナム戦争の真っ只中で、「私たちは、敵の視点、自分が敵だと信じている人の視点で、ものを見なければならぬ」と言いました。

私たちは、何か間違いに気付くと、気になります。人の過ち、人の罪は一層気付きます。そして間違いを正したいと思う。しかしそうした熱心な思いがかえって問題を大きくすることがしばしばあります。自分が神様、イエス・キリストに代わって、そのお手伝いをしたいと思う。しかしいいことだと思ってやってみて、後でとんでもないことをやってしまったということもあります。誰かが、「人は時に神よりも宗教的になる」と言いました。おもしろい言葉です。「人は時に、神よりも正義をふりかざす」と言ってもいいかも知れません。神様を追い越してしまうのです。それを神様の方が、「まあまあ、そんなにいきり立たないで。じっくりと取り組もうじゃないか」とおっしゃるのです。

(4) 神の忍耐

この神様が「ちょっと待て」と言われたのは、つくづくおもしろいと思うのです。それは一体何を意味しているのでしょうか。ひとつは、今、言ったとおり、ここに書いてあるとおり、それを刈り取ろうとすると、間違っただけでよいまで摘み取ってしまうかも知れない。一緒に抜いてしまうかも知れないということでしょう。説得力があります。

しかし、私はもう一つ隠れた理由があるように思えてならないのです。この「間違っただけかも知れない」というのは、むしろ僕を説得するための理由ではないかとも思います。私たち人間であれば、確かに間違っただけ

あるでしょう。しかし神様であれば、間違っただけではないのでしょうか。神様であれば、早い段階で、毒麦と良い麦の根をきちんと分けて、毒麦の方だけを抜き取ることも可能でしょう。全知全能の神であれば、それ位のことはできないことはないでしょう。

それでは、なぜあえて、「いや、ちょっと待て」とおっしゃったのか。何を待っておられるのか。それは、このたとえを超えたことです。私たち実際の人間は、植物のように、あの人はよい麦で、あの人は毒麦、と言う風に分けることはできません。そうした中、「今は毒麦であっても、いつかはよい麦に変えられるかも知れない」という風に待っておられるのではないのでしょうか。実際の植物であれば、毒麦として生まれたものは毒麦、麦として生まれたものは麦、ということで、変わることはないのかも知れません。しかし麦においては起こりえないことが、私たち人間においては起こりうるのではないのでしょうか。(いや植物でも突然変異はあると聞きました。)今は確かに毒麦かも知れない。しかし来年、再来年、いや十年後、二十年後にはよい麦に変えられるかも知れない。私たち自身にその力はないかも知れません。しかしイエス・キリストは、それを待ち、そのために祈り、そのために十字架にかけられている。だから「いや、ちょっと待て。今は抜くな」とおっしゃるのではないのでしょうか。そして最後の時に、私が正しい裁きをする、とおっしゃっている。いや私たち自身は毒をもって死ぬかも知れません。しかしイエス・キリストは、その毒を消してあまりあるほどの毒消しの力(あがないの力)を持っておられた。イエス・キリストにはその力があるし、それを言う資格もあるのです。

イエス・キリストは、私たちに、「裁きは私がきちんとするから、お前はそう逸るな。自分で裁きをくだそうとすると、間違っただけで余計、大変なことになるぞ」と言われる。そしてそう言いながら、ご自身も忍耐を持って、命をかけて、私たちが悔い改めて、キリストの弟子になることを待っておられるのではないのでしょうか。そのイエス・キリストを思いつつ、私たちも平和を祈り、平和に向けて、正しい方向へ一歩を踏み出していきたいと思います。

経堂緑岡教会牧師

11月17日奨励

～「命」(5月病対策)より

重荷からの解放

マルコによる福音書 10章46 - 52節

吉岡 光人

エリコという町の中の道端に、一人の男が毎日座っていました。バルティマイという名のこの男の人は視覚障害者でした。彼は毎日道端に座り続け、道を行き交う人たちから施しを受けて生活していました。自分の手で仕事をし、その働きで得た収入で生きることが彼には出来なかったのです。中にはこのバルティマイに同情を寄せ、自分のポケットからなにがしかの施しをする人たちもいました。バルティマイはそういう物によって、その施しによって生きていました。その日の彼も、おそらくいつものように道端に座って、道を行き交う人たちの足音や話し声を耳にしながら時間を過ごしていました。大勢の群集が、彼の前を通り過ぎようとしていました。その騒ぎの理由を彼はある人に尋ねました。そして、ナザレのイエスという人がやって来て、その人物に大勢の人々がついてきたために騒がしいのだということを知りました。群衆は、ナザレの町から来た「イエス」という人は、どんな病も治すことが出来る人だと口々に言っていました。その中には、自分も病を治してもらった人々もおそらく沢山含まれていたと思います。バルティマイは、その人が今自分の近くに来ている、自分の前を通りすぎようとしている、そのことを知り勇気を出してその人の名を呼びました。「ダビデの子イエスよ、私を憐れんでください。」それは単に施しを求める言葉とは思えません。むしろ心の底からの叫びでありました。彼は何度も繰り返し、「ダビデの子イエスよ、私を憐れんでください。」と叫びました。群衆は、バルティマイが何度もそのように叫ぶので黙らせようとしたのですが、彼はひるみませんでした。ますますおおきな声で「ダビデの子よ、私を憐れんで下さい。」そう叫び続けたのです。群衆の足音や話声にかき消されないように、彼は力を込めて叫びつづけたのです。主イエスはこの叫び声を聞き、そ

して立ち止まりました。そして「いま、私の名を呼んだその人を呼んでくるように」と言われました。人々はバルティマイを呼びに行き、主イエスの近くに来るようにと言いました。バルティマイは躍り上がって、主イエスの元へやって来ました。すると主はこう訪ねました。「何をしてほしいのか。」彼はこう答えました。「先生、目が見えるようになりたいのです。」バルティマイの願いは、施しを下さいということではありませんでした。金銀を欲したのでは無かったのです。他の大勢の人たちと同じように、目が見えるようになりたい、ということだったのです。主イエスはこれを聞かれてこのように答えました。「行きなさい。あなたの信仰があなたを救った。」するとこの直後、バルティマイの目が見えるようになりました。この時からバルティマイは道端に座って毎日物乞いをする生活ではなくて、自分の手で働く生活をする事が出来るようになったわけです。人々からの哀れみを受けて生きるのではなくて、自分の手で働くことが出来る。そのように彼は変わることができたのです。これまでの生活に比べれば、はるかな自由を手に入れたのです。いままで見ることが出来なかったものが今は見えるようになった。今まで行くことが出来なかった場所へ今は行けるようになった。今までしたくても出来なかったことが今は出来るようになった。彼はそういう自由を手に入れることが出来たのです。目を癒されて、彼は今まで感じる事のなかった自由を体で感じたと思います。

ところが、そのような自由を手に入れた彼の行動がその後どうであったか、聖書はこう説明しています。「盲人はすぐ見えるようになり、なお道を進まれるイエスに従った。」目が見えるようになった彼が、その直後にとった選択、それは道を進まれるイエスに従ったという選択でした。イエス・キリストが進んでいる道、それはどういう道であったかと言えば、エルサレムへ向かう道です。その先には大きな苦難が待ちうけると聖書に書かれています。その道にバルティマイは一緒に進んで行くことになったわけです。言葉を替えればそれは、イエス・キリストの弟子として生きようとしたということです。長年彼は、目が見えないという不自由な暮らしをしていたわけですから、その重荷から解放された今、これからはこうしたい、こういう風に生きたい、とそれまで願ってきた思いを選び取ることが出来たはずで、自由を満喫して生きる、そのこ

とは決して非難されることではなく、むしろ当然のことです。けれども彼の取った選択は、イエス・キリストに従うということでした。誰に強制されたのではなく、彼はこのことを主体的に選び取りました。自分の得た自由、それをイエス・キリストに従うという形に使ったわけです。これが聖書のメッセージです。

私たちの人生を考えた時に、それはやり直しがきかない、たった1回のものであります。あまりに辛い人生を送ってきた人は、もう一度最初からやり直そうなどと時々考えるかもしれませんが、今度生まれ変わったら、もっと幸せになろうと自ら命を絶とうとする人は、今日決して少なくありません。けれども、もう一度最初からやり直すことは出来ません。これが現実です。一度きりしかない人生、ではそれをどのように使って生きるか。それは私たち自身が握っているはずなんです。私たちには自由があります。自分の人生を決めていく、選択肢を持っているんです。しかし同時に言えることは、私たちが生きているこの社会では、様々な力が自分を束縛していると感じます。私たちはしばしば「自由になりたい」と叫ぶこともあります。見た目には自由になれても決して自由を感じていない人は少なくないんです。聖書は、そういう私たちに対して選択肢を提供しているわけです。あなたが自由になりたいと思うのなら、本当の自由を得るべきだ、と。それは、イエス・キリストに従う生き方である、と。誰にも束縛されずに、あなたはあなたとして生きていける生き方であると言っているんです。人々の憐れみや施しを受けて生きていく必要はもうなく、自分の足で歩き自分の手で働くことが出来る、そういう自由が保証される、というメッセージを言っているんです。信仰を持って生きるということは、決して拘束されるということではありません。イエス・キリストに従うということによって、他の何者からも拘束されない、邪魔されない、そういう生き方を選び取ることが出来る。そこに本当の自由があるのだと聖書は告げているんです。あなたは何を選び取るのか。人々からの憐れみを受けて生きるのですか、それとも主の憐れみを受けて生きるのですか。聖書はそのように問いかけています。主の憐れみを受けて生きる、それは実は自由になることである、主体的に人生を選び取ることであると私たちに告げているんです。あなたはどのように生きるのか束縛を受けて生きるのか、それとも全てのそういうものか

ら解放されて自由に生きるのか、一人一人に聖書は語りかけ、問いかけているんです。その問いかけに対して皆さんはどう答えるのか、自分の心の中で問い続けて自分なりの答えを出して頂きたいと思うんです。

私たちは癒しを求めています。悲しい思いをした時、傷ついた時には、とくにそう思います。本当の癒しをしてくれる、イエス・キリスト。その方に自分の人生を乗せていく。そこに何者にも邪魔されない自由な生き方を見出すことが出来ます。聖書のそのメッセージを心にとどめて頂きたいと思います。

吉祥寺教会牧師
5月10日奨励

～「命」(5月病対策)より

あなたは？

イザヤ書 52章1 - 6節

石川 和夫

『「そして今ここで起こっていることは何か。」と主は言われた。』

これはイザヤ書の52章5節の言葉です。紀元前587年に、イスラエルがバビロニア（現在のイラン）という国に滅ぼされ、首都であるエルサレムは、完全に破壊されて、一万数千の人々がバビロンに抑留されてしまいました。その当時の人々にすれば当然、夢も希望も無くなったという絶望的な状況でした。自分たちは、神の選ばれた民であったのだから、どんなことがあっても神がお救い下さると信じていたのに、現実は何ともならず、バビロンでは、人々に散々ばかにされ、精神的にすっかり落ち込んだ状況だったと思います。

しかし、その状況の中で、「そして今ここで起こっていることは何か。」と主は言われたのです。目の前に見えることは絶望的なことばかりなのに、今ここで起こっていることとは何かと言われました。私は信じる、信仰を持つということは、出来事を神の目から見直すこと、こういう「目」を持つことではないかと思います。今ここで起こっていることの背後に、天地創造の神が共にいて、導いておられるということをしかり見抜いていくことです。

『自主決定にあらずして賜った命の泉の重さを皆称えている』 この詩は、数年前に亡くなられた島崎光正さんが、1997年にドイツのボンで開催された「二分脊椎国際シンポジウム」で、発題者として講演された際、その会場で浮かんだ詩です。二分脊椎というのは、生まれながらにして脊椎に異常があって、歩くことや排尿などで、生涯不自由を背負わなければならない病気のことです。

島崎さんはそのような障碍があった上に、両親と早くに別れさせられ

て、おばあさんに育てられ、学校にもろくに行けずに、子供たちにさんざんばかにされながら育ち、その間に信仰を持たれました。

『自主決定にあらずして賜った』というのは、自分で好き好んでということではなくて、生まれたらそうになっていたという、ある意味では呪いたくなるような不条理です。しかし彼はその生まれながらの障碍を、『賜った命の泉の重さ』と受けとめ、これがある故に、私が今生きていると解釈しているのです。

そして、『皆称えている』というのは、世界から障碍を抱える人が集まった中で、一人一人が皆生き生きと輝いているのを見たのだらうと思えます。自分の障碍を『自主決定にあらずして、賜った命の泉の重さ』と受け取るまでに、どれだけ長い苦勞と苦しみがあったのだらうと思わずにはいられません。

「今ここで起こっていることは何か」とは、私たちがマイナスだと思いきまされていることを、もう一度違う目を見た時に、そこには素晴らしい、新しい命が隠されていることに気づくこと。そのことこそが、私は救いだと思います。これが、いわゆる「御利益宗教」との決定的な違いです。

御利益宗教とは、例えば信心したらあなたが嫌だと思っていることがなくなるとか、だめだった商売がうまくいくとか、病気が治るとか、負わされている問題が解決するという御利益がある、という宗教です。聖書の信仰というのはそういうことではなくて、問題を抱えたままでありながら、しかしそこに光を見出していく。不安を抱えたまま、平安でいられるという両面を持つことが出来るということです。

自分が、二分脊椎の損傷があったことが良かったということではないのですが、そのおかげで、自分は気がつかなかったことに気付くことが出来た、そして素晴らしい命を歩むことが出来たのだと見出せることです。私たちが今置かれている状況には、『自主決定にあらずして』というところがあるかもしれないが、そこに思いがけない、隠された素晴らしいことがあるぞ、という風に教えてくれることです。

僕は、高校3年生の1学期の時に、それまで映画研究会と教会にはまっていた、勉強をそっこのけにしたために、成績が急落し、その時にもらった成績表は38人中の37番でした。しかも、その成績表を配り終

えた時に、担任の先生が言った言葉は、「このクラスは38人ではあるが、一人は病氣長欠中である。」と言ったのです。

私の通っていた学校は旧制の国立高校でしたので、東大か京大に行くのが当然の学校でしたが、「これではあかん。」と思いました。しかし、自尊心と虚栄心が強かったために、何とかいい恰好をしたいと思って、そのために「同志社の神学部に行こうかな」と、ちらっと教会で言ったことが今に繋がっています。そのようなマイナスが無ければ、今が無かったわけです。

今はつくづく、この仕事のために私は生かされたのだ、命を頂いたのだと思えるのです。今、皆さんがああでもない、こうでもないと思い悩むことがあっても大丈夫、流されていていいんです。そしてあとで、「そうか、あのことがあったからだ」という風に言えるのです。ですから『今ここで起こっていることは何か』ということに対して、答えがなくても分からなくてもいいのです。分からなくても、確かに私のことを見て、守って、導こうとしている方がおられる。そのことにいつも希望を繋いでいってほしいと願っています。

永山教会牧師
5月13日奨励

～「近隣牧師からのメッセージ」より

無力な者を選ぶ神様

コリントの信徒への手紙 1章26 - 28節

林 巖雄

ここ数年、「ナンバーワンよりオンリーワン」という言葉を耳にするのですが、私たちは小学校の頃からテストで何点取れるか、偏差値いくつの学校に合格できるかというような尺度で測られてきました。そしてまた自分自身も、或いは他人をもそのような尺度で測ってきました。周りの人々との競争、周りの人々との優劣、ある意味でそれが私たちの全てだったのかもしれませんが。そしてそのことに圧迫される思い、息が詰まる思いをしてきた方もおられると思います。そういうときに「ナンバーワンよりオンリーワン」という言葉は、ある種の救いをもたらしてくれました。必ずしも一番にならなくても良い、一番にならなくてもあなたにはあなたの良さがある、あなたにしかない点、それがあなたの大事なものでありあなたのかげがえのなさなんだ、他の人にはないあなたにしかない良い点がきっとある、それがあなたのオンリーワンなんだよ…。これは確かに周りより優れたものになりなさいというふうに命じられることよりも遥かに優しいメッセージ。少し昔の言葉で言いますと、『癒し系』のメッセージであると思います。

ところが少し意地悪な見方をいたしますと、「ナンバーワンよりオンリーワン」という考えも、結局は競争や優劣の原理にのっとっていると言える様な気がします。一番にならなくてもよい、あなたにはあなたの良さがある、あなたはかけがえのない存在なのだ。果たしてそうなのでしょうか？他の人とは違う私だけの「良さ」、それがなければ、私たちはかけがえのない存在になりえないのでしょうか？一番ではないが私だけの良さ、他の人にはないオンリーワンの良いところがないと私たちは存在する意味がないのでしょうか？あなたにはあなただけの良さがある

これはその人の個性を尊重する言葉に聞こえますが、「良さ」「良い点」

「他の人にはない」とった観点にこだわった限りは、これもまた競争や優劣やナンバーワンの原理とあまり変わらないのではないのでしょうか？

話は変わりますが、私はキリスト教関係の本を2冊ほど翻訳しました。いずれも原本はスペイン語ですが、翻訳を出版していると言いますと、語学が堪能ですごいなどと思ったださる方もいらっしゃるかもしれませんが、そうではないんですね。何故私が翻訳をするのかというと、語学には「聞く」「話す」「読む」「書く」といった能力がある中で、かろうじて私が使えるものというのは「読む」というものだったからです。「聞く」、つまりヒアリングは全くダメです。かつて妻と二人で中南米を1年ほど旅をしました。中南米のほとんどの地域はスペイン語が公用語です。私よりもスペイン語のボキャブラリーも少なく、文法力も低い というような優劣思想に私も染まってしまっているんですが 私よりもスペイン語力が劣るはずと私が決め付けていた妻が、中南米の人々が話していることを次々理解して彼らと楽しく談笑している一方で、私は聞き取りがよく出来ず、寂しい思いをしていました。ヒアリング能力というのはその場その場での瞬発力、その瞬間、瞬間での直観力というものに関係があるのだと思います。けれども「聞く」ということと違って「読む」ということは必ずしもその場その場での理解は求められません。書かれているもの、文字になっているものは、時間さえたっぷりあれば辞書を引きながらゆっくり読めばいいのです。私には瞬間、瞬間での理解力に欠けている、だからその必要のない翻訳をする、これが私が翻訳をする理由の一つです。

もう一つ理由があります。読む場合でも外国語の力が本当にある方というのは、その原文のまま理解できますから頭の中で日本語に訳す必要がありません。ところが私は、外国語を外国語として理解する力がなくて外国語の文献を外国語のまま次から次へと読み飛ばすことが出来ない。せっかく苦勞して外国語の本を読んだのだから日本語に直しておかないと損であるというケチな了見が働いて、それが、私が翻訳をする二番目の理由です。要するに私が翻訳をするのは、ヒアリングをする力がないということと、本を速読する力がないからだということです。

しかし、そんなことを言ってみたところで、あなたはある能力の不足を他の能力で補っているだけの話ではないか、それもナンバーワンのオンリーワンだのという思想と変わらないのではないかというご批判も

あるかもしれません。それもまたごもっともなご意見だと思います。ところが今日の聖書を振り返ってみますと、先ほどお読みいたしましたように、「神は知恵ある者に恥をかかせるため、世の無学な者を選び、力ある者に恥をかかせるため、世の無力な者を選ばれました。また、神は地位のある者を無力な者とするため、世の無に等しい者、身分の卑しい者や見下げられている者を選ばれたのです。」とあります。

神様が無学な者や無力な者、無に等しい者、身分の卑しい者、見下げられている者を選ばれる、これは非常に重要なことだと思います。私たちはやはり学力によって、力によって、存在感によって、身分によって、尊敬すべき価値によって自分をも他者をも判断するのではないのでしょうか？たとえナンバーワンの基準を捨てたつもりになっても、今度は自分にも良いところはあるというオンリーワンの基準を設けるのです。しかし自分に良いところがないと救われぬ、自分に自分らしさ、かけがえのなさがなければ生きていく理由がないという考えもまた、苦しい考え方のように思います。

ところが神様は、良いところがなくても構わない、あなたにしかないとりえなどそんなものさえなくても構わない、いやむしろあなたにとりえがないこと、あなたが無力であることが愛しい、価値のないあなたが愛しいというふうに、神様は今日の聖書の箇所を通して言ってくださっているように思います。

神様は私たちをそのままの姿で受け入れてくださるとよく言われるわけですが、この「そのまま」という言葉も良く考えてみると曲者で、私は、もっとはっきりと神様は無力な者、無学な者、弱い者、小さい者こそ受け入れてくださるのだと聖書を読んで思います。それは一つには、社会の中で痛んでいる人々、苦しんでいる人々、例えば心身の障害をもっているが故に価値がないとされる人々、或いは外国人労働者のように様々な差別を受けている人たち、このように社会において小さくされている人々、弱くされている人々を、神様は真っ先に愛されるということだと思います。そしてもう一つは、今度は私たち自身を振り返ってみる時に、神様は私たちの中のもっとも弱いところ、性格の中のもっとも弱いところ、或いは私たちの肉体の中でもっとも弱い部位、私たちの能力の中で最も低いと思われるところをこそ、神様が一番大事なものである、一番愛しいものである、もっともかけがえのないものであると思ってく

ださるということではないでしょうか。

学力、経済力...私たちは力で支配する世界で生きています。その世界の只中で、神様は無力なものを選ばれる。力ではなく無力を選ばれる。神様は私たちの最も力のないところを一番愛してくださる。そのようなメッセージを、今日の聖書から共に読み取りたいと思います。

蒲田教会牧師
6月8日奨励

～「近隣牧師からのメッセージ」より

憎まれることを恐れるな

ヨハネによる福音書 15章18 - 19節

長津 榮

ヨハネによる福音書には、多くの人々に知られている有名な言葉があります。ゲーテのファウストが書齋において福音書を翻訳しようとした時のあの有名な言葉、「初めに言(ことば)があった」これではだめだと言ってファウスト博士は、「初めに行為ありき」と訳したことは大変有名です。また、「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである」というこの言葉も、聖書の中にある言葉とは知られていなくても、多くの人々に知られている真理の言葉です。この明治学院は、建学の精神として「真理はあなたがたを自由にする」という言葉を掲げています。「ヘ アレツェリア エウツェリッセン ヒュマスト」という言葉はまさに明治学院そのものの言葉でありますけれども、この言葉は「グノッティ セアウトン」(汝自身を知れ)というあのソクラテスの言葉と並んで、古来多くの人々から親しまれてきた聖書の言葉であろうと思います。時として「真理はあなたがたを自由にする」というこの言葉は、自由でさえあれば真理なのだ、あるいは人を自由にするものが真理なのだと誤解されがちですけれども、それは決してそのようなことを意味しているではありません。また、新約聖書の中の新約聖書といわれる言葉、「神はその独り子を賜ったほどにこの世を愛して下さった。それは御子を信じる者が一人も滅びないで永遠の命を得るためである」は、例え聖書の全てが失われても、この言葉が伝わっていけば、キリスト教の精神は伝わっていくといわれるほどまでに親しまれている、このヨハネによる福音書の3章16節もまさに、多くの人に知られている言葉です。

このように、多くの人に親しまれているヨハネによる福音書の中に、「世」という言葉がしばしば繰り返し出てきます。ギリシャ語ではこの「世」という言葉はコスモスと言われ、18世紀頃メキシコ産の一つの

可憐な花を見たスペインの植物学者が、「本当に綺麗だ、世の持っている美しさを持っている」と感嘆してコスモスと名付けたのはよく知られていますけれども、このコスモスは秩序とか整頓、飾りという意味を持っており、それは同時に宇宙を意味している言葉でもあったわけです。今日では、「コスメティック」という言葉がありますが、このコスメティックという言葉もいわゆるコスモスから生まれた言葉です。神はこの世を愛している、コスモスを愛している、というこの言葉は実は聖書の中で大事な、「世」であるわけです。

ところがその「世」について、今お読み致しました聖書の箇所では、「世があなたがたを憎んでも、あなたがたは恐れてはならない。世があなたがたを憎むならば、あなたがたよりも先に私イエスが先に憎まれたことを覚えていなさい」という風に主イエスは語られたのです。実はヨハネによる福音書において全編に連ねられている「世」というのは、決して秩序だった美しいものではありません。むしろ神に逆らう者、己を神のように思い、傲慢にも他者を裁く者、あるいはもっと身近なところで言うならば、自分自身虚偽と怠慢の中に埋没する「世」というものが描かれています。そういう世を神は愛しているのだと語りながら、このヨハネによる福音書において主イエス・キリストの告別説教の中で、「世はあなたがたを憎むであろう、しかしあなたがたよりも先に世は私を憎んだのだ、だから世に憎まれるようなことがあってもあなたは恐れてはならない」と語られ、そして十字架の上におけるところの説教の最後では、「あなたがたはこの世では悩みがある。しかし勇気を出しなさい。私は世に勝っている。」という言葉でこのみことばを主イエスは結んでいるわけです。

皆さんは今の時代を、今の世というものを若い学生としてどのように受けとめていらっしゃるのでしょうか。私は最近日本というものは変わったなあをつくづく思わされています。日本が変わったなあと思うところの一つは、雰囲気が変わったということです。私が大学生の時は60年安保の頃でした。樺さんがあの国会議事堂の前で殺された、という出来事が起こったのは私が大学生の時でした。その時日本全体にあった雰囲気とはどういうものだったかと言うと、「殺されるようなことはあっても殺すことはすまい」、こういう言葉が私たちの国の合い言葉でした。戦

後私たちの国は、太平洋戦争での悲惨な経験をした後に、もはや私たちは武力を放棄するのだ、殺されるようなことがあっても私たちは殺すことはすまい、と決意をして国家を築いてきたのです。人々はそのような中で懸命に働いて、あるいは「戦艦ヤマトの最期」を著した吉田満の悔しい思いを全面に受けとめながら、若者たちは懸命に働き、働き蜂と言われ企業戦士と言われ結果として、海外を経済的に侵略する国家となってしまったのも事実です。しかし「たとえ殺されるようなことがあっても殺すことはすまい」という決心をしてきた国家がいつの間にか、自分達の国を守らなければならないという思いに次第に変わっていき、今朝の新聞によれば、自衛隊が多国籍軍に加わるというところにまで発展していったのが、最近の私たちの国のありようであるわけです。雰囲気が変わった、これは持てる財産を守らなければならないという思いから、自分を守らなければならないという思いへと駆られていき、やがて自分を守るためには、他者を殺さなければならないという思いとなり、そして他者を殺すことによって自分を守ることこそが真実であるというような思いへと、国の動きが変わっていったように思うのです。

私は関東医療少年院で、宗教教諭師をしています。あの有名な酒鬼薔薇くんが入院していた少年院です。肉体的だけでなく、精神的にも重傷を負った少年たちと対話する機会がよくあります。私とその少年たちに必ず聞くことの一つは、「君の欠点と長所を聞かせてくれないか」ということです。そして私はその話のあと少年に、自分の長所を五つ挙げられなかったら若者として失格だと言っています。私は女学校でも聖書を教えているので、そこでも同じことを言うのですが、「自分の長所を五つ挙げられないような人間に将来はない」。これは一つの信念です。大抵、これを言うと少年は「では先生の長所を五つ挙げてみて下さい」と言うのですが、私は「それは喋らないよ。僕が長所だと思って言っても君がそう思わないかもしれないし、恥ずかしいから喋れないよ」と言います。今度は少年院の少年のほうに自分の欠点と長所について一つだけ挙げてもらおうと、ほとんどの少年は同じことを挙げます。「短所は意志が弱い」、だから少年院を退院後も自分が更正出来るか自信がないと言うのです。多分皆さん驚かれると思いますけれども、恐喝をした少年や暴走族にいた少年たちでも、「では長所は何ですか」と訪ねると皆「優しいことです」

と答えるのです。優しいというのと意志の弱さというのはまさに共通していることであります。本当の優しさというのは、意志が弱くて優しくあるはずはありません。ノーベル賞を受賞したコンラット・ローレンツという動物学者の本の中に、チョックの話というのがあります。ある時カラスのチョックが庭からミミズを取ってきて、ローレンツの口に一生懸命入れようとしていました。ミミズは自分にはとても食べられない、と彼はチョックを払いのけました。するとチョックは悲しそうな顔をして応接セットのほうへ行きしばらく羽を休めていましたが、彼の目が輝いてローレンツの肩に止まりました。そしてチョックはもうどろどろになって溶けたようなミミズを、今度は耳の中に一生懸命入れようとしたのです。そこでローレンツは言っています。「私はミミズを食べることは出来ない。しかしチョックが懸命になって私の耳の中にミミズを入れようとしているのは受け入れようではないか。それは彼の私に対する愛情表現なのだ。それぐらい忍耐できなくて、どうして私はチョックを愛していると言えるだろうか」と。

優しさというのは、自分の気分によって意志弱く耐える力の無い、そういうやり方の中でなすがままに生きていくということではないと思います。まさに優しさとは本当に強い意味において、相手を受け入れる意志を持つということではないかと思えます。今日、私どもの国は様々なやり方のなかで意志が弱いだけの優しさを培ってきたと思えますし、とくに今日の大学生においても本当に歯を食いしばって自分を鍛えるということの無い時代になっているような気がしてならないわけがあります。明治学院の建学の精神「真理はあなたがたを自由にする」。その真理というのは、学問的な真理ではありません。真実ではありません。あるいは事実ではありません。明治学院におけるところの真実があなたがたを自由にするという真理は、主イエス・キリストは神の子であるということ、その神の子は私たちの罪を背負って十字架に掛けられたのだということ、あなたがたがどんな罪人であっても神はあなたがたを愛しているのだということ、そして永遠の命を与えようとして神は待っておられるということなのです。この世において神の子として神の愛の中に生き抜く者になりなさい、そのように生きればたとえこの世があなたがたを憎んだとしてもあなたがたは恐れることはない、あなたがたは自由

なのだ。愛することにおいて自由に生きることが出来るのだ、と言う風に主イエス・キリストは私たちに向かって語っているのではないかと思うわけです。明治学院には長い歴史があります。そして誇らしい歴史があります。とくにあの戦中において明治学院が成した誇らしい歴史は、忘れてはならない出来事だと私は思います。今日私たちの国の中で真の意味において、人から憎まれても愛しぬくことが出来る勇気と自由さを持った人間が輩出されなければなりません。人を支配し、支配することにおいて人を裁き、そして軽蔑し、自分が正しいかのごとく思い、そしてそういう自分を守ることによって他者を抹殺していこうとするような雰囲気の中で、真の優しさを持った人間がこの世に出でゆかなければならないと思うわけであります。

明治学院から卒業する学生が、そうでなくてどうしてこの世にそのような若者が生まれるであろうかという思いがしてなりません。主イエス・キリストの十字架の愛によって造りかえられ、それゆえに人々を愛する勇気を持って力強くこの世に出でゆく青年たちが一人でも多く出ることによって、社会の雰囲気が変えられていく。殺すよりも殺される道を選ぶ、殺されても殺す人間にはなるまい、というあの決意を固く秘めた若者が少しでも多く現れることによって日本全体、世界全体の雰囲気が変わっていくことを願ってやまないのであります。

本学評議員・高輪教会牧師
6月9日奨励

謙虚さをまず学ぶこと

ローマの信徒への手紙 12章9 - 21節

大塩 光

私は今から22年前に明治学院高校を卒業して、そのまま明治学院大学に通いました。こう見えても意外に真面目な学生時代を送っていたので、3年までに卒業に必要な単位は全部取ってしまって、4年生では週に1日だけ学校に来るという楽な生活をしていました。いつもこの時期になると履修登録が大変だったなあと、皆さんを見ていると思い出します。

さて、皆さんは「謙虚」という言葉を聞いたときにどんな人を思い浮かべるでしょうか。控えめで、あまり自分の意見を言わず、どんな人に対しても丁寧に笑顔で接して、優しく、かなりの能力があってもそれを自慢しないというような、まあそんな奥ゆかしい人のことを思い浮かべるでしょうか。私たちが「謙虚になれ」という言葉を使ったとき、だいたい人のことなんかお構いなしで自分を押し付けて、周りを混乱させ、威張り散らしたり、キレまくったりするような人を思い浮かべます。親や先生の教えなんかに謙虚という言葉は出てきます。

先ほど読んだ聖書の言葉は、イエス・キリストを信じて生きていくためには兄弟愛を持って、互いに愛しあい、尊厳の心を持って人と接しなさいということが言われています。確かに謙虚な生き方だと思います。世界中の人々が皆これと同じように生きていたならば、戦争や暴力はなくなるだろうし、武器を取って人の国に攻めて行くというようなことも起こらないでしょう。しかし実際に戦争は起こっているし、無益な血が流され続けています。強大な力は一部の人々に独占され、暴力の連鎖が絶えることなく起こっています。そんな悲しい流れの中でイラクへの侵略戦争も起こりましたし、人質事件も起こりました。あの3人は解放されて良かったと思いますが、その経緯には彼らと交流を深めたたくさん

のイラク人がアルジャジーラテレビで実行犯のグループに解放を呼び掛けたからこそ得られた自由でもあるのです。しかし彼らを迎えた日本の態度は酷かった。アメリカ政府でさえも首を傾げたメディアのバッシングには心の底から悲しみを覚えました。それからアメリカの4人の民間人といわれる人たちが殺害されましたが、民間企業とは言っても軍事関係でしたし、攻撃された時も完全武装していましたし、もともと米軍の特殊部隊の隊員で、あの時も米兵に軍事訓練をほどこすために送られた人たちでした。だからといって殺されていいとは少しも思いませんが、軍人と見間違えられたらレジスタンスの攻撃を受けることは承知のではありません。もうこのような暴力によって暴力を制するという無意味なことは止めさせなければならないと思います。

そしてもっと身近なところでも、例えば男性と女性が存在として同じ重さで見られている社会には程遠いし、子ども達にとっての未来も決して明るいものではない。社会的な差別も引き続き存在しているし、正しく歴史を学ぶことなしに、場当たりのいまま起きていることだけで物事を判断しなければならないような教育しかなされていない現場もたくさんあります。一つのものに対して賛成だとか反対だとか言えるのは、そのものの歴史や経緯を学ぼうとした者だけにしか出来ない意志表示になってしまっている。「賛成する」「反対する」「肯定する」「批判する」そのような意志を持っているはずなのに、「分からない」とか「関係ない」とか、無責任な生き方しか示せない人も増えている。

もちろん世の中には分からないことや、自分とは関係ないことがあって当然です。しかし学ぼうとする機会を逃し続けてきたがために、肝心の時になっても、分からない、関係ない、しか言えない。これは非常に不幸なことです。私たちは人とのかわりあいがある初めて人間として機能していけるのです。そして人は全て自分とは違う存在として周りにはいるのです。しかも神は全ての人を違う尊い存在として造られましたから、当然その違いを認めあうことが、謙虚に生きるということのスタートです。違いを認め合えないところに戦争や暴力は起こります。違いを認めないから、自分と違う存在に対して不満や怒りが湧き起こるのです。

謙虚さとは、聖書の言葉の中にあるように、愛しあうところから生まれてくるものです。愛しあうということは、いたわりあい、励ましあい、支えあうというような具体的な行動が伴ってこそ初めて愛しあうことが言えるのかもしれませんが。一人ひとりが大切なんだという、言ってみればごく当たり前のことを理解すれば済む話なのですが、私たちが信頼関係と呼んでいるものの多くに、私たち人間の弱さが見え隠れしていると思います。つまり私たちは自分と同じ考えの人たちとは心を割って話し合えるのに、違う考えの場合は信頼出来ないと思いがちです。結婚式などをする場合に、カップルに色々なエピソードを聞いたりするのですが、そんな時多いのが、色々な共通点があったから嬉しかったとか心地よかったとか言うものです。共通点を喜び、相違点を我慢するという関係では先は見えています。共通点はたまたま同じだというだけで、むしろ違いを楽しもうという関係でないと深まっていきません。ですから、違いを暴力によって埋めようとしたり、脅して改心させようとしたりして緊張関係の内に平静を保つというのではあまりに悲しすぎます。そんなものは信頼関係とは呼びません。

強さというのは「暴力」のような腕力や権力の強さのことではありません。本当の強さというのは、常に学び自分の考えを持ち、それと同時に人間としての違いを認めあい、柔らかく広い心を持つということです。その強さこそ本当の謙虚さなのだと思います。神という絶対者を知ることによって、自分が絶対者にならないことはとても大切です。

大学という場での様々な、多くの出会いを通して謙虚に学ぶ心を育てて欲しいと思います。他者と認め合えるところに本当の強さや信頼関係は育まれていきます。自分らしくあるために、そのヒントとしてでも良いので聖書に触れ、そしてそこから何らかの自分なりの学びを通して、積極的に大学での生活を楽しんで欲しいと思います。

蒲田新生教会牧師
4月16日奨励

悲しみを慰めるもの

マタイによる福音書 5章4節

横山 正美

イエスは、「悲しんでいる人々は幸いだ」と言っています。なぜならば、彼らは「慰められる」からということです。しかし、悲しみが慰められるとは悲しみが一切消えてなくなるということではないでしょう。

島しず子さんという牧師の方がいらっしゃいます。この方のパートナーの方も牧師でしたが、若くして亡くなられました。そして現在重度心身障害児の娘さんを一人で育てられていらっしゃいます。島さんは「今日が別れかもしれない」と思いつつ、「いつ別れても悔いのないように」覚悟して娘さんを育ててこられたとのことですが、その娘さんが実際に死にそうになった時、「取り乱し、困惑し、心の中で死を延期して欲しいと懇願」されたとのこと。

私たち人間はいくら信じていると思いき、また覚悟出来ているから大丈夫と言っても、いざ死という現実と直面しますと、そうした信仰や覚悟は大きく揺らいでいきます。

島さんは次のように記されています。

「亡き夫は、5日間の病床生活で、29才で召された。あまりにも短い彼の人生と闘病。事情を知らない人々は彼の人生を未完とする。確かに夫は苦勞と苦惱の末に神学校を出ながら、4年しか牧会できなかった。人の一生の価値が、何かを成就することにあるとしたら、夫は成し得ていない。天寿を全うしたとは言えない、愛する者達の死だが、しかしそれぞれに完成していたと思っている。『何をもって？』との問いには、彼らが神からの人生を受容し、愛することに熟達していたから、と答える。彼らから私が受け取ったものは、彼らの業績の成果ではない。夫が、姉が、父がいかに他者を愛し、いかに日々在ったか。彼らが地上に在った日々、私を愛してくれた姿と、彼らが慕い求めた神への信仰が、死し

て尚語っている。人の生涯は何を成したかということ以上に、その人が『いかに在ったか』に存するのではなからうか。死に晒されて愛する人々が残したものは、神への信頼と私達への愛であった。死の床で弱さそのものになって、神を求め続けた姿。特別信仰厚かったとか、殊更愛が深かった訳でなく、失敗も欠点もあった市井の一人であった。」

神を信じたらもう悲しみを味わわなくなるというではありません。聖書は「悲しんでも慰めがもたらされる」と語っていますが、ではその慰めはどのようにして到来するのでしょうか。島さんは愛する者との死別を体験する中で、慰めを「彼らが残した神への信頼と私達への愛」というものに見出されていました。恐らく財産や名声や名誉だけでは悲しみは慰められないのではないということでしょう。

少し話が変わりますが、私たちの許容量を越えた水が注がれますと、その水は溢れてしまいます。そうしたときに取られる対応策としては、大きく二つのものが考えられます。一つは自分の許容量を大きくすること、もう一つは自分に注がれる水の分量を小さくすることです。そうすれば溢れることはなくなります。この水を悲しみやストレスと考えますと、死別の悲しみのようなものはどんなに小さくしようとしても、死そのものを除去しないかぎり限界があります。同様に、自分の許容量を大きくすることも、際限なくできることはありませんし、仮に少しずつコップを大きくすることができたとしても、それは徐々に徐々にであり、時間がかかります。では私たちは、自分のコップの容量では受け止めきれない悲しみに出会ったとき、どうすればいいのでしょうか。悲しみに溺れるしかないのでしょうか。実はもう一つの道が残されているのではないのでしょうか。それは自分のコップで受け止めきれずに溢れている部分を他のコップで受け止めてもらうという道です。

受け止めきれない辛さや悲しみに襲われたとき、そうした自分の傍らでその悲しみを共に受け止めてくれる存在がいること、そうした繋がりが私たちが悲しみに溺れることから守っている、私たちに慰めをもたらしているのではないのでしょうか。すなわち、自分のことを掛け替えのない命として受け入れ、その命が壊れないことへ向けた繋がりによって自分が支えられていること、そのことが私たちに慰めをもたらすのではないのでしょうか。聖書の人たちは、そのようにして自分たちの悲しみを共

に受け止めてくれたイエスとの出会いを通して神と出会って行ったのではないのでしょうか。

非常勤講師（キリスト教学）
6月22日奨励

フィリピンの子どもたちと出会う

マタイによる福音書 19章13 - 15節

浜口 春奈

私は高校1年の時から明治学院高校で『Free The Children Japan』という、子どもが世界の子どもたちのために活動する国際協力団体に参加していました。

はじめに、その『フリーザチルドレン』という団体について少し説明させていただきます。

『Kids Can Free the Children』は、当時12歳のカナダの少年、クレイグ・キールバーガーさんによって設立されて、世界中の全ての児童労働や児童への搾取、貧困の解消など、子どもの権利を守るために子どもが主体となって取り組んでいる国際協力団体です。現在ではカナダをはじめアメリカ、ヨーロッパ、インド、ブラジル、日本を含む世界35カ国で10万人以上のメンバーを持つ国際ネットワーク組織に成長しています。

主な活動として、学校やリハビリテーションセンターの建設、児童労働の廃絶を訴える署名運動、児童労働に関する情報や運動のための手引書の作成、更に商品が「大人が正当な賃金と労働時間で生産していること」を示す『ラグ・マーク』を織物製品に表示するよう政府や企業に働きかけ、実現させるなどしています。

日本支部は1999年に活動を開始し、現在全国で支部が立ち上げられ、たくさんのメンバーが活動しています。明治学院高校にも、性的虐待を受けた経験をもつフィリピンのピアさんという少女との出会いから『Free The Children Japan』の支部が立ち上げられました。具体的には、イラクの子どもたちにサッカーボールを贈ったり、アフガニスタンに衣料を贈ったり、フィリピンの施設にはクリスマスカードを送りました。「第二回 児童への商業的性的搾取に反対する世界会議」に行き、世界中の活動団体や実際に被害に遭った子ども達の話聞いたこともあります。

また世界の子どもたちの現状を知ってもらうために、渋谷、原宿をボードを持って行進したり、チャリティフットサル大会を開催するお手伝いもしました。高校の文化祭では展示会を開いて、私たちの活動の紹介をし、仲間を増やしました。

『フリーザチルドレン』の特徴は、子どもが中心となって活動しているところにあります。子どもの気持ちは同じ子どもだからこそ理解できる、子どもが活動しているということでのインパクトや影響力が大きい、ということもわかってきて、「キッズパワーが世界を変える！」そんな言葉も夢ではないと思うようになりました。

私が初めて『フリーザチルドレン』の説明会で観たビデオは、性的暴力の危険にさらされるフィリピンの子どもたちと、子どもたちを守ろうと自分の身の危険もかえりみず活動するシェイ・カレン神父のお話でした。

性行為の意味が何なのかもわからないような子どもたちが、「売春宿」とよばれるところで、毎晩何人ものおとなの相手をさせられている現実を知っていますか？家族のため、生きていくためにはそうするしかない、自尊心を無くして耐えている子どもたちがいます。或いは、家族や雇い主から性的暴力を受けて、深く傷ついた子どもたちがいます。本当の意味での「子ども時代」を過ごさずにおとなになる彼らの気持ちを考えてみてください。早すぎる、望まない出産やエイズなどで命を落とす彼らのことを思ってください。この現実決して他人事ではありません。性的搾取者と呼ばれる中に、たくさんの日本人がいます。日本では、子どもポルノを大量に作っています。その過程で多くの子どもたちが性的な虐待を受けているのです。「子どもが望んでその仕事をしているのならいいじゃないか。」、そのような言葉を耳にすることがあります。けれど、幼い子どもたちは自分のさせられていることのリスクを理解できません。気がついたころには逃げられない状況になっているのです。このような被害に遭った子どもたちは、自分は汚れている、生きていない方がいいのだと思ってしまうことがあります。

子どもたちを苦しめる問題は今の世界には数え切れないほどあります。その中で私たちが特に取り組んだのは児童労働の問題です。現在世界では2億4600万人の子どもたちが労働を強いられています。それは心や身体に大きな負担になる労働です。子ども兵士や麻薬に関わる仕

事など、すぐにでも命にかかわるような危険な労働でもあります。

「貧しいのだから仕方がない。」そんな言葉で片付けられる問題では決してありません。貧しさ・古い伝統や考え・教育の不足...といった様々な要因が関わっています。その証拠に、おとなの失業者が多いにも関わらず、児童労働が深刻な国もあります。子どもの方が賃金が安くて済むし、言うことを聞く。そんな理由から子どもを雇うおとなたち。家のお金のために子どもを売る親。女の子は学校に行く必要がないという間違っただけの考え。それらは「仕方がない」ことではないと思います。

こうした現実を知り、全身に悲しみや、嫌悪感、怒りといった感情が湧き出したのを覚えています。「何故子どもたちがこんな目に遭うのだろう、子どもたちのために自分にできることをしよう。」と高校時代、仲間と募金活動やアボドカシー（人権擁護）活動をしてきました。しかし、こうした活動をしている中でも、これでいいのだろうかという思いを常に持っていました。何も見えない、見えていない状態で一方的に支援をして満足しているのではないだろうか。自分がやっていることは意味があるのだろうか...そんな気持ちから、私はフィリピンに行くことにしました。

フィリピンでは二つの施設を訪れました。一つは、シェイ・カレン神父がいるプレグセンターです。そこには35人の性的虐待を受けた少女が保護されていました。内、5人は売春宿から助け出され、保護された少女です。そして、13人の少年が刑務所から助け出され、保護されていました。刑務所から助け出されるってどういうこと？と思われるかもしれませんが。家がなくストリートで生活していた彼らは、浮浪罪や引ったくりといった小さな罪で捕まり、或いは罪をなすりつけられ、弁護士をつけることも知らず、おとなの犯罪者と同じ牢屋の劣悪な環境に入れられていました。刑務所にも、援助を必要としている子どもたちがたくさんいるのです。

もう一つの施設は、ギリヤドセンターというところで、そこには様々な理由から親と暮らすことの出来ない子どもたちが生活していました。ストリートチルドレンだった子もいます。

私は子どもたちとの交流を心から楽しみました。「ボランティア」という関わり方ではなくて、「友達」として。コミュニケーションは、英語はきちんと話せなくても、片言の英語、身振り手振り、表情、そして何

よりも手を握ったり抱き合ったりすることでお互いの気持ちや言いたいことはしっかりと伝わっていた気がしました。触れ合うことの大切さをあれほど感じたことはありません。

子どもたちは本当に素直で、純粋です。人の心の痛みや喜びをわかり、お互いを思いやるのが出来ます。私は先入観で、辛い体験をしてきた子どもたちは、人を信じたり頼ったりするのを避けてしまうのではと考えていました。はじめはもしかしたらそういうこともあったのかもしれませんが。施設の職員の方々の愛情を受けて友達や兄弟と過ごすうちに、自然と自分を出せるようになって、甘えたりもするようになったのではないのでしょうか。

そんな子どもたちが今まで体験してきたこと、親と過ごすことの出来ない今の状況などを考えていると、とてもやり切れません。楽しく一緒に過ごしている中でも気付く、寂しそうな表情や少しオーバーな甘え方、何か伝えたそうな目や、腕や足の傷...、今現状で自分にできることは子どもたちの手を握って、名前を呼んで抱きしめること...。でももっと大切なことは、子どもたちを苦しめるあらゆる暴力と戦うことだと、カレン神父を見て改めて思いました。

幸せの価値観というのは人それぞれです。ましてや育った環境や国が違えば、大きく変わってくると思います。発展途上国の開発について、現地の案内をしてくださった山田さんという方から「DOではなくUNDOを考える」というお話を聞きました。マニラの中心部は大きなビルが立ち並び、色々な国の人が行き交っていました。でも、そのすぐそばはスラム街です。大きなごみの山があり、そこで生活する子どもたちがいました。地方の綺麗な自然と都会のギャップ、ごみの問題。それは日本にも言えることであると言われハッとしました。そして原因が日本も含める先進国にもおおいにあるのだということも。開発を進めることが全ての人々の幸せにはならないということも、子どもたちの無邪気な顔を見てはっきりと感じました。

私は将来、日本で児童福祉に関わる仕事をしたいと思っています。子どもたちをあるがままに受け止め、あらゆる暴力から護りたいです。そして、子どもたち自身が描く「まっすぐな道」を歩いてほしい。そのためのサポートを彼らのパートナーとしてやっていきたいと思っています。しかし、フィリピンで出会った子どもたち、世界中の子どもたちの存在も

絶対に忘れてはいけないと思います。そこには決して見過ごすことができない緊急事態がたくさんあるからです。

よく、「向こうの子どもたちは目が輝いている」と表現されます。日本の子どもと何が違うのか、なぜ輝くのか、輝く目が見つめているものは何だろうか。この疑問に、全て答えが出たわけではありません。実際、ストリートで物乞いをする子どもの目が輝いているとは、どうしても思えませんでした。ただ、見つめているものが違うことは理解できました。

「同じ高さで見る」ということの本当の意味が、今回私の中で大きな課題として残りました。子どもたちが見つめるものを同じように見つめるために、私は、私が「子ども」である時に、子どもたちへの暴力に対して感じた悲しみや嫌悪感や怒りといった感情を絶対に忘れずにおとなになりたいと思います。

余談ですが、大学に入って山登りをするサークルに入りました。今までの私は正直に言うと環境問題には一切触れようとしてきませんでした。私にはあまりに大きすぎる問題に思えたからでしょうか。しかしフィリピンで、それではいけないと思ったのです。そして、身近なところから考えていこうと思いました。一步一步大地を踏みしめて、小さな草を大切に歩いて歩く。雲の上からたくさんの山を見下ろす。そんなことをしているうちに、「自然はやっぱりすごい…」としみじみ感じます。それを少しずつ行動に移していきたいです。

そしてこれからも、フィリピンで出会った大切な友達のために、活動を続けていきたいと思っています。

社会福祉学科 1年
6月23日奨励

救われるということ

ペト口の手紙 2章25節

茂木 恵

私が初めて教会に行ったのは、高3の10月の始めで、ある友人に誘われて行きました。彼女とは小学校のときから高校までずっと学校が一緒だったので、彼女の家で教会の集まりをやっていることはなんとなく知っていましたが、私には全く関係のない世界だと思っていました。私はキリスト教にあまり興味はなく、特定の国や地方の、女神信仰とか、巡礼の習慣とか、そういうものに興味がありました。だから始めは、誘われても行く気がしなかったのですが、どういうわけか誘われてから何日か後に、やっぱり行こうと思いました。始めに行ったのは、祈禱会といって、みんなで一人一人お祈りをする会でした。私は、こんなに近くに本気で神様を信じている人たちがいたのだな、と思って少し感動しました。でも、テレビや本でいろいろな信仰について調べているときみたいに、やはり自分はただの傍観者だなと思いました。

その後は、日曜日の礼拝に出るようになりましたが、ちょうど受験期で、日曜の午前中は大体学校での模擬試験があって、出席することが難しくなりました。しかし牧師先生が、日曜の午後に友人と私と先生の三人で、聖書の学び会をもってくれることになりました。そこで聖書やキリスト教について、質問形式でいろいろなことを学びました。たくさん質問して、何時間と居座ったこともありましたが、そこでわかったことは、神様はすべての人の神様で、すべての人を愛しているということです。すべての人ということも、もちろん私も神様に愛されているということです。そのことがわかったとき、単純にとてもうれしくて、神様を信じるようになりました。友人はととても喜んでくれて、受験期にもかかわらず、毎朝一緒に聖書を教えてくれたりお祈りをしてくれたりと、朝の小さな学び会を一緒にしました。

順調にいていた私でしたが、ある時ふと、本当に神様に愛されてい

るのだろうか、と思うようになりまして。神様を信じるようになって、自分は何も変わっていないということに気付いたからです。私は、神様の愛する対象にはなり得ないと思いました。外面的には、いい人でいられても、正直なところで自分の内面を見たとき、私には到底人には言えないような汚い部分があります。こんな人間が神様に愛されるはずがない、なんという勘違い人間だったのだらうと思いました。そう気付き始めたら、なんだかとても悲しくて寂しくなりました。

そんな気持ちでずっと過ごしていたわけですが、そんなとき牧師先生が私にある聖書の箇所を開いてくれました。それは、ヨハネの手紙第一の1章9節の「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちを清めてくださいます。」という、以前にも教えてもらった箇所でした。みなさんは、言い表すくらいでいいのか、と思われるかもしれませんが、これは十字架と深い関係があります。パッションという映画を見た方もいらっしゃると思いますが、イエス・キリストが十字架で死んだのは、私たち一人一人の代わりに神の罰を受けるためでした。その事実をここに信じる人を、神様は赦すと言ってくれます。牧師先生は私に、神様があなたを赦すとおっしゃるのに、自分は赦されない、と勝手に思うことは、神様の言うことはうそだと言うのと同じだ、と言いました。私は、はっとして、神様にごめんなさいというお祈りをしました。

それから私は、本当に神様が私を愛しているということがわかり始めました。神様は軽々しく、私たちに口先だけで愛しているよーと言っているのではなくて、イエス・キリストという、神様のたった一人の息子を深い苦しみに遭わせてまで私を赦し、どんなときにも愛していただけるからです。

私はその後、4月の始めに洗礼を受けました。教会に行き始めの頃に、友人と毎朝していた朝の小さな学び会は、高校を卒業してからの今も、大学は違うけれど、毎朝駅の前に集合してこっそり続いています。神様は目で見たり触ったりはできませんが、神様を信じて共に歩んでいる人の優しさや思いやりなど、その人間性を通してその存在を感じるがあります。その友人は厳しいところもあるけれど、私のところに神様を信じるための種を蒔いてくれました。今はおそらく、やっと芽が出たかなというくらいです。友人がわたしのところに蒔いてくれた種を、神様

は今も育てていてくれます。神様は、今の私にとってお父さんのような存在です。もちろん地上にもお父さんはいるわけですが、天にもお父さんがいるということです。私は帰るべき神様のところに帰ることができました。そして、神様から救いをもらいました。

私を愛していてくれる神様はすべての人の神様ですから、もちろんみなさん一人一人の神様でもあります。神様の完全な愛は、今もみなさんに注がれています。もし、みなさんが神様のことを知りたいと思ったら、神様にお祈りをしてみてください。お祈りは神様とお話しすることです。神様はみなさんのことを知っていますから、どんな言葉で話しかけたとしても、そのお祈りを聞いてくれます。そして神様はかならず答えてくれます。

それから、聖書を持っている方はどうぞ読んでみてください。聖書には神様が私たちに伝えようとしている神様からのメッセージが書かれています。神様がいるなんて信じられないという人も、本当にいるかわからないか自分で調べてみてください。わからないところは、キリスト教の授業の教授やクリスチャンの友人に聞いてみてください。私は今もわからないことがたくさんあって、質問したり調べたりしています。そして、その神様からのメッセージに私たちが答えていくとき、本当の救いや平和が実現すると思います。そのために必要な、私たちのすべき良い行いも、神様はすでに備えていてくださると聖書には書いてあります。

最後に、最近私がとても実感したみことばを読みたいと思います。ペテロの手紙第一の2章25節です。「あなたがたは羊のようにさまよっていましたが、今は、自分の魂の牧者であり、監督者である方のところへ帰ったのです。」

フランス文学科1年
7月6日奨励

共に生きるということ

ローマの信徒への手紙 12章15節

大野 寿子

私はメイク・ア・ウィッシュという団体で仕事させていただいています。メイク・ア・ウィッシュは難病の子ども達の夢をかなえるお手伝いをするボランティア団体です。今日は、この仕事の中で出会った、一人の子どもの話からはじめたいと思います。

清水美緒ちゃんという女の子です。彼女は急性白血病でした。彼女の夢は、絵本を書いて出版する事でした。彼女はその夢をかなえ、一冊の絵本を書きあげました。『いちばん大切なもの』というタイトルです。へんてこ山ののほほん村に住む、6匹の動物たちが宝の箱を探しに旅に出ます。途中色々なことに出会いながら、とうとう宝の箱を見つけます。しかし宝の箱を開けてみると中は空っぽです。その時6匹の動物たちは気付くのです、共に乗り越えた試練や培った友情が本当の宝物、一番大切なものなのだ。

美緒ちゃんは本を制作していく過程の中で、一つの願いを持っていました。自分と同じように病気で闘っている子どもたちに、この本をプレゼントして励ましてあげたい！ということでした。そして100冊の本をプレゼントする事になりました。美緒ちゃんには、100冊の本にサインをするだけの体力が残されていなかったのです、しおりを作る事にしました。その印刷原稿にするために、「これに書いてね。」と言って小さな短冊を渡しました。普通なら「読んでください。」とか「この本を差し上げます。」と書いてサインをするところですが、彼女は違いました。彼女はその短冊に、「つらいのは君ひとりだけじゃないんだよ。」と始まるメッセージを書いたのです。小学校4年生で突然の発病、退院、そして再発。本当につらい闘病生活のなかで、つらいのは自分だけじゃない、大好きな家族も養護学校の先生も同じなんだよ、と語りかけるのです。そして「手をつないでみんな、けんこうを育てよう」とメッセージを

発信するのです。そしてしおりの下のほうには、九人の子どもたちが笑顔で手をつないで輪になっているイラストが添えられています。つらい闘病の自分もいっぱいの中で、名前も顔も知らない、でも確かにいる病気と闘う同じ仲間に向かって、「手をつなごう！」と語るのです。

とても残念なことに美緒ちゃんは、本の出版される1日前に亡くなってしまいました。美緒ちゃんは、「たくさんの人に読んでほしい。中にあるたくさんのかかけを楽しんでほしい。」と書いていました。楽しむという現実から一番遠いところにいたはずの美緒ちゃんが「楽しんでほしい。」と言ったのです。私には美緒ちゃんが手をつなぐ仲間がいる、家族がいる、それが一番大切なもの！というメッセージを残してくれたように思います。

ボランティアの仕事は、このつなぐ手と手の、ほんの先のところに手を重ねさせてもらう仕事だと思っています。ほんのちょっと手を添えるだけです。しかし手を添える時、私たちは確かにそこにぬくもりを感じ、あたたかさ、豊かさを感じる事ができます。手をつなぐ、重ねる喜びがそこにあります。ボランティアの喜びは、まさにここにあると言って良いでしょう。ただ私たちには、難病と闘う子ども一人一人の一生までを背負い込むことはできません。これもまた事実です。

でも、この手と手をしっかりと握って離さないお方がいます。それが神様です。神様は、私たちが落ち込んでどうしようもなく凹んでしまっただけで、どんな間違いをしでかしても、しっかりと握って離さないお方です。だから私たちは力づけられ、励まされるのです。

メイク・ア・ウィッシュは、これまで670人の子どもたちの夢をかなえてきました。その中には、今も病気と闘っている子どももいれば、美緒ちゃんのように亡くなった子どももいます。しかし、私が関わらせていただいた子どもたちからは、確かなメッセージを受け取りました。肉体を見ることはできなくても、どの子どものメッセージも私の中で生き続け、私を捉えて放しません。

また、こうして子どもとの関わりから色々なことを教えられる時、神様は私の隣り人としてこの子どもたちを備えてくださったのだ思わされています。私がたくさん問題を抱え込み、落ち込み、凹む時、この子どもたちからのメッセージによって私は力づけられ、励まされて立ち上がることができます。

それ以上に、その必要を知って隣り人を備えてくださる神様は、あなたの必要・・・を、私の必要を・・・と、1人1人の必要に配慮して下さるのです。そのお方は今もここにおられ、働いておられます。そしてしっかりと手を握って放さないお方なのです。

メイク・ア・ウィッシュ オブ ジャパン 東京本部事務局長
10月4日奨励

神様の力

イザヤ書 40章27 - 31節

大野 順

私はいわゆるクリスチャンホームで育ったので、生まれた時からいつも側にキリスト教がありました。また私は、幼い頃に親の意志で子どもに受けさせる洗礼である、幼児洗礼を受けました。そして、小学校六年の頃、自分の口で神様を信じていると告白する信仰告白というものをしました。しかし、信仰告白をしてからも神様はいないとか、その存在を疑うことがとても多かったです。しかし、結局は神様のことを信じ、ここまでできました。

それは神様を通して多くの大切な出会いがあったことが一つにはあると思います。私は神様を通して多くの人に出会ってきました。その中でも、特に忘れられない出会いは、言葉が通じなくても神様を通して親しくなった人たちとの出会いです。私はアメリカに行き、そこで現地の礼拝に出席したことがあります。その教会には日本語を話せる人はもちろんいませんでした。また私も相手が何を言っているのかもほとんど理解できませんでした。しかし、同じ神様を信じているということはお互いに伝わり、すぐに仲良くなることができました。その時は特に意識はしていませんでしたが、このとき言葉が通じなくても親しくなれたのは神様の力なのかもしれません。

また私は大学に入ってから特に神様のことを素直に信じることができるようになったと思います。大学に入り、始めのうちは慣れない環境で不安を抱えていました。そんな中でまず行ったのは教会でした。教会ではすぐに打ち解けることができました。そして、抱えていた不安も和らいだように思います。不安を抱えている時、それを癒してくれるのは神様であることをその時実感しました。そして教会に行くことが、私にとって欠かせない事となりました。普段は疲れてしまうことも多くありますが、礼拝にだけは疲れていても出席し、気の許せる多くの人たちと出

会うことや、聖書の言葉を聞くことで、新たな力を得ます。もし、私が教会に行くことなく過ごしていたら今までやっていけなかったのではないかと思います。

それから私は、大学に入って聖書を自分から読んでみたいとなぜか思うようになりました。そのようにして読むと、今日読んだこの個所が特に先ほど話した経験とも重なってとても好きになりました。言葉の中にあるように、神様は私が疲れている時はいつもそばにいて力を与えてくださるということを覚え、またいつも共にいてくださるということを信じて、これからも歩んで行きたいと思っています。

また、この言葉を実感させられような人との出会いもありました。その方はクリスチャンで、以前生きる希望を失ったために、自殺未遂を起こしたということを聞きました。しかしその方は、今ではそれを全く感じさせないくらいに生き生きとしておられるので、その話を聞き本当に驚きました。なぜその方がそこまで変わったかという、それは信仰を生きる希望として、毎日過ごしているからだということをおっしゃいました。その話を聞き、生きる希望をも失っていた人に生きる力を与える神様の力とは、本当に大きなものであることが分かり驚きました。

また、このように奨励をすることになったわけですが、私はこれまでこのように自分の信仰について人前で話したことはありませんでした。特に友達の前では、以前友達からクリスチャンであることを変だと言われたことをずっと引きずっていたために、自分がクリスチャンであることさえも素直に言えませんでした。しかし、これからは自ら積極的に口で公にクリスチャンであることを言っていきたいと思っています。そのように考えるようになったのは、クリスチャンであることを隠すなんて本当に神様を信じているとは言えないのではないのかと思ったからです。そして、特に親しい人には私がクリスチャンであることを知っておいてもらいたいとも思いました。それは、私を理解してもらう上で必要不可欠なことだからです。だから、この奨励で話すという機会は神様が与えてくださったよいチャンスだと思い感謝しています。

私は神様に反抗し背を向けることも多いですが、いつもまた今まで話したような出会いや経験から、そこに神様の力が働いていることを実感し、神様の方をいつのまにか向き直していることに気づきます。それは、私が神様から背をそむけるたびに、これらのことを通して神様は私

に「こっちを向きなさい」と呼びかけているからなのかもしれません。私もその声に従順に歩いていけるようになりたいです。

皆さんの中には、神様なんていないと思っている人も多くいると思います。でも一度聖書を読んでみて、神様の言葉に出会ってみてください。聖書にも、「信仰は聞くことにより、しかも、キリストの言葉を聞くことによって始まるのです（ローマの信徒への手紙 10 : 17 ）。」と書かれています。ぜひ一度キリストの言葉に耳を傾けてみてください。

心理学科 1 年生
10 月 7 日 奨励

天災と感謝

イザヤ書 51章3節

鍛冶 智也

本日のチャペルのテーマは、「天災と感謝」です。ご想像のとおり、一週間後の火曜日は「勤労感謝の日」でありまして、この「感謝」に因んでその意味を皆さんと一緒に考えてみようということです。また、今年は、度重なる台風の襲来や新潟中越地域の大震災も発生し、多くの生命を奪う災害の多い年となりました。天からの災いと恵み、一見矛盾した事柄が私たちの身の回りに起こっていますが、このことの意味を一緒に考えてみましょう。勤労感謝の日は、歴史的には、天皇が新穀を天神地祇に勤め、自らも食する新嘗祭（にいなめさい）という祭事の日でありました。すなわち、「稲の収穫を祝い、豊穰を祈る式典」であったのです。それが、戦後、1948年ですが、勤労感謝の日として国民の祝日となりました。その趣旨として「勤労をたつとび、生産を祝い、国民がたがいに感謝しあう」日とされています。この時期、全国各地で収穫祭あるいは収穫感謝祭が祝われております。江戸時代に驚大明神の収穫祭を起源とする酉の市は、現在でも東京・浅草などでは「1年の無事に感謝し、来る年の幸を願う」祭として催されています。今年は、一の酉が11月2日、二の酉がおとといの14日、三の酉が26日といった具合です。これは、先日の酉の市で入手した熊手ですが、こうして稲が付けられていまして、稲の収穫を祝う象徴がなされています。また、熊手は「運を『かつ込む』、福を『掃き込む』」といい、開運招福・商売繁盛を祈念したごろあそび・洒落なのですが、農作業に使った熊手を使うというも農耕文化の祭を示しています。

それではなぜ、新嘗祭が戦後に勤労感謝の日となったのでしょうか、一説には北米で行われている Thanksgiving 感謝祭からアイデアをもらったといわれています。天皇家の祭りが国民の祝日になったことの意味やその是非をここで扱うつもりはありませんし、北米で行われている感

謝祭も、聖書にそれが記されているかどうかという意味では、聖書的ではありません。北米以外のキリスト教の地域、ヨーロッパやアフリカ、南太平洋地域、韓国などのアジアの地域ではみられないことから、そういう意味では、クリスマスや復活祭のようなキリスト教の本来の行事ではありません。しかし、「勤労感謝の日」から得られる感謝の意味と感謝祭における感謝の意味を比較することによって、真にキリスト教における「感謝」の意味が知り得ると思われま

さて、皆さんも、臨時収入があった時、ギャンブルで当たった時、宝くじで当選した時、そんな時になにかに「感謝」したという経験があるかもしれません。しかし、「感謝」祭で感謝することは、本質的に異なるものがあるのです。それは何でしょうか。一緒に考えてみましょう。

現在の感謝祭に直接関連するものとして、世界で最初におこなわれたのは、1621年11月のアメリカ大陸でありました。かのメイフラワー号でオランダのライデンから渡ったピルグリム・ファーザーズが、プリマスの地での植民2年目に行ったものが起源であるようです。この植民地でリーダー格であったウィリアム・ブラッドフォードは、Of Plymouth Plantation（「プリマスの植民地について」とでも訳すことができます）と題する彼の日記のなかでこのように記しています。適宜訳してみますと、「やっと収穫物の採り入れが始まり、それぞれの家に蓄えることができ、冬に備えることができるようになった。健康や体力も収穫のおかげで回復した。漁にでることができたので、鱈やスズキなどの魚も、それぞれの家庭に蓄えることができることとなった。夏の間中、食糧が不足することはなかったし、冬が到来するにしたがって、家畜を蓄えることができるようになった。水鳥だけでなく、七面鳥、鹿などである。一週間に一度は肉を食することができるようになっただけでなく、トウモロコシの収穫で、十分な食糧が得られるようになった。これで、イギリスの友人に〔これは債権者のことですが〕、作り話ではなく、本当の報告ができるようになった。」と記しています。自分やまわりの人々がなんとかいきながらえることにホッと、植民地経営のために出資した人々に、約束の品々を送ることができ、植民地の存立がひとまず保障されたことにホッとしたようすがわかります。感謝祭として3日間続いた祭典には、漁を教わる仲間でもあり、また時に敵対していたインディアンも招かれ、収穫を神に感謝し、七面鳥や鹿肉の御馳走が出されたよう

です。あたかも宗教画のように、この時の様子を描いた絵画を、アメリカで観たことがあります。

さて、この時の感謝は、何に対してなされたのでしょうか。もちろん、神への感謝であるのですが、その年の収穫だけをとりあげて感謝しているのではないことに注目してみる必要があります。これまでの、その時々食べる食糧に余剰ができ、ストックができるようになり、迫り来る冬の到来に備えることができることへの感謝です。前の冬には、何人もの同胞を失っていました。それがこの年には飢えからくるものは最小限に抑えられそうであったのです。すなわち、皆で共に冬を越すことができる希望が生まれてきたのです。一緒に春を迎えられる光がみえてきたのです。自分たちの共同体の将来にビジョンが与えられたのです。ですから、この「感謝」は、これまでの天候や漁・猟の幸運に対して、すなわち過去の出来事に対して感謝しただけではないのです。自分たちの生存に希望が与えられたことに対して、未来が与えられたことに対して、将来のビジョンが与えられたことに対して「感謝」しているのです。過去を振り返って、お互いの労をねぎらいながら、互いに感謝し合い、神に感謝しているだけではないのです。小さいながらも自分たちが築きつつある社会が、将来も発展していくという確信が与えられたことに対して、前向きであり方で感謝しているのです。ビジョンをもって生活し、それに向かって努力し、困難を克服したところに感謝が生まれるのです。感謝とは、後ろ向きではないのです。

そして、もう一つ注目すべき点は、感謝の祭では、和解がなされたということです。敵対する原住民をも招いて感謝をしたという故事です。神の前で人間の愚かさや罪とを認め、和解をし、他者の存在を認めたのです。そこでは、自分たちのコミュニティの将来のみならず、他のコミュニティへの配慮が「感謝」の名の下になされたことを記憶すべきです。

カナダでは10月の第2月曜日が感謝祭であり、もうだいぶ以前に終えています。アメリカでは来週の木曜日に感謝祭が行われます。1941年に景気対策のために1週間繰上げられて以来、11月の第4木曜日となっています。この日からおよそ4連休があり、この週末は、アメリカ国民のほとんどが故郷などに大移動する日で、交通機関はごった返します。日本で言うとお盆に相当するかもしれません。そして、家族一同が集まって、七面鳥の丸焼きとカボチャのパイを食べます。七面鳥は

新大陸特有の大型の食用の鳥でありましたし、カボチャは植民地時代の初期、リンゴや梨が手に入らなかったころは果物代わりの野菜だったのです。ここではもちろん、アメリカ大陸で開拓が始まったばかりの貧しく、苦しかった時代に思いを馳せ、あまり美味しいとは思えない七面鳥料理やカボチャを食べながら先人に感謝すると同時に、家族やコミュニティが今後も繁栄が確認できることに感謝するのです。ついでに申し上げますと、感謝祭の翌日からの金土日は、冬物バーゲンの日ときまっています。クリスマス商戦のキックアウトです。

プリマスの植民地は、実はその後、経営主体としては失敗し、存在が消滅します。アメリカの実際上の祖先は、他の植民地であるマサチューセッツ湾植民地やウィリアムズバーグのヴァージニア植民地であるというのは歴史的な事実であるようです。しかしながら、象徴、神話、物語として、ピルグリム・ファーザーズが、アメリカ人の精神的支柱となっているのは、そして今なお感謝祭が祝われているのは、どうやらこのことと関連がありそうです。未来への確信というものが、キリスト教の文脈としてもここで交差しているのです。

先程も述べましたように、感謝祭は聖書にある祭りではありません。旧約の世界では、生贄を用いるような収穫の祭りがあったようで、そのような記事が何ヶ所か記されております。生贄といった、生命の死のイメージとそれを復活させたいという願望の現れがそこに描かれているのですが、この点において将来のビジョンと密接に関わっているのだということを感じないではられません。

今年の日本は、天の災いが多く悲惨なことがたくさんありました。そして、経済状況もまだまだ沈滞しています。目を外に向けてみても、災害や戦争など日本以上に困難を抱えている地域も少なくありません。私たちの将来にとって、何らかのビジョンは得られないのでありましようか。そうしたビジョンに、私たちの感謝する促しが、私たちの内にあるのでしょうか。将来の希望と光を見つめるには、私たちの目は曇りすぎてしまったのでしょうか。改めて、問い直さなければなりません。

法学部教授

11月16日奨励

セラフィムの讚美にあわせて

イザヤ書 6章1 - 7節

中山 和子

私は在学中へボン聖書研究会に入っていました。通称へボ研を通して深く自己をみつめる事ができたと思っています。「鉄は鉄によってとがれ、人はその友によってとがれる(聖書)。」そのような中で、私は信仰を確かなものとする事ができました。いま私がこの世に生きているのは、私を愛し、私のためにご自身をお捨てになった神の御子(イエス)を信じる信仰によっているのです。

私はその後、神学校で教会音楽の勉強を3年間させていただいたので、今日は賛美、音楽という面からお話したいと思います。

皆さんは、神様のお姿を想像されたことがあるでしょうか。明治学院に入学して初めて神、キリストについて考えられた方もあるでしょう。私は皆さんに、目に見えるものだけではなく、私たちの目に見えない世界があるという事に、思いをとめていただきたいと思います。

本日の聖書箇所にかかれていたのは、イエス・キリストが生まれる約740年前のできごとです。ウジヤ王が死んだ年、イスラエルは北と南に分かれていました。この書を書いたイザヤという預言者は、南王国の王の治世4代にわたって神の言葉を預かり、王や人々にまっすぐに伝えた人です。それは厳しい時代でありました。イスラエルの北にはアッシリア、南はエジプトという大国に挟まれ、やがて北王国はアッシリアにより滅ぼされます。そのような中で小国ユダは小舟のようにゆさぶられます。そんな不穏な時代のはじまりに、イザヤは預言者として神に召し出されるのですが、この聖書箇所はその召命の時のことで、イザヤは神様のお姿を見せられたのです。

「ウジヤ王が死んだ年に、私は、高くあげられた王座に座しておられる主を見た。」

イザヤは、おそらくエルサレムの神殿の中で、はるか上の方に御座に座

しておられる神様を見ました。このお方は天地を創造された唯一の神、他に並ぶものはなく、聖い神であります。2節のセラフィムは、神に仕える天使たちです。賛美しつつ神のそばに仕えるものとして、他の聖書箇所にもいくつか記述があります。

「彼らはそれぞれ六つの翼があり、おのおのその二つで顔をおおい、二つで両足をおおい、二つで飛んでおり、」
この様子は謙虚さを示し、礼拝する姿を表しています。

「互いに呼びかわして言っていた。『聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。その栄光は全地に満つ。』その叫ぶ者の声のために、敷居の基はゆるぎ、宮は煙で満たされた。」

大きな音声が想像できます。宮は煙で満たされます。これも神の聖さがみちている様子です。

J.S.バッハは、これを音楽であらわしました。口短調ミサ曲の1節です。ラテン語で「聖なる」は Sanctus <サンクトス> といいます。Sanctus Dominus Deus Sabaoth.

私は高校生の時にコンサートでこの曲を初めて聴きましたが、神の聖さにふれたように心がふるえました。大きな声でサンクトスの合唱、その声で神殿の敷居がふるえるのを表して、ティンパニがとどろき渡りまです。続く合唱の三連音が上昇、下降し、セラフィムが大きな翼を広げて飛翔する様が現れます。サーンクトスと長い音が現れますが、これは永遠を表し、ベースパートにおいてサンクトスドミヌスデウス...と、オクターブの跳躍で歌われるのは、神の完全性を表します(ここで実際に音楽を聴いてもらいました)。

これはJ.S.バッハの想像によるファンタジーです。聖書の言葉を音楽に表そうと、彼は多くのすぐれた試みをしました。私たちは、神様の聖さ、永遠性、完全性というそのお姿を、J.S.バッハ等の作曲家の音楽をとおして垣間見ることができます。あくまでも人間のファンタジーですが、神様に感性的に近づく大きな助けになります。The Lord of the ringsの作者のトルキンや、ナルニア国物語のC.S.ルイスが壮大なファンタジーの物語を書いています。それはクリスチャンである彼等が、聖書において壮大なスケールで現わされた神の御計画、深い愛と知恵を小説に焼き直したものです。彼等の作品を通して、神の世界のすばらしさをリアルに感じることができます。

目に見えるだけの世界でなく、目に見えない世界があるということ。それは私たちが日常目にしているこの世界だけではなく、神の支配しておられる天上の世界がある、ということです。そして私たちのこの日常の歩みは、永遠への世界につながるものです。この地上での歩みが、永遠の祝福を決定づける意味をもつのです。

イザヤは神の姿を見、聖さにふれて、あまりにも愚かで汚れている自分に「ああ私はだめだ。」と言いました。けれども神は、そんな彼のもとにセラフィムをつかわし、触れて下さるお方です。「見よ。これがあなたのくちびるに触れたので、あなたの不義は取り去られ、あなたの罪も贖われた。」

神様は私たちに近づいて、罪を贖って下さるお方です。それがクリスマス イエス・キリストなる神が私たちのところに来て下さった、ということなのです。

私が大学時代にイエスの御声をきいたように、皆さんにも神様との出会いがありますことを、心より祈ります。

菅生キリスト教会 牧師夫人
11月29日奨励

マリアの明暗

ルカによる福音書 1章47 - 55節

廣石 望

少し古いデータですが、2002年度版の国連開発計画（UNDP）『人間開発報告書』によれば、寿命・教育達成度・生活水準の指標に基づく「人間開発指数」の点で、日本は世界で第9位です。ところが男女の政治・経済的な活動領域における能力と機会の拡大程度を、議員・行政職・企業管理職・専門職などの数によって比較測定する「ジェンダー・エンパワメント指数」では、日本は第32位にまで後退します。日本社会では、まだまだ女性たちが社会における意思決定の場に十分には迎え入れられていないと言えるでしょう。

ところで原始キリスト教は、古代社会において、希にみる女性参画型の運動であったことが知られています。待降節に属するこの日、「マリアの賛歌」と呼ばれる聖書の言葉に耳を傾けてみましょう。

1999年の春、私は9年ほど暮らしたヨーロッパの留学先から帰国して、複数の大学で講師として働き始めました。初めのうちは、とりわけ多くの女子学生が、みな同じ顔に見えたものです。彼女たちの多くが、いわゆる「チャパツ」でした。とりわけその目もとには、手の込んだお化粧が施されていて、まるでファッションモデルのように美しい。さらに当時は「ガングロ」と呼ばれるお化粧も流行していて、こうなると個人の顔の判別も難しい。そんなふうでしたので、大勢の女子学生たちが同じ顔に見えたのだらうと思います。それでも時間とともに、学生たちの内面や感情に触れる機会も増え、次第に個性の違いも分かるようになりました。その中で、とりわけ彼女たちの自尊感情について、一般的な意味で気づいたことが二つあります。

一方で、しばしば彼女たちは、自分の能力による自己実現に対して強迫的ともいえる観念を抱いています。みな厳しい競争社会の中で、能力（測定）主義に晒されて生きています。ここにあるのは、「私は～ができる。ゆえに我あり」という自己理解です。しかし他人との比較にもとづく自尊感情は、必然的に優越感と劣等感の間を揺れ動くこととなります。もっともこれは、男子学生にもそのまま当てはまることでしょう。

他方で、彼女たちは、女性としての伝統的な役割期待、いわゆる良妻賢母教育の現代版とも言うべき「女らしさ」の価値観から、なかなか自由になれないようです。彼女たちは、主として男性たちの評価を非常に気にしています。例えば、学生がレスポンスシートに次のような事例を報告してきました。「ある授業で夫婦別姓に関する模擬討論をしたら、別姓反対の立場に回った学生にはみな彼氏がいた。男の子たちがどんな女性を求めているか分かる気がした」。なかなか鋭い観察です。あるいは、こういうものもあります。「工学系の大学のクリスマス会に参加したら、いっぱいナンパされて、私もまだまだいける と思って嬉しかった」。ここに見られるのは、「私は他者から求められる。ゆえに我あり」という自己理解です。

要するに彼女たちは、能力主義と「モテモテ」主義の間で引き裂かれているように見えるのです。しかし両方に共通しているのは、私の価値が他人によって値踏みされるという状況です。

こうした視点からマリアの賛歌を読むとき、私が学生たちに見出す自己理解との著しい相違が目に見えて飛び込んできます。

能力や所有にもとづく自己実現という考え方とは対照的に、マリアは、神が私に何をしたか・私の身に何が起こったか という視点から自分の存在・尊厳を理解し、そこから生きていく勇気を手にしています。「今から後、いつの世の人も／私を幸いな者と言うでしょう、／力ある方が、私に偉大なことをなさいましたから」。これは「私は～ができる。ゆえに我あり」という考え方とは違います。ここにあるのは、むしろ「私は超越者から受け入れられた。ゆえに我あり」とでも言うべき自己理解です。このプライドを、マリアから奪い去ることのできる人はいません。彼女はそれを神から受けとったのですから。

他方で、受動的であること、他者から欲望されることに自分の価値を見出す考え方とは対照的に、マリアは、神に心を閉ざして「高ぶる者」「思い上がる者」「権力ある者」に向かって激しい言葉を語り、はっきりと弱者の側に立っています。「主はその腕で力を振るい、／思い上がる者を打ち散らし、権力ある者をその座から引き降ろし、／身分の低い者を高く上げ、飢えた人を良い物で満たし、／富める者を空腹のまま追い返されます」。ここにあるのは、「私は他者から求められる。ゆえに我あり」という受身の姿勢ではなく、むしろ社会の不正義を大胆に批判し、これに抗って行動する能動的な姿勢、「私は弱者と連帯する。ゆえに我々あり」という姿勢です。

一方では 私は神の憐みに出会った。神のみに栄光あれ と歌い、他方では 私は弱者と連帯し、社会の不正義に抵抗する と歌うマリアの姿は、人間が神にならず、人間らしくあることを求める、古代の宗教的な表現と言ってよいと思います。ではマリアにとって、クリスマスはどのような出来事であったのでしょうか。

新共同訳聖書が、神は「身分の低い、この主のはしためにも／目を留めてくださった」と訳す箇所を、ある聖書訳は、神は「そのはしための悲惨を顧みてくださった」と訳します(岩波版『新約聖書』、佐藤研 訳)。ではマリアの「悲惨」とは、何だったのでしょうか。もちろん個人の心の中は分かりません。しかし客観的に見て、二つのことを指摘できると思います。

第一の悲惨は、マリアが許嫁であるヨセフとの婚約期間中に、彼が関与しないかたちで妊娠したらしいことです。これは世間的に言えば、婚外妊娠にあたります。当時のユダヤ社会では「姦通罪」に問われる可能性がありました。シングルマザーは、その子ともども社会的に差別の対象となったのです。マリアは、若い女性として、絶体絶命のピンチにありました。第二にマリアは、そのようにして生まれてきた長男イエスを、十字架刑という古代世界においてもっとも悲惨で恥ずべきもの、さらには神から呪われた者の死と見なされていた処刑によって失いました。彼女は、子どもを暴力によって奪われた母親の一人になったのです。

それでは、これら二つの悲惨に関連して、マリアが経験した神の「顧

み・憐み」とは、何であったでしょうか。一つは、彼女の許嫁ヨセフが、婚外妊娠したマリアを妻として受け入れ、その結果生まれた男子に「イエス」(ヤハウエは助け)という名を与えて、自分の息子と認知したことです。彼女は息子ともども、社会的・経済的に命拾いしました。もう一つは、処刑されたイエスを神は見棄てなかったという信仰、いわゆる復活信仰が生まれたことです。これは世界から見棄てられたと思われる者たちとの連帯を、内容的に含んでいます。

マリアの運命は、彼女の息子イエスの運命と並行関係にあります。あるいは、イエスの生涯と運命によって逆照射されていると言ってもよいでしょう。「マリアの賛歌」は、歴史上の一個人としてのマリアには、おそらく遡りません。むしろキリスト教信仰を媒介とし、その光のもとで、マリアの身に降りかかった悲惨と恥を、神の慈しみと誇りに向けて転換することによって、マリアに託してシンボリックな連帯を果たした女性たちが生み出した歌である可能性があります。

「私は～ができる。ゆえに我あり」という個人の能力と所有に基づく自己理解から、「私は超越者から受け入れられた。ゆえに我あり」という奪い去ることのできない尊厳に基づく自己理解へ、あるいは「私は他者から求められる。ゆえに我あり」という他者の欲望に対して受動的な自己理解から、「私は弱者と連帯する。ゆえに我々あり」という積極的に社会に働きかける自己理解へという転換の方向性を、現代の学生たちに感じることはあります。皆さんの中にも、この方向性は、微かな隠されたかたちであれ存在すると思います。そして、そのことに目覚めた学生たちを通して、「マリアの歌」は実質的に歌い継がれてゆきます。

以上のような意味において、ここに集った私たち、キリスト者である者もそうでない者も、ともにイエス・キリストの誕生を待ち望みたいと思います。

非常勤講師(キリスト教学)
12月2日奨励

心の渇きがいやされるために

ヨハネによる福音書 4章13 15節

東野 尚志

皆さんは、今朝、起きたとき、最初に何をしたか覚えていますか。毎日の習慣で、あまり考えずに行動している人が多いのではないかと思います。朝起きると、まずトイレに行く人もいるでしょうし、テレビやラジオのスイッチを入れる人、新聞を取りに外へ出る人、それぞれ習慣になっていることがあると思います。私はたいてい、まず水を飲みます。朝起きると喉が渇いているんです。特に、昨夜はついっっかりして、ホットカーペットの上で寝てしまいました。朝起きたら、何だか体中カラカラに干からびているような気がして、急いで水を飲みました。すぐに水が飲めるというのは、ありがたいことだと思いました。

水というのは、私たちの体にとって、大事なものです。体の中の水分が足りなくなると、ひどいときは病気になります。たいていは、その前に喉が渇いて水分を補給するわけですがけれども、場合によっては、簡単に水を飲めないこともあります。大きな地震や災害が起こると、水道もストップします。そういうときに備えて、食べ物よりも先に用意しなければならないのは水なのですね。水を飲まずにいると体はおかしくなります。その状態が続くと、最後には死んでしまうのです。

私たちの体にとって、水がとても大事だということ。これは喉が渇くという経験を通して、よく分かると思います。でも同じように、私たちの心が渇く、ということも、どれだけ真剣に考えているでしょうか。体と同じように、私たちの心も渇くのです。そして、そのまま渇き続けると、心が死んでしまいます。心というのは目に見えないから、分かりにくいかもしれませんが、でもそれは外に表れてきます。

心が渇いてくると、まず初めに、人に優しくすることができなくなります。喉が渇くと喉ががさがさになるのと同じように、心が渇くと心ががさがさになって、とげとげしくなります。周りの人の気持ちを思いやる優しさがなくなってしまいます。心に瑞々しさがなくなると、喜んだり、

歌ったり、笑ったり、悲しんだり、そういう心の動きも鈍くなります。そして平気で人にいやなことをしたり、人を傷つける言葉を口にします。しまった、と思って後で悔やむ気持ちが働くうちはまだいいかも知れません。でもそのうちに、人を傷つけても何とも思わなくなってしまう。人のことなんかお構いなしで、自分のしたいようにする。そんなことを続けていると、心が死んでしまうのです。

それならば、心の渇きは何によっていやされるのでしょうか。がさがさになった心、人に優しくすることのできない心は、もっと大きな優しさによってしっかりと包まれることによって、少しずついやされていくのだと思います。その優しさの中で、私たちの心がしっとりとした潤いを取り戻していくのです。他の人のことを考えたり、他の人に優しくしたりすることは、私たち自身が周りの人から優しくされて、大事にされているということを経験する中でしか身につかないのです。家族から大切に愛されて成長する。あるいは先生や友だちから、大事な存在として重んじられる。そういう交わりの中で、私たちの心は潤いを与えられていくのです。

「体の命」と「心の命」。しかしそれだけではありません。私たちにとって、もっと大事な命があります。それは、「霊の命」です。少し分りにくいかもしれませんが、霊的な存在としての私たちの命です。簡単に言うと、神とつながっている命。そう言ってよいと思います。私たちは、自分の親から愛されて育ち、周りにいる人たちから大切にされているだけではありません。いや逆に、残念ながら、そういう愛情に満たされないうで、渇いたままの心で過ごしてきた人にも、神の愛は、同じように注がれています。私たちひとりひとりが、ひとりの例外もなしに、神にとって大切なかけがえのない存在なのです。私たちは神に愛され、神に守られているのです。

体に水が足りなくなると、体は病気になります。心に潤いがなくなると、心も病気になります。そういうとき、私たちは体の医者や心の医者のところに行って、治してもらわなければなりません。では、私たちの霊、神とつながっている命が病気になってしまったらどうすればよいのでしょうか。この病気は実に深刻です。神とつながっている命が渇いてしまうと、私たちには、自分が神とつながっているということが分からなくなるのです。私たちが神から愛されているということも分からなく

なる。いや、神がおられるということも分からなくなる、信じられなくなる。だから、この渇きをいやすために、どこへ行ったらよいかさえ分からなくなります。そればかりか、自分がそういう病気にかかっているということも分からなくなってしまうのです。

自分からは神を求めることができない。どこへ行けばよいのかも分からない。しかし、渇いている、満たされない。そういう私たちのところへ、神の独り子であるイエス・キリストが来てくださいました。私たちが、すべてのものの造り主であり、天の父である神を正しく知ることができるように。私たちがもう一度、神に愛されている者としての霊の命の健やかさを取り戻すことができるように。そのために、イエス・キリストは、この地上に、私たちと同じ人間のひとりとして生まれてくださったのです。そして、ご自分の命を捨てて、霊の命を私たちに分け与えてくださいました。クリスマスは、この救い主の誕生を祝うときなのです。

聖書の中には、いろいろな良い話が出てきます。なるほどと納得させられたり、励まされたりする話がたくさんあります。しかし、それだけではない。それはすべて、私たちがイエス・キリストと出会うための道なのです。主イエスは言われました。「この水を飲む者はだれでもまた渇く。しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」イエス・キリストが私たちに与えてくださる水、それは決して渇くことのない命の水です。私たちのところにまで来てくださった救い主、イエス・キリストと出会い、この方によって捕らえられ、この方の愛によって包まれるとき、私たちの霊と心と体と、その全体の命が本当の健やかさを取り戻すのです。

クリスマスとき、飲んで、食べて、自分たちが楽しく過ごすことだけに終わらせてしまってはもったいないことです。私たちの命の渇きをいやすまことの救い主が来てくださいました。この素晴らしい救いの恵みをしっかりと受け止めて、本当の優しさと健やかさを味わい知るときにしたいと思います。

鎌倉雪ノ下教会牧師

12月8日奨励

クリスマスの闇と光

ルカによる福音書 2章1 - 14節

深津 容伸

今日読んだ聖書の箇所はクリスマスの部分ですが、羊飼いたちは外で野宿をしていたのでそこには闇がありました。クリスマスというのは闇を背景としていると思います。それはあとで述べさせていただきます。現代もまた闇が覆っている中でのクリスマスと言えるのではないのでしょうか。ご存知のように中高年の自殺が増加しています。また若者達の無業者、「ニート」も増加しています。中高年の場合考えられるのはリストラによる経済的な行き詰まりで、若者達の場合は働きたくても仕事が無い、仕事が無いのだから気楽に生きようというのならばそれでいいのですが、そうではなくむしろ仕事に就きたいという思いが強くて、また周りの人からやんやと言われたりして心の中にはストレスが満ちているという状態になっています。共に原因は社会が適切な仕事を用意していないことにあるのではないかと思います。仕事に就いている人は人手が足りなくて仕事に追われっぱなしという状態です。結果として仕事を持っている人間はうつ病になったり、自殺したくなるほど仕事に追われていくということが起こっています。また仕事の無い人間は自殺したくなるほど精神的、経済的ストレスに晒されてしまうという状態で、どちらに転んでも自殺したくなるというような、おおきな闇に覆われています。これからの日本に必要なのは、一概には言えませんがワークシェアリングという考え方ではないかと思います。一人当たり8時間労働、今では10時間から12時間労働にまでなっているかもしれないところを、なかなか難しいかもしれませんが、スウェーデンなど北欧でなされているように、平均4時間労働にしてまでも雇用を増やすことではないかと思います。

しかし、こういう社会を造っていくためには、互いのために互いに重荷を負いあうことが大事だと思います。例えば、高い社会保障制度の費

用を皆で負担し合うなど、互いのために生きるという精神が必要になると思います。

今日の聖書の箇所においても闇が覆っているわけですが、例えばマリアは婚約者ヨセフという存在があるにも関わらず、婚約者の子供ではない子供を身ごもってしまうという問題を抱えました。これは場合によっては不倫ということになり、当時では死刑にもなりかねないことです。しかし彼女はそれを「みこころのままになりますように」と言って受け入れます。一方婚約者のヨセフの方はこうしたマリアについて思い悩んでいました。そして最終的には結婚早々、自分の子供ではない子供を自分の子供として受け入れるという決断をしたわけで、お互いに大変な決断だったと思いますが、それぞれなりに闇を抱えていたと言えると思います。そして夫婦にとっての闇はルカによる福音書2章1節以下だと思えます。ここでローマ皇帝のアウグストゥスが人口調査をしております。これはそれぞれの出生地に帰って登録をするというもので、人頭税という税金を納めるという過酷なものでした。それは例え病人であろうがこの登録をしないと罰するというようなことだったと思います。結果としてマリアは臨月の大きなお腹を抱えながらナザレからベツレヘムという約90キロの旅をしなければなりません。一週間の野宿の旅だということが想像出来ます。起伏の多いごつごつとした尾根づたいの道を、ロバの背中に揺られて、いつ陣痛が来るか分からないという闇を抱えながら歩んで行ったのです。結果として、彼女は夫ヨセフ以外の周囲の誰からの助けももらえないで、馬小屋で危険な出産をするということになったのです。誰からの助けも無かった、宿屋には彼らの泊まる場所が無かったということが彼らの闇であったと思います。そしてそれは非常に現代的な闇ではないかと思います。それぞれが自分のことしか考えないで、人のことは構ってられないというのが今の闇であると思えます。

しかしこの闇の中に大いなる光が射し込むことになります。ルカによる福音書の2章9節にはこう書いてあります。「すると主の天使が近づき、父の栄光が周りを照らしたので彼らは非常に恐れた。」このように神からの光が射し込んだのです。その光とは何でしょうか。それは2章の11節に書いてあるように「今日ダビデの町であなたがたのために救い主が

お生まれになった。」ということです。あなたがたのために、人のためにお生まれになったのがイエス・キリストだということです。人となって生まれ、人のために生き、そして人のために身代わりとなって十字架で死を遂げる。そうした存在がイエス・キリストであるのです。人のために生き、人のために死んだ、これが光であるということです。ということはつまり、私たちも光になり得るということだと思います。イエス・キリストの存在は我々もまた人のために存在することによって、一人一人が闇の中に輝く世の光となることを促しているのではないかと思います。光を受けるばかりではなく、光を与えることが出来る存在、すなわち私たち自身が光となれるように決意をするクリスマスでなければならぬと思います。このような思い、決断を持ってこれからのクリスマスを待ち望むものでありたいと願います。

非常勤講師（キリスト教学）
12月10日奨励

私を照らす光

イザヤ書 49章6節

ヨハネによる福音書 8章12節

増田 泉

みなさんはキリスト教の授業を最低一度は受けたことがあると思います。そこでみなさんはどのようなことを考えたでしょうか。キリスト教を含め宗教にはじめて触れた人は興味を持って聞いたかもしれません。逆にキリスト教をはじめ宗教には全く興味が無く、必修だからいやいや聞いていた人もいるかもしれません。もしくはイエス・キリストの福音を聞いて信仰に目覚めた人もひょっとしたらいるかもしれません。そういう話は残念ながら私は聞いたことがありません。多くの方はキリスト教の話聞いたって自分には関係ないし、何の役にも立たないと思っているのではないかと思います。確かにキリスト教の話は金儲けの話を教えるのでも、節約術を教えるのでもないし、就職試験に受かる方法や出世術を教えるわけでもないし、外国語が話せるようになるわけでもありません。ですが私はそのようなことよりももっと大事なことを神が私たちに与えてくださっていると思います。それを今日のメッセージとして話したいと思います。

私はこの一年間キリスト教関連の科目を2つ取っていました。また日本文化論という日本の民族宗教や仏教について扱った授業も取っていました。卒業単位には影響がないので、趣味でとっていたということになります。宗教マニアと言ってしまうとそれまでなのですが、関心があったので授業を受けていました。では、なぜ関心があったのかということなのですが、私自身もなぜ関心があるのかをそれほど深く意識していなく、あるときそのことを考え始めたら、それなりの経過がありました。

私の両親はクリスチャンで私は幼いころから教会に通っていました。教会には日曜学校と言ったり子供の教会と言ったりする子供のための礼拝があり、そこで神やイエス・キリストの話を小さい頃から聞いていました。それで今に至るまで教会には通いつけているのですが、学校はというとキリスト教系の学校に入ったのはここが初めてで、小・中・高とずっと公立の学校に通っていました。当時は真面目で正直な子供だったので教会の話もよく聞いたし、学校の授業もわりとよく聞きました。特に社会の授業は好きだったのでよく聞いていました。中学くらいまでは公立学校は宗教教育というか宗教の紹介すらないので全く問題なかったのですが、高校に入ると世界史でまずキリスト教と戦争の話が出てきます。十字軍などです。他にも現代社会の授業だったと思いますが世界の宗教の紹介が教科書に載っていました。私は当初、「今更キリスト教を紹介されたって、こっちは物心つく前から教会に通っているんだ」「テストに出れば満点確実だな」と高をくくっていました。ですが、そこに載っていたのは見たことも聞いたことも無いことでした。漢字の熟語が7つくらい載っていたのを覚えています。そういったことは小さいころから教会に通っていた私にとってはショックでした。戦争を起こしたという事実はもちろん大変なことなのですが、そういうことをこれまで全く知らなかったということがショックでした。最も衝撃的だったのはプロテスタントは節約することを重んじ、日曜日は礼拝を守り、パンとチーズとワイン程度の慎ましい食事をする、と書いてあったことです。ところが我が家では日曜日は教会には当然行くのですが、家族全員そろって一週間の中でも最も豪華な食事をする日でした。その教科書が正しいのか、はたまた我が家が不信仰だったのかはわかりません。とにかくそれはひとつの具体例ですが、私は幼い頃から教会に行っていて神やイエス・キリストの話は大好きだけれども、どうも私が小さい頃から教会で教わってきたキリスト教とは違うキリスト教があるというか、教会では教えてくれないキリスト教があるというような考えを持つようになりました。もし例えるならば、昔から通っていた八百屋さんとか魚屋さんとかがあってご主人ともとっても仲良くしているのだけど、近所にできたスーパーの方が安くて、美味しくて、めずらしいものも売っていることを知ってしまった。というような感じになったのです。それで何かモヤモヤしたものが私の心の中に溜まっていきました。

そのようなものが背景にあったこともあり、今もキリスト教の話を聞くことや、他の宗教の話を聞いてみてキリスト教と比べてみることに関心があるのですが、それは小さいころから神やイエス・キリストの教えを聞いて育ってきた私にとっては自分自身を知ろうとすること、自分が信じているものはいったい何なのかを模索することであると思います。

では私が今やっていることは特別なことなのでしょう。クリスチャンの家に生まれたということだけ見れば統計的には確かに少数派ですが、私だけが特別だとは思いません。神様はこの明治学院に私たちを招きそこでキリスト教に出会う機会を与えてくださいました。キリスト教は人間が生きるうえでもっとも基本となることを私たちに伝えていていると思います。それは生と死、正義と悪、罪と許し、愛、救い、などです。それを受け入れるかは個人の判断に委ねられていますが、少なくともそのようなキリスト教の教えに触れ、それを良いと思うにしろ、違うと思うにしろ、そのように考えるときにはその人自身がそれらの価値観に対し、自分自身の価値の基準を意識して受け入れたり、批判したりするのだと思います。つまりキリスト教は私たちが生きていくうえで基本となることを問い直す機会を与えてくれているのだと思います。

私たちはもうじき卒業しますが、私たちがこれから社会に出るときに必要なのは、知識や技術よりも自分自身の生き方の基準とか価値の基準をしっかりと持っていくことだと思います。私たちがこれから出て行く社会は暗闇に覆われていると思います。そこには善悪の基準が無数にあり、一方で正しいと言われることがもう一方では間違いだと言われていきます。学生である私たちが知るだけでも山のようにあります。そんな闇の中を私たちは自分自身で歩いて行かなければなりません。そこには様々な誘惑が私たちを待っていると思います。そのとき自分の中にしっかりとした基準を持っていれば、それに流され、引きずられ、自分を見失い、間違った道に進んでしまいます。社会に出たらもうそれまでのように親や先生が背中を押してくれるわけではないし、行き先を教えてくれるわけではありません。自分自身で判断して進まなければならないし、家族を持てば今度は自分がパートナーや子供たちを引っ張っていく責任があります。そのためにも自分自身が揺るぎ無い基準を持って暗闇を進んでいかなければならないと思います。

この明治学院が信仰するキリスト教は私たちが自分たちの心を見つめなおす機会を与えてくれています。神様は私たち人間がどのように歩んでいけばいいのかを、イエス・キリストを人間として与えてくださることを通して示してくださいました。イエス・キリストは人間として生涯を送ることを通して、何が正義で何が悪なのか、何が罪なのか、そして罪深い私たちがどのように生きていけばよいのかなど、人間としての生き方を私たちに示してくださいました。イエス・キリストが人として自分の生き方を示すことで、私たちの心を照らし、私たち自身はその生き方に対し、どう考えるのか、普段は意識しない私たちの土台となる部分に光を当ててくださったのです。今日の聖書にあるように『わたしは世の光である。わたしに従う者は暗闇の中を歩かず、命の光を持つ。』とっています。イエス・キリストに照らされた光によってイエス・キリストの存在を知り、自分たちを知ります。そしてイエス・キリストに従うことで私たちは光に照らされ迷うことなく社会の中を歩んでいけるのです。また、もし暗闇の中で迷うことがあってもイエス・キリストはその光をもって私たちの位置と私たちが目指すべきイエス・キリストの位置を示して下さい、再び進んでいくことができるのです。

白金校舎に来てからの2年間というのは本当にあっという間だと感じます。社会に出る前に与えられたこの場所でもう一度イエス・キリストの光に照らされ、自分自身の心を見つめなおしてみたいと思います。

政治学科4年
1月18日奨励

叩いたドアの先には？

マタイによる福音書 7章24 - 27節

滝川 祐

本日の奨励のタイトルにある「ドアを叩く」とは、2002年の夏に私が参加した宗教部主催のワークキャンプで掲げたテーマから取りました。ワークキャンプについてはあとで説明しますが、そのとき掲げたテーマは正確には Knock the door, Hug each other! (ドアを叩きましょう、そしてお互いに抱き合ひましょう)でした。これは、マタイによる福音書の7章7 - 8節「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる。だれでも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。」を元としています。

本日こうしてメッセージをする機会を与えられ、自分の大学生活を改めて振り返る時間が持てました。そこで今日は、私が明治学院で叩き、そして開かれた「ドア」の先にあった、ひとつのお話をしたいと思います。

私が明治学院に入学したのは2001年の4月です。大学に入るまでは、小中高と公立の学校に通っていたこともあり、宗教とは一切縁のない生活をしていました。しかし、その生活はミッション系の大学に入学しても同じことで、実際にこの大学のチャペルに入ってみるのにも最初は抵抗がありました。「キリスト教の基礎」という明治学院の学生にとっては必修の科目があるのですが、その授業ではチャペルレポートというこのチャペルアワーをレポートするという課題がしばしば出されます。しかし、幸か不幸か、私の場合、そのレポートすらなかったために、結局チャペルを訪れるまでに1年半以上もかかりました。

私がチャペルを訪れるきっかけとなったのは、冒頭でお話した大学2年のときに参加した宗教部主催の海外ワークキャンプです。この海外ワークキャンプはフィリピンに2週間程度滞在し、現地のあまり裕福では

ない人たちとともに彼らの家を作るというプログラムです。

こうして、このチャペルの ドア を叩いた先には、非常に多くの出会いと経験があり、それは今も継続しています。来月、私は明治学院の仲間16名とともに再び、先ほど話したワークキャンプと同様のプログラムを学生のみで企画し、出かけることになっています。今回訪れる場所はインドです。

皆さんもご存知のとおり、インドは昨年末に起こった津波により大きな被害を受けている国のひとつです。今回は実際に被害にあった現場を訪ねることはせず、津波それ自体の被害はなかった内陸部のバンガロールという都市に滞在することになっています。それでも、あの津波の映像をテレビで見たときのショックと、自分もまた将来的に何らかの災害に遭遇する可能性が十分にあるということ（これは被災から10年を迎えた神戸や、新潟の震災を思い出していただければみなさんも感じるのだと思いますが）、その切実さを持ってアンテナを張れば、被災国の状況はよりリアルに感じるができるのではと思っています。

大学2年の夏に訪れたフィリピンから来月訪れるインドまでの2年半の間、明治学院における学生NGOであるハビタットMGUの立ち上げに力を注いだり、その延長で途上国の雑貨販売を行ったり、あるいは途上国に家を建築するための資金を募金活動によって集めたりなど様々な経験をしてきました。この経験を支えたのは多くの出会いです。ワークキャンプという機会を与えてくださった先生からは、今度は自分が社会に何か貢献し、また他者が貢献する場所を提供するのだという、価値観を大きく転換する機会を与えられました。たとえば、街頭募金とはその実践で、お金はあるけれども途上国に何週間も行く時間のない多くの社会人と、途上国で助けを必要としている人たちとを、私たち学生が「架け橋」としてつなぐ、募金とはそういう行為なのです。そうした思いで募金活動はしておりますが、それでも足を止めて募金をしてくださる多くの理解ある人たちからは、利害関係のまったくない人と人が支えあい、つながりあうことができることを思い知らされ、毎回感動しています。

ドア を叩くことで、変わった世界観があります。それは家についてです。先日、あるトークセミナーに参加する機会がありました。その中でタイとミャンマーの国境を行き来しているストリートチルドレンの中には、自分の生活を犬猫と同じかそれ以下だと思っている子どももい

るという話がありました。人間が人間として生きるとはどういうことでしょうか。逆に、人間が人間として生きられないとはどういうことでしょうか。

昨年の11月から野宿者についての勉強会に参加しています。そこで、考えさせられたことがあります。それは、職を失い、家族を失い、家を失い、それでも命は失わずに生きるとき、人は必ず食べることを欲するということです。しかし、そう欲することと、実際に飢えをしのぐために人前でゴミを漁ることとの間には非常に大きな隔たりがあります。人前でゴミを漁り、口にするという行為は羞恥心を捨て、何年も何十年も築いてきた自分の人間性を壊すということです。野宿者の方たちが、自分の食べるもののことを「エサ」と呼ぶのも、人間として一線を越えてしまったことに拠るのだと思います。

「エサ」とはそれこそ、犬や猫が食べるものに使う言葉です。ペットショップやその関連商品が氾濫し、いまや家の中にペット用の部屋すらあるという時代においては、もしかしたら犬や猫にすら「エサ」という言葉は使わないのかもしれませんが。そんな時代において、野宿者やストリートチルドレンは、いまお話ししたような状況に置かれているのです。

英語にホームとハウスというふたつの言葉があるように、日本語の「家」という言葉にも建物としての家と家庭というふたつの意味があります。現在も実家から大学に通っているため、なかなか家や家庭について考えるという機会はないのですが、先ほど話したワークキャンプのなかでホームステイをしたことは、それらについて考える数少ない機会のひとつとなりました。さて、みなさんがもしホームステイを受け入れるかどうかの選択をする立場になった時、まずどんなことを考えますか？

私の場合、というより自分の家を持っているわけではないので我が家の場合、まずゲスト用の部屋があるかどうかを考えてしまいます。しかし、これは考えるまでもなく、そうした部屋はないために過去に1度としてホームステイを受け入れたことはありません。それでは、私がワークキャンプでお世話になった家はどうかと言えば、過去2回ともゲスト用の部屋がある家になど泊まったことはありません。重要なことは、ゲストと共に過ごす場所があり、ゲストを家族のように受け入れることなのではないかと、実際に自分がそういう扱いを受けて感じました。つまり、重要なことは家と家庭だったのです。

あらためて、人間が人間として生きるとはどういうことでしょうか。昨日、国連で「難民」と認定され、日本でも難民申請をしていたトルコ国籍のクルド人のある家族の内、父親とその息子だけが日本の入国管理局の決定により強制送還されたというニュースがありました。クルド人は国を持たない民族で、そのために国際政治に翻弄され、特にトルコでは迫害が90年代以降エスカレートしたために、彼らは来日したという経緯があります。家族が平気で引き裂かれる時代だからこそ、最低限の家と家庭の必要性を声を大にして述べたいと思います。

あるヒット曲の一節に次のようなものがあります。

「閉ざされたドアの向こうに 新しい何かが待っていて
きつとぼくを動かしている
いいことばかりでは無いさ でも次の扉をノックしよう」

奨励のタイトルはこの一節も意識しているのですが、この歌詞の通り、叩いた ドア の先にはいいことばかりがあるわけではありません。叩いても開かれないドアがあります。入りたくても落ちた大学があるように、自分の希望に合っても落とされる会社があります。求めるだけではダメで、求められる必要があるのです。しかし、私がメッセージとしてお伝えしたいことは、「叩かない ドア は決して開かれることはない」ということです。 ドア を叩くことで初めて、受け入れられたり、あるいはその反対として断られたりという結果が現れ、その先に私たちが進むべき道が生まれるのです。

私は立ち止まることを否定はしません。特に拒絶されることはショックで、立ち止まり、悩むこともあるでしょう。しかし、それを試練と受け止めてみてください。それぞれの人生を振り返ってみれば、常に ドア を叩く主体として自分の人生を選択し、コントロールしてきたかと言えば、必ずしもそうではないでしょう。むしろ私たちは、何かに導かれたような出会いや経験を数々し、そこに意義付けをする主体なのではないでしょうか。

最後に、私自身へは次のことを言い聞かせて生きていきたいと思っています。人生は私たちの意志とは関係なく、理不尽に命が奪われることがあります。それは地震や津波などの天災、人為的に作り出される戦争や貧困、あるいは誰のせいでもなくそれでいて誰もが患う可能性のある病気などによってです。そのことを覚悟した上で、新しい出会いや経験を

を意義付けながら、主体的に生きていきたいと思っています。

今回の奨励で私が述べた ドア とは、チャンスのことでもあります。私がこれからも明治学院で過ごされるみなさんへメッセージとしてお伝えできることは、この明治学院には多くの出会いや豊かな経験をする ドア 、チャンスがたくさんあるということです。どうか充実した日々をお過ごしください。

政治学科4年
1月19日奨励